魔法と変態

さくらさくらさくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法と変態

【Ｎコード】
Ｎ２５７１Ｊ

【作者名】
さくらさくらさくら

【あらすじ】
〔おしらせ〕今後、魔法と変態は、オモテの更新はありません。詳しくは最終話と、さくらさくらさくらのマイページをどぞ！

魔界を統べる、魔族の頂点に立つ魔王閣下。彼の癒しであり、愛であり、すべてであるただ一人の、妹君。御年五歳。
眉目秀麗。でもシスコン。
冷静沈着。でもシスコン！
これは、もうどちらかと言えば、望む近親相姦！な彼の魔界の生

活をつづった、コメディ・・・だったんです。

第一話：義兄と義妹（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年も一年、よろしくお願いいたします。

第一話：義兄と義妹

　占いの大鏡が壊れた。

　それが、第一報だった。救いの女神の転生の知らせは世界中の王家に知らされた。
　ガズバンドの大地に伝令の竜が飛ぶ。
　各国王家直属の占い師達が占う。
　けれども、女神生誕の知らせは入らなかった。
　世界中の隅々まで調べられたが、そこに産まれた嬰児には女神の証がなかったのだ。
　女神の証。胸元に赤く咲く五片の花の文様。
　その年に生まれた女児は全て、全て調べつくされたが、一向に発見されなかったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　そして同じ頃、ガズバンドの地に在って、遠くはなれた魔界に、嬰児が誕生した。
　魔界を統べる魔王の第６７５人目の皇女として。
　その子供の胸元には赤い花のあざがあったとかなかったとか。
　その子供は魔族として産まれたにしては、魔相がなく。
　鱗もなければ、強靭な爪、牙もなければ、魔力もない、いささか、魔として頼りない子供だった。
　しかしその美貌たるや、垂涎の的。
　その、幼いながらも震えるほどの美貌に、かの魔王が、あろうことか。
「神よ！」

と讃える始末。
…ちなみに神を讃える言葉を残した魔王は、その瞬間石化し、魔力も消滅したそうな。
そして起こるは、魔王の座を賭けた血みどろの戦い。
魔王の御子６００名余りが、血で血を洗う戦いを始めた。
魔界大戦の勃発であった。
だが、魔王の御子と言えど力の差は歴然で、心ある者達は、力があり知恵がある者の台頭を待ち望んでいた。それは日和見を決め込んでいた魔界の住人達をも巻き込んでの闘争。
五年に及ぶ戦いに幕を閉じさせ、それを征したのは。
魔王の第５５５番目の御子。
居並ぶ魔族の中で、最も美しく、もっとも残酷で、最も力のある・・・アルファーレン・カルバーン（以下もっとずらずらと名前が連なるけどめんどいのでパス！）
紅の貴公子。
冷徹の魔軍師。
冷酷の代名詞。
などなど。上げれば切がないほどの、二つ名を持つ、美貌の魔将軍閣下だった。
彼の正義は、自分。彼の行いこそが正義。彼を止めることの出来るものは、魔界ひろしと言えどもただひとり。
彼の君が溺愛するたった一人の義妹姫、（ちなみに妹、義妹は他にも２００名ほどいる）名をエイミール・リルメル、（五歳）のみであった。
彼が、魔界大戦に参戦したのも、エイミールの存在があった。
それまでは大戦などどこ吹く風で、エイミール相手にお茶を楽しんでいた程で、参戦の意思はなかった彼。その彼を怒らせたのが、エイミールの去就騒ぎ。かの魔王崩御を誘発した美貌の赤子は彼女であった。あれから、五年。御年五歳の見目麗しい、華のような少女の存在が決戦の要となった。

かの大戦の引き金となったその美貌の姫を妃にと望んだ御子がいたことに端を発する。
なんといつの間にか、魔界大戦を征した者の戦利品のなかにエイミールの名があったのだ。
彼の君は烈火のごとく怒り狂った。その怒りは魔王の御子達を焼き尽くし、参戦していた兄弟姉妹を焼きつくし、殺しつくすまで収まる事はなかった。
アルファーレンにとって、エイミールは癒し。
アルファーレンにとって、エイミールは愛。
アルファーレンにとって、エイミールは全てであった。
愛しくて愛しくて愛しくて堪らない、義妹。
昔はなぜ血の繋がりがあるのだと憤慨し、父魔王を殺してやりたいほどに憎んだものだったが、（ま、憎んだところで相手は石…）その血の繋がりがあるからこそ、エイミールの無償の愛が受けられるのだとむりやり納得してからは、昼になく、夜になく、エイミールの笑顔のために、アルファーレンはこの五年を生きたのだ。
その愛しい義妹の名が、覇王となった者に与えられる戦利品の中に在った事。
身を焼き尽くす怒りの波動で魔界が大きく揺れたのを、彼は感じていたのか、いなかったのか。
彼が戦闘に参加して、一気に加速した戦火が、敵と見なしたものどもを焼き尽くすまでに要した時間は僅か、三時間。
五年を要した魔界大戦の終焉を、焦土と化した大地の只中で、彼が思うはなにか。
彼が、思うは…。

アルファーレンは愛しいエイミールにどう謝ろうかと、焦りながら考えていた。
なぜなら、今日はエイミールの生誕の日。
彼女の側で一日を過ごすと約束したのはつい昨日だったのに。

「三時間はちと、時間がかかりすぎたか…。エミーの好きな人界の花でも持って行ってやるか」
魔界がはた迷惑なシスコンに掌握された瞬間だった。

魔王にとって、エイミールは華。
魔王にとって、エイミールは命。
魔王にとって、エイミールは愛。
誰も彼を止める事は出来ない。
誰も彼を止められない。
ただ、ひとり。を除いて。

第一話：義兄と義妹（後書き）

はい。

いかに美しくとも、実力があろうとも、冷酷無比で冷徹になれても。妹命で、むしろ、近親相姦望んじゃってるあたり、だめじゃん！それっ！！って、突っ込んでもらえれば、作者としては、本望です・・・。

ってか、まじで、新年早々、変態でごめんなさい。

第二話：義兄ふたりと義妹

時は少々さかのぼる。

「急げ！奴の弱みを手に入れれば、あるいは巻き返せるかもしれん！」

空を駆け上がり先を急ぐ者。騎竜の背中で激を飛ばす者。自らの翼に風をはらませ自在に羽ばたく者。いずれも屈強な魔界の公子たちである。

先を争って目指すは、瀟洒な佇まいの魔城。

突然大戦に参戦し、殲滅戦を仕掛けた相手・・・アルファーレンの居城であった。

「エイミールをこの手にすれば、いかな彼奴とて大人しくなるはず！」

「・・・本当、馬鹿」

声は、真上から落ちてきた。

慌てる公子たちの前にゆっくりと下りてきた者は、藍色の髪、藍色の瞳の美丈夫。苦も無く彼らの眼前に立ち、冷めた眼差しで睥睨する。

「アマレッティ！き、貴様、アルファーレンに味方するのか！」

アマレッティ・ゼランドはその言葉に優美な眉をゆがめた。

嫌そうに相手を見て、大げさにため息をつく。

「・・・俺はアルファーレンの味方じゃないぞ。大体、手に負えないからってエイミールに手を出そうなんて、紳士じゃない。おまけに・・・」

彼方を見ずに後方へ、魔力を放つ。閃光があたりを焼き払った。

「・・・人が話しているのに、隙を伺うなんて、姑息にも程がある・・・」

「ア、アマレッティ！我らにつけ！我らにつけば、エイミールはお前の・・・！」

「うるさいな」
黙れよ。
声が彼らの耳に届く前に、彼らの意識は白く消え去った。
そこにいた公子達の燃えカスを前に、アマレッティはふんと鼻を鳴らして、誰にとも無く呟いた。
「これしきの攻撃をかわせなくて、どうして、魔王戦に名乗り出るんだ？大体、あの用意周到な奴が何の策も講じずに城を空けるはずが無いだろうに。城に近付いただけで、消滅させられるのが判らんほどの馬鹿に、奴が後れを取ると本気で思ったのか？」
有り得んな。
城を囲む鉄壁の結界に目をやって、やれやれと首を振り、肩をすくめる。
アマレッティが見やるはアルファーレンの城。その城内に隠されたエイミール。
「あーあ、早く帰って来いよ。シスコン兄貴。エミーが起きちまうだろー。まったく、朝も早よからたたき起こされた俺の身にもなってくれ・・・」
やや、やさぐれ気味に呟いて、アマレッティは空に浮かんだまま器用に胡坐をかいた。
膝を軸に頬杖をつく。
「時間外労働に対する正当な報酬として、エイミールのキスひとつじゃ割りに合わんな・・・」
しかし、それでも。
エイミールの満面の笑みと、柔らかな唇の感触を思い浮かべるだけで、幸福になれるのだから、仕方の無い事なのかもしれない。
「くちびるに、って言ったら、アルファーレンが切れるかなー・・・」
そう呟くアマレッティも立派なシスコンだった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊

同じ頃、そのアルファーレンの居城では、小さな戦いが起こっていた。

金糸の髪を風に遊ばせ、ふっくらとした頬もすべらかな、可憐な少女が、翠の瞳に恥じらいを乗せて、朱色に肉付いた唇を震わせていた。

彼女のまん前には、存在感の重さがそのまま全部胸にある！超絶爆裂巨乳美女が、すべらかな黒髪を背中に流して少女に迫っていた。黒い瞳がきらん！と輝く。その手には、レースで縁取られた、きわどいカットの、・・・それって、ドレス？本当に？な物体が。

「ね、ねえさま、その、こんな服、エイミールには似合いません・・・！」

「なーにを言うのじゃ。わらわのエミーに似合わぬ服などあるわけがなかろう！」

そーれ、着せ替えたいむじゃー！

エイミールが引いた瞬間、目にも止まらぬスピードで、美女が少女を捕まえた！

ぽんぽんとパジャマ（アルファーレン選）を脱がされて、エイミールは小さく縮こまった。

その小動物のもがきにも似た可愛らしい動きに、リアナージャはたわわな胸を揺らして（？）甘酸っぱい疼きをからだで表現した。

か・・・。

可愛いのじゃー！なんだ、この可愛らしさは！虐めて虐めて、恥じらいに顔を染め上げてしまいたくなるではないかー！アルファーレンめ！こんなカワユイイキモノを隠して育てていたなど、許しがたい！

かくなる上は、カワユイエミーを色っぽく飾り付けて、アルファーレンの仏頂面がどう変化するのかを間近で見るのじゃー！

・・・などと考えているなど、エイミールにはわからない。
そもそも。
ねえさまと呼んでいるが、正真正銘初対面・・・。
（に・・・にいさまー！アルファーレンにいさまー！このお姉さま、いったいどなたですかー？）
エイミール・リルメルは、軽いパニックに陥っていた。
朝も早くに強襲され、冷たく研ぎ澄まされた魔力に怯えた侍女が、リアナージャ様と叫んだので、彼女に習って「りあなーじゃ様」と呼んだら、巨乳が身悶え、更に何度と無く名を呼ばされて、最終的には「ねえさま」と呼べと言い聞かされて今に至る。
そして。
あれよあれよと飾り付けられ、清楚可憐な装いの中にちらりと垣間見るエロチシズムが見るものの想像を掻き立てるドレス。
しかも、それを身に纏っているのが、天使と見紛う美少女。
その、恥じらいに頬を染め、涙目で震えながら相手を見上げる、その様に。
巨乳が身悶えしつつ叫んだ。
「・・・くぅっ！エミーの可愛らしさに、わらわ、久しぶりに男を思い出したわ！そう、股間が疼く、この感じ・・・！！！」
その瞬間、脳天に直撃を喰らっていたリアナージャ・ナーガ（両性）だった。
かわいい。
かわいらしすぎる。
かくなるうえは攫って帰ろう。と、当初の予定をかなぐり捨てて。
がっしとエイミールを抱きしめ、次の行動に移ろうとした。すなわち、転移。自分の居城に帰ろうと、魔力構成を始める。
「・・・まてや。こら」
止めに入ったのはアマレッティだった。
抜かりなく、転移法陣に魔力を叩きつける。
「なんじゃ、洟垂れ小僧か。そこを退け。わらわはこれからエミ

ーにじっくりと、愛の何たるかを教えてあげるのじゃ」
「リアナージャ姉上！いや、兄上？アルファーレンが切れますよ。それに、エミーが泣くって！エミー、アルファーレンから離れるのいやだろう？」
アマレッティの藍色の瞳に、真摯な色を見て取って、エイミールは攫われちゃ叶わんと頷いた。
「ねえさま、エイミールは、アルファーレンにいさまのお側がいいです・・・！」
何の力も無い、ただ、前魔王の娘なだけの、寄る辺無い子供を庇護し、擁護し、最高の教育を施してくれた、聡明なアルファーレン。受けた恩は限りなく、返せる当ても無いエイミールにとって、アルファーレンは太陽であり、何物にも変えがたい全てであった。青銀の髪、青銀の瞳の、美しくも静謐な、魔界きっての美貌を持つ、エイミールの憧れの、義兄。
エイミールはアルファーレンの側で、受けた恩を返すべく、甲斐甲斐しくお世話をするのが日課で、それが何よりも大好きだった。
そして、それを知っていたのが、アマレッティ。
苦い思いで、何度、一生懸命なエイミールを諌めた事か。
（だまされてる。だまされてるぞ、エミー！奴は、依存度を高めていくエミーに、内心、喜んでいるんだぞ！）
アマレッティは、計算高い黒い奴を思い浮かべた。
このまま、放っておいたら、近親相姦の何たるかも分からんエミーが毒牙に掛かってしまうと、何度焦った事か！
・・・でも、甲斐甲斐しく世話をするエミーの可愛らしさに毎度、腑抜けになるのが落ちなのだが。
「・・・リアナージャ兄上、エミーは可愛いもんな・・・。可愛くてたまんねえから、攫って帰りたいのは分からんでもない。俺もそう思った！ンで、攫った！！・・・けどエミーはシスコン兄貴にぞっこんなんだよ。攫って帰ったら、泣くだけで笑いかけてもくれなくなるぞー。ちなみに俺はまた、笑ってくれるまで一年かかった」

気難しいアルファーレンが、盛大に年の離れた義妹を引き取ったと聞いた時、何の冗談かと耳を疑ったものだ。軽く２００歳は年の離れた、それも幼女。軽い気持ちで見に行って、アマレッティは無自覚の恋に陥った。衝撃だった。

アルファーレンに向ける愛情に満ちた微笑を見て、アマレッティは出遅れた事に歯噛みした。

その笑顔を見たくて、自分に向けて欲しくて、攫った。

けれど、声もなく泣き続けるエイミールに折れたアマレッティが、エイミールをアルファーレンに返してから、一年間。エイミールはアマレッティを見るとアルファーレンにしがみ付き震える始末で、一向に微笑んでくれなくなった。

「なんじゃとっ！エミーが笑ってくれないなどと・・・そ、そんな・・・」

見る見る青褪める巨乳美女。

その彼女（彼？）に慰めの言葉をかける、美男子。

絵になるが、話題は、妹が微笑んでくれるか、否か。

「な。兄上、諦めて、アルファーレンの帰りを待とう。このさい、うんとエミーを可愛らしく、えろく！着飾らせて嫌がらせしてやろーぜー！」

「そ、そうじゃな！アマレッティ。感謝するぞ！エミーの笑顔を失ってしまうところじゃったわ！」

かくなる上は！

「えろくカワユク！アルファーレンの鼻の下が伸びるのを拝むのじゃー！！！」

魔界大戦の終結を、なんだか間違った方向で待ち望んでいる義兄ふたりだった。

第二話：義兄ふたりと義妹（後書き）

うん。なんか、こんな感じ。

第三話：義兄さんにんと義妹

魔界大戦を征し、エイミールの為に人界の花束を手に、アルファーレンが己が居城に帰ったのは、アマレッティとリアナージャが散々エイミールで（着せ替えごっこ！で）遊んだ後だった。

「あ」

アルファーレンを見つけて華のように微笑んだエイミールが、彼の元に駆けつける。

「アルファーレンにいさま、お帰りなさいませ！」

・・・アルファーレンは瞬きすら出来なかった。

瞬きするこの目がにくい。

己が理性を最大限引き出して、エイミールの姿を焼き付ける。・・・目に。脳髄に。

そうして、心行くまで堪能してから（顔色は一向に変わっていないが）敵と認識した輩に険しい眼差しを送った。

常人の魔族なら凍りつくだろう眼差しに、だが、ふたりはどこ吹く風？そよ風？な感じで氷の眼差しを叩き落す。

にやりと妖艶に微笑んだは、リアナージャ・ナーガ。

前魔王の第三子にして、竜族の長。蛇淫の女王。

「・・・なぜ、兄上がここにおられる・・・」

彼が、さらりと流し見るは、アマレッティ。

その目は、貴様の魔力はお飾りか？と言っている。

その冷たい眼差しに怯みもせず、アマレッティは、にやにやと笑み崩れていた。

「ん？リアナージャ兄上は、エミーの可愛らしさにノックダウンしたんだと！当初は魔界を掌握するつもりで、兄貴の結界抜けてきたらしいけど・・・」

「あの程度の結界。わらわほどの実力者に掛かれば、ざるも同然！」

えっへん！と。胸を最大限強調して威張る蛇淫の女王。・・・実力はあるのだが、なんか、違う。
「寝室で眠るエミーの横顔見たら、魔界掌握なんかどうでも良いことに思えたんだと」
「うむ。あの、ぱじゃまとやらも捨てがたいが、ねぐりじぇと言うのも捨てがたいからのう・・・。そうしたら、このイキモノが目を覚ましてのう・・・。可愛らしい唇で、りあなーじゃさま、と呼んでくれたのじゃ。ああ・・・。その可愛らしい事！たどたどしく、しかし真摯に名を呼ばれて、わらわは、久しく忘れていた股間の疼きを思い出したのじゃ！」
がごんっ！
にっこり笑いながら、アマレッティがリアナージャに容赦ない一撃を加えていた。
「エミーの前で、いかがわしい言葉は慎んでもらおうかな。兄上！」
それを見て、アルファーレンがため息をついた。馬鹿だ。
おそらく結界術においてはアルファーレンを凌ぐ実力者である、リアナージャ。彼との決戦が勝敗を決めるであろうと思っていたのに。敵であるはずの男（女？）は愛しいエイミールを着せ替え人形にして遊んでいたなんて。・・・しかも、自分の居城で。
保険をかけるつもりでたたき起こして手伝わせたアマレッティも、彼（彼女？）と息の合ったそぶりで笑い転げている。
魔界で一二を争う実力者なのに、揃いも揃って、一人の少女に振り回されているなど。
ああ、ちなみにその中に自分は入っていない。（当然だ。私はエミーに愛されているのだから！）
気を取り直して、またエイミールを見つめる。
・・・可愛らしかった。
着飾らせてくれた相手は気に喰わないが、確かにこのドレスはエイミールに似合っている。

清楚、可憐な美少女が身に纏った淡い朱色の総レースの・・・・。
？いや、ちょっと待て。
身動きするたびに、彼女の可愛らしい胸元がちらりちらりと垣間見える。
しかもこのドレス！伸びやかな足のラインも、細い腰のラインも、あまつさえ！可愛らしい、お尻のラインも丸分かりではないか！薄い！薄すぎるぞ、リアナージャ兄上！
名実共に己の物になった愛しい、愛しい、義妹。
その彼女が、こんな扇情的な格好を、自分以外の者の前で晒しているなど！
冷徹な眼差しが揺らぐ事はなかったが、静かに、低く声を出す。
「・・・エイミール。生誕のお祝いに、私があげたドレスがあっただろう？あれを着ているエミーを是非見せておくれ・・・。そのドレスも似合っているが、あのドレスも着てくれないか？」
そう。こんなドレスは、寝室で、私の前でだけ着ていればいいのだから。
ついでに脱がせるのも、もちろん私だが。（それが、何か？）
「はい！アルファーレンにいさま！」
にっこり笑って駆け出したエイミール。その後を追うべくアルファーレンは踵を返した。
立ち去る前に、冷酷な一睨みを忘れずに。
まあ、睨まれたところで、竦む相手ではないが。
にやにやと笑み崩れたアマレッティが、最早我慢できんと声を上げて笑い始めた。
「くく、く。見た？見た？リアナージャ兄上！アルファーレン兄上の顔！！！」
「うむ！このリアナージャ、とくと見たぞ！鼻の下がちょっこっと伸びておったな！」
「あの！アルファーレン兄上の慌てた顔が拝めるなんて！あぁ、生きてて良かった！」

「うむ！わらわも、生きているのに飽いておったが、まだまだ楽しい事があるのじゃのう！あのカワユイイキモノと言い、仏頂面のアルファーレンの惚けた顔！見ものじゃったぞ！」
ぎゃはははは。と。
高笑いの響く部屋をあとにしたアルファーレンは、エイミールの部屋へと急ぐ。
はたして少女は。
うんうんと、唸りながら小さいからだを伸ばしたり縮めたりしていた・・・。
小さな腕が、背中のファスナーと格闘している。
それを微笑ましげに見つめた後、アルファーレンはエイミールの背後に立ち、そっと、ファスナーを下ろしてやった。
胸元を押さえつつ、振り返ったエイミールが、微笑む。
「にいさま、ありがとうございます！」
すぐに着替えますね？ちょっと待っててください！すぐにいさまの分のお茶の準備をしますから！
「慌てなくていいぞ。エミー。あいつらはどうせ暇なのだからここに居るのだ。さ、腕を・・・よし。髪を上げていなさい。ボタンを留めてやるから・・・」
「うう、にいさま、エイミール、ドレス一人で着れる様になる日が来るんでしょうか・・・」
そんなふうに申し訳なさそうな彼女を前にすると、アルファーレンは居ても立ってもいられなくなる。抱きしめて、抱き込んで、誰の目にも触れさせたくないのだ。
そして、思いのままに抱き込んでも、幼い彼女はアルファーレンの気持ちに気付かない。
ただ、妹に対しての愛情表現だと信じて疑わないのだ。
それが、歯がゆい。
だが、やはり、幼い彼女に思いの丈をぶつけられる事は、やはり無く・・・。

愛しい義妹を抱きしめて、その柔らかさ、芳しさを堪能するに留める。
いつか、気付いてくれる日が来ると良い。
この私の眼差しに。
そうして私の元に来てくれれば良い。
そのために。
優しい、聡明で、頼りになる、ひとりの兄ではなく、男として見てもらえるように、精一杯努力をしよう。

第三話：義兄さんにんと義妹（後書き）

結界術においては、ややリアにいさんが勝り、魔力戦、体術戦ではアルにいさんが断然トップ。
総合的な能力値もアルにいさんがダントツです。

第四話：変態（シスコン）と義妹

五歳の生誕の祝いに贈られた優美なドレス。
エイミールの可憐さを最大限引き出す完璧なつくりで、淡い青銀の輝きが目にも鮮やかなそれ。
「独占欲を感じるのぅ・・・」
「あー・・・。自分の色合いを身に纏わせて、着せるのもアルファーレンなら、脱がせるのもアルファーレンだな。見てよ、リア兄上。背中、ファスナーじゃないんだぜ？全部貝殻磨いた磨きボタンだ」
しかも、その数！
まるで真珠の輝きの小さなボタンが、エイミールの背中をたて一線に飾っている！
「うむ。執念を感じるのぅ・・・」
「俺ならあんな面倒な服、引きちぎってしまうけど、エイミールはなぁ・・・。きっと言われるまま背中を差し出してるに違いない」
完全に慕いきっていて、危険など感じないのだろう。半裸の背を、一つ一つ留めていくボタンの影でしっかりと目に焼き付けているに違いないのに。あの変態（シスコン）め！
「なんか、悔しいのぅ・・・」
半分嫉妬。半分呆れて見つめる先に、まるで絵画のように、義兄と義妹。
青銀の髪、青銀の瞳の美貌が目を細めて、金の髪、翠の瞳の美少女を見つめていた。
愛しさを隠そうともしないその眼差しは、悲しいかな、幼い少女には気付かれもしないが。
愛らしい少女はアルファーレンが選んだドレスに身を包んで微笑んでいた。
金の髪を飾るリボンも、やや高い位置で結ばれた腰のリボンも、

スカートの裾を飾るレーシーなフリルも、足元を飾る靴下も、その靴までも！・・・落ち着いた色合いの、青銀だった。
アルファーレンの無言の執着を絵に描いたような、少女。
その愛らしい少女が、身の丈には不釣合いな大きさのポットを抱え上げ、お茶を入れ、更にお菓子を手にとって甲斐甲斐しく兄達にサーブするのだ。
可愛らしすぎる！
反則物の可愛らしさだ！
「リアナージャねえさま、お茶をもう一杯いかがですか？アマレッティにいさま、こちらのお菓子、御口にあうでしょうか？」
「うむ。頂こうかの。エミーはお茶を入れるのが上手じゃの」
「エミーが用意する菓子は、いつも工夫がされていて、美味いぞ」
「・・・当然だ。エミー手ずからの作品だからな。幼くとも、エミーの菓子の腕は確かだぞ」
アルファーレンが自慢げに頷いた（ただし無表情）。
ある時、エミーがたまたま作った菓子をアルファーレンが褒めた事があった。
それから、エミーは勉強の合間にお菓子作りを城の料理長に習い始めたのだ。
すべては、アルファーレンのために。
甘いものが苦手な彼の口に合うように吟味された菓子は、今や、城の料理長自らが、エミーに教授して製作されている。
さくりと食むと、ほろりと崩れる食感の焼き菓子。
酸味のきつい果物を使った木の実の焼き菓子。
いずれもお茶に良く合う一品だった。
「あーあ・・・。頑張って役に立とうとしているのが分かるから、無理に引き剥がせないんだよなー、俺・・・」
アマレッティが呟く。
リアナージャが目を細め、愛しげに彼女を見ていた。
午後のひと時、夜半から早朝にかけての戦いが嘘のように穏やか

な時間を与えてくれていた。
それが、破られるまで、あとわずか。

喧騒は突然に。
唐突にやって来た。
けたたましい男女の声。それも、一人やふたりではなく。幾人もの、声が。瀟洒な城の佇まいに楔を打った。
「アルファーレン新魔王さま。御前に御意を得ます。わたくし、魔王閣下のお力に添おうと馳せ参じました。どうぞ、お側近くに仕えさせて下さいませ」
「始めて御意を得ます。魔王閣下」
「魔王閣下。どうぞ、わたくしを召抱えてくださいませ・・・」

「なんじゃ、藪から棒に。寛いでおるのが分からんのか、無粋な奴等め！」

リアナージャの声に、そこに集まった輩が慌てて膝をつく。
「「「リアナージャさま・・・！！！」」」

「いやだね。空気の読めない奴は嫌いだよ」

アマレッティの不満の声に居並ぶ者が顔を白く変化させた。
「「「アマレッティさま・・・！！！」」」

「消えろ。ここに誰が入って良いと言ったのだ」

新しい魔王閣下の静かな声に、その場に伏せた者どもの、顔色が更に白くなった。
確かに、城の侍従長が制止するのを数の力で持って抜けてきたのだ。

祝いに来たのだ、何が悪い！と言い放ってまで。
新魔王に早く目通りしたい一心で・・・打算が見て取れるものであったが。
そして彼らは思いだす。
魔王となった彼が示した力の、他の公子との歴然とした違いを。
あれは、虐殺だったのだ。問答無用で殺しつくしていた。不要と見なした者どもを、草を刈るようにあっさりと。
そして、その魔王の不興を買ったのだ。恐れを抱いた彼らは、目を泳がせて、我を救ってくれる者を捜した。
魔王に進言できる、たった一人の・・・少女を。その少女の姿を目にしたのが、最後の僥倖だった。

「「「私のエミーを、汚らわしい目に映すな！」」」

彼女の義兄三人が、その場に言い放った。
リアナージャが優美に動き、その胸にエイミールを抱きこんだ。
アマレッティの魔力が、場を一周する。
アルファーレンの氷のきらめきがあたりを幻想的に輝かせ、その美しさの中で息絶えるのだと思い知った痴れ者たちだったが。
・・・震えるもの。立ちすくむもの。怯えるもの。それぞれの顔が紙のように白かった。
だが、だが・・・生きている！

おろおろと目を泳がせた彼らは、悟った。
あの少女がここに居るから。だから我らは生かされたのだ。

「失せろ」

魔王の声に今度は皆が、素早く従って消え去った。
四人以外、居なかった。
リアナージャの胸の谷間で窒息しかかっていた、エイミールが、ぷはあっ！と息をついた頃には。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アルファーレンよ。わらわはお前を支持しよう。だが、お前に取り入ろうとする輩が、エミーに近付いてくるであろ。痴れ者どもに、どう対処するつもりじゃ？」
エイミールが寝室に入り、アルファーレンに添い寝され、眠った後。
リアナージャが切り出した。
「・・・何も。エミーに近付く奴は容赦しないだけです」
その目が雄弁に、貴方でも。と言っている。そんなアルファーレンの独占欲に、鼻で笑って返すは竜の長。蛇淫の女王。
「ふふ。良いのぅ。邪淫に囚われた男を見るのは本に良い気分じゃ！まあの。今日ここに来た奴等はわらわが手にかけてくれようぞ。せっかく寛いで、良い気分じゃったのに、台無しにされるところじゃったわ！エミーに醜い彼奴らを見せとうない一心であの場は殺さ

なかったが・・・さて、縊り殺してくるか・・・」
そう言って、立ち上がった美女に。
「あ、俺も俺もー！」
と同意して立ち上がるアマレッティ。
アルファーレンよりやや年下の彼は、藍色の瞳を細めると、ぐぐっと、からだに力を入れた。
爪が鋭く研ぎ澄まされ、口元には鋭い牙が垣間見える。
獣人の性を前面に押し出して、常にない闘争に燃える藍色の瞳、その彼が背中を震わせれば、長い尻尾が現れた。床をぱしんと打ち付ければ、大きく床が抉れていた。
「・・・久しく見ない姿だな・・・」
エイミールを攫った時以来、か。と、アルファーレンが過去に目をやり呟けば。
軽く笑ってアマレッティが、身を低くした。
「んじゃ、ひとっ走り、行ってくるわ！」
言い捨てて、開かれた窓から放たれた矢のように飛び出していく。
それをしばし見つめたリアナージャが。
「では、わらわも」
と。床に身を沈めていく。足が腰が胸が沈んで行き、残すは美貌の顔のみになった頃。
「リアナージャ兄上。・・・エミーの味方になってくれて感謝する」
アルファーレンの呟きに、リアナージャ・ナーガはえもいわれぬ幸福を味わった。
味方。
なんじゃ、この甘酸っぱい感情は！
「・・・そうじゃの。わらわは、エイミールの味方じゃ。いい響きじゃのぅ・・・」
呟きを残して、美貌の男（女？）の姿が沈む。見事な結界崩しであった。

「やはり、リアナージャ兄上は侮れん・・・」
アルファーレンは小さく呟くと、初めての魔王の詔に応じてくれたふたりに、感謝の思いを寄せたのだった。

第五話：魔王側近と義妹

魔界において、魔王を補佐する側近達の執務室は、その立場上、魔王の執務室の近くにある。

今代の魔王閣下は、聡明で、静謐な、知性と魔性のバランスの優れた偉人であると名高い、アルファーレン・カルバーン。

彼らは彼の治世が訪れた事に喜びを感じていた。ひざまずいて命令を乞うに値する、魔王閣下。

しかも、彼の後ろ盾に名乗りを上げたのは、魔王がアルファーレンでなければ、彼（彼女）だっただろう程の、実力者・・・リアナージャ・ナーガ。

そして、アルファーレンが最も信頼を寄せている（？）アマレッティ・ゼランドであった。

魔王の側を固める、鉄壁の布陣！

それは、側近達の仕事に対する原動力となってもいた。

そして、今日も。

執務室の中は、熱気と活気がこもっていた。

与えられた仕事は山ほどある。

アルファーレン閣下は、妥協してくれないので全力で持って力を・・・結果を見せねば即刻首が飛ぶ。だが、それは一種の緊迫感。仕事をこなす上では必要な緊張だった。

そしてそれを癒してくれる者の存在は、偉大。

（そろそろ・・・）

（そろそろか？）

そわそわ。

しかし、表に出しては不味いので、顔は真剣な面持ちで、厳しくきりりと。

と。
ふわふわとした金色の髪が、整然と整えられた机の合間を縫っていく。
そっと丁寧に、だけど、邪魔にならないように机の隅にコトリ置かれる、ティーカップ。カップの横には恐らく手作りのクッキーが。
軽く会釈をして下がっていく少女の服装は。
淡いシフォンの幾重にも重なった春色の・・・ふわりとしたドレス。
少女から大人への遠く長い階段を昇り切らないその華奢なからだのラインが、伺える。

彼女の姿を間近で凝視してはならない。
彼女に声を掛けてはいけない。
あくまで彼女は空気のごとく扱うべし・・・。
・・・しかし。彼女の姿が消え去った、執務室では。

（（（（（（リアナージャ様、グッジョブッッ！！！））））））

魔王側近と言う立場を嬉しく噛みしめ身悶えている、（おそらく）魔王軍最高幹部たち（・・・いいのかそれで・・・）
彼らは、少女を着飾らせてくれた、リアナージャに賞賛の声を盛大にあげた。・・・内心で。
だって。
・・・アルファーレン様に、われらが喜んでいるなんてばれたら、「エイミール嬢の魅惑のティータイム」がなくなってしまうではないかあっ！！！
聡明で理知的な我等が魔王閣下の、義妹に対する尋常ならざる愛情は、如何な鈍い我等にも、目に見えて明らかだから！
・・・触ったら殺される。
・・・声を掛けたら呪われる。

・・・め、目なんか合わして微笑み交わしてしまった日には・・・！！！（ひいいいいっ）

・・・きっと明日の朝日は拝めまい・・・。

だから彼らは一心に仕事に励む。脇目もふらずに一心に。

頑張っている人には、クッキーの枚数が一枚多くなるんだぞー（うらやましいだろう！）。

エイミール嬢は、そこんとこを良くご存知なのだ！まだ御年６歳なのに！

魔王城に引越しなさってきたばかりの頃は、狼男を見ちゃ泣き、ゾンビ見ちゃ気絶し、空を飛ぼうと奮起してはアマレッティ様に止められていたのにねー（しみじみ）。

魔王の代替わりのために忙しかったアルファーレン閣下ともすれ違いとあって、あの当時、エイミール嬢はどことなく寂しそうだった。

そこで、一計を案じたのが、アマレッティ様。

「エイミールのお茶は美味いからな。午後の執務の合間にお茶を入れて欲しいんだ」

そう言って、渋るアルファーレン様を説得した。

「何もしない、させないままで部屋に入れておくのは、監禁しているのと同じだぞ」

「何かひとつ仕事を持たせて、生き生きとしたエミーを見たくはないか？」

「アルファーレン兄上が言ったんだぞ。エミーの作る菓子は最高だって！俺ももう一度、食いたい！！！」

・・・うむ。まあ、最後はまるで餓鬼の駄々だったが（不敬か？）

そして始まるデリバリータイム。

始めは妖精族かと思った。

絶滅したと言われている、精霊種の生き残りかと。
それほど彼女は可憐だった。

そして、リアナージャ様の悪ふざけが始まる。

始めは可愛らしく。
それがだんだんと裾が短くなり少し屈むくらいで、アンダーがバッチリッ！な状態に。胸元の危うさも、柔らかそうな二の腕も、服の際から除く肌の白さも！
やばいっと思って目を逸らしていた奴のみ、生きて現在ここに居るのだ・・・。（淘汰か・・・）
同志よ！
今日もエイミール嬢は、可憐だった！誓いを忘れて見入ってしまうところだったぞ！
そして、リアナージャ様！

我等で遊ぶのはいいかげんにしてください！

そのうち、マジで魔王閣下が切れますよ！（その前にきっと我らは殺されますが！）
貴女、（貴方？）また魔界大戦勃発させたいのですか！！！
魔王直属側近の心の声は、リアナージャ・ナーガに届くのか・・・？など だ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

エイミールは、ワゴンを押しながら一年前を思い出していた。
アルファーレンの瀟洒な佇まいの居城から、この、荘厳で壮大な魔王城へ来た日の事を。

何もかもが、威圧的で小さなエイミールは押しつぶされそうに感じた。
与えられた部屋は幸い、アルファーレンと同室だったから良かったと感じたが、魔王の世話係と称する女性が幾人も現れて、エイミールを見下ろした。
頭の上できゃんきゃんと叫ばれて、困惑気味に首を傾げていたら、現れたアルファーレンが冷たい眼差しで女達を見、言ったのだ。
「私の世話はエイミールの仕事だ。お前達に用はない。下がれ」
「・・・で、ですが、魔王様、こんな子供では夜伽は無理でございましょう？」
「・・・必要ない。エイミールがいる。貴様らよりも、よほど満足できるぞ」
その言葉になぜか女達に、ぎッと睨まれて立ち竦んだのを覚えている。
聞いたことのない言葉、聞いたことのない口調で話す人々。困惑の色を浮かべていたのだろう、エイミールをアルファーレンは抱き上げた。
優しく抱き上げ、優しい眼差しでエイミールを見つめるその姿に、居た堪れなさを感じた女達が部屋から出て行くまで、アルファーレンはエイミールだけを見つめていた。
「にいさま、よとぎってなんですか？」
「エイミールはまだ知らんで良い。だが、いつか、必ずこの兄が教えてやるぞ。だから、誰かに夜伽をしろと命じられたら、私の名を出して逃げておいで」
いいね？
そう真剣な顔で言い聞かせるから、あの時、エイミールは訳も分からずに頷いた。
よとぎは知らなくていいこと。だけど、いつかにいさまが教えてくれる事。そして他の人に乞われたら、逃げる事・・・。
うん。と、ひとつ頷いて、エイミールはアルファーレンの胸に顔

を埋めた。いつもの、アルファーレンの静謐な香りがする。胸いっぱいにその香りを吸い込んで、エイミールは目を閉じた。

あれから、一年がたって、エイミールは六歳になっていた。

うんうんとワゴンを押して、お茶を出し、お菓子を配る。
飲み干されたカップを回収して洗って拭いてかたずける。
給湯室は簡素な部屋だったが、エイミールがお茶を入れるようになってから、急に予算がついて、激変した部屋だった。
アマレッティが揃えてくれた、お菓子つくりに必要な器具一式。大きな冷蔵庫。オーブンまである。
管理責任者の欄に「エイミール・リルメル」と名前も書いてある。
大きな机もあって、先生がここまで来てくれるので勉強だってここで出来る。
ここでお菓子を作っていると、寂しさも薄れてニコニコ顔になってしまう、エイミールだった。
だって・・・。
顔を上げると、アルファーレンの横顔が見えた。じっと見つめて、それからまたお菓子つくりに没頭する。
・・・給湯室。名前は地味だが、魔王執務室の続き部屋がそれ、だった・・・。
そして、エイミールは知らない。
エイミールが菓子を作っているとき。勉学に励んでいる時。
その日々変わる彼女の表情を、舐めるように見つめているアルファーレンがいることを。
柔らかいからだを抱きしめて、口づけで翻弄したい衝動を堪えて耐えている義兄がいることに。
・・・気付かないのはむしろ、幸せなのかもしれないが。

第五話：魔王側近と義妹（後書き）

気付いたら速攻喰われるね。

第六話：執務と義妹

冷めた眼差しで辺りを見ていた。
毎日が、変わりばえのない単調な日々の積み重ね。
父である魔王の指示の通りに遠征し戦に明け暮れ、虐殺し、殲滅し、魔物も人間というイキモノも、区別なく敵はすべて殺してきた。
賞賛の声も、羨望の眼差しも、意味などなかった。
慈しむ者などいなかった。
心預けて穏やかに在れる時などなかった。
ただ、空いていた。
空虚で、虚ろな魂の入れ物。

それが、わたしだった。

ある時、父魔王に呼ばれてそこへ行ったのはほんの偶然だった。
父の何番目かの妻がそこにいた。
彼女は黒い髪、黒色の瞳の、優雅な美貌の「夜の眷属」の特徴を持った女だった。
夜の眷属とは、吸血族、夢魔族、淫魔族の総称だ。
その夜遅く、その女が嬰児を産んだ。
およそ、子を持つにふさわしくない女が、エイミールの母だった。

女がエイミールを産み落とし、その美しさに父魔王があろうことか、神を賛美し、崩御した時。
女は。
子を・・・エイミールを縊り殺そうとしていた。
「・・・何をしている」
私の声に驚いた顔で振り返った女は、黒髪を振り乱しながら、怒りに満ちた眼差しで私を射った。

「魔王崩御を誘発した赤子など、不吉でしょう！しかもこの赤子、夜の眷属の纏う色をしておりませぬ！金の髪など、どうして！わたくしの子のはずなのに、どうして！！」

そう言って髪振り乱しながら、生まれたばかりの赤子の首に手をかける・・・母。

見苦しかった。

ただそれだけ。

それ以上の感情はなかった。

「・・・要らぬ子ならば、置いていけ。お前が、これからを懸けていた父も死んだ。これからは戦になる。誰もおまえを守ってなぞくれぬぞ」

そう、ため息をつくように言い捨てた。

いった言葉に瞠目した女が、怯えたように辺りを見回し、そして、子捨てをするのに時間は掛からなかった。

背中から黒い翼が飛び出し、風を含ませるように二、三度羽ばたかせ・・・飛び去った。

それを見送るでもなく見たあと、さて居城へ帰るかと踵を返した時。

くん。と衣服が引き攣れる感じがした。

力を込めて身を返せば外れるほどの軽い拘束感。

なにか、と見ればそれは・・・赤子の掌だった。

きっちりと握られた、マントの裾。

あの女が翼をはためかせた時、赤子にマントが被さったのか、その裾を、赤子が握っていた。

そして・・・瞳。

その瞳。

翠の瞳が・・・私を捕らえていた。
吸い込まれるような感覚を、初めて味わった。
心捕らえて、心臓までもが囚われた。
私を捕らえて離さない、その無垢な翠に、今も私は囚われている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「り、リアナージャねえさま、こ、これは、ねえさまだから似合うので、私にはまだ早いと・・・」
「なーにを言うておるのじゃ！わらわのエミーに似合わぬものなどないっ！」
いつかこれと似たような言葉を聞いた気がする・・・。
給湯室と言う名の、エミーのための部屋。・・・と見せかけた、実はアルファーレンの「エミー観察部屋」から、リアナージャとエイミールの声が、ここ、魔王執務室に響いてくる。
その声に。
・・・まーた、リア兄上がエミーで遊んでいるな・・・。と思い至って、アマレッティは頭痛がしてきた。
側で書類を捲っているアルファーレンの手がぴく、と動く。
一段と寒気が強まり、側近達の緊張感が高まっていく。
・・・威圧するな！不機嫌なのは分かったけど、冷気を高めるなあっ！！！
息が詰まる！くうき！空気プリーズ！
うう、無言の威圧は、リアナージャ兄上自身にお願いする！！！
ってか、とばっちりはこっちに来るんだよ！この冷たい空気に耐えられず、昏倒する柔な奴の仕事を、誰が引き受けると思ってんだー！
内心の思いのままに、アマレッティはアルファーレンに進言した。

「あ、兄上！悪ふざけを止めてきてくれよ！リア兄上、俺の言う事なんか聞いちゃくれねーからさ！」
頼むわ！
そう軽く頼んで、自分は残りの仕事に精を出す。
後は任せた！リアナージャ兄上！嫉妬に狂った男の冷たい目線に何時まで我慢できるかなー？そう思って、けけけ、とほくそえんで。寒気が氷河期に突入するなんて思ってもいなかったのだ・・・。

かたと小さな音を立てて椅子から立ち上がった美丈夫が、隣の部屋に消えていった。
それを見送り、ほっと、肩の力を抜く。
周りの側近達も目に見えて顔色が良くなった。
うんうん。こうでなくっちゃね。

目の前には、肌も露な黒い薄絹を羽織った幼女と・・・一見爆裂巨乳美女。
アルファーレンはそれを見た瞬間、鼻血を吹かなかった自分を褒めていた。もちろん、リアナージャの艶姿に、ではない。エイミールの、稀な姿に滾る劣情を押さえ込むのに必死だった。
黒！ここまで黒を着こなすとは！
白い肌とのコントラストが最高だぞ。流石、私のエミー！！！
「おお！どうじゃ、アルファーレン！エミーとおそろいなのじゃー！」
「・・・巨乳邪魔」
大胆なカットが、胸元をV字に切り裂き、へそまで達している。たわわな胸を持つ美女が着る分にはいかんなくセクシーさを発揮する代物。背中も大胆に切り込まれているので、ドレスというより、これは最早・・・。
「下着ではないのか？」
「に、にいさま・・・」

「むう！わらわを巨乳扱いとは！アルファーレンめ！そこを動くな！覚悟せいよ、エミー！！！」
「は、はいっ！」
びしっと直立不動したエイミールに、訝しげな顔で、それでもこの類稀な姿を網膜に焼き付けるのだ！とばかりに凝視し続ける義兄。その大胆なドレスは、エイミールに似合っていた。
「さっき伝授した、あれじゃっ！」
「あ、は、はいっ！え、えと。に・・・にいさま。アルファーレンにいさま」
エイミールがアルファーレンを呼ぶ。その赤い唇。羞恥に染まった頬。
可憐で清楚な少女の、匂い立つ艶姿。
そして彼女は、姉（兄？）に教えられたとおりに、その動きをなぞった。
・・・右足を腰から差し出すように前へ。
すると、深く切れ込みの入ったドレスの裾から、輝かんばかりの真白な太股が！
ご丁寧に黒の総レースのガーターベルトまで装着済み。
その瞬間、前かがみになって何かに敗北した魔王閣下であった。
（・・・）
ぎゃはははははっ！！！ほーれみりゃれっ！あれが悲しい男の性と言うものじゃああっっ！
わが意を得たりと楽しそうに高笑いを続けるリアナージャ・ナーガ。その前で「・・・殺す・・・」と、悔しそうに恨めしそうに睨みつける魔王閣下の姿は、アマレッティの同情を得るには成功だった。

エイミールのその姿は、それ以後封印される。・・・余りにも破壊力があるので（主に魔王に）。

リアナージャの微笑みと、エイミールの泣きそうな必死な瞳に見送られ、アルファーレンは仕事に励む。冷気が、氷河期並だった。寒い。寒すぎる。

ああ、だが。

八つ当たりといってやるな、かわいそすぎる・・・とは、アマレッティの言葉。

どれほどの破壊力だったのか、一目見たいな、と思わんでもなかったが、見たらみたで、アルファーレンの寒気が更に研ぎ澄まされるだけなので、ここは遠慮しておこう・・・。と思ったアマレッティであった。

まあ。

リアナージャが後に、

「股間の滾る思いを、表に出せずにいたアルファーレンが哀れじゃったのぅ・・・」

と、言っていたのだが、これは、伝えない方が身のためだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

眠るエイミールを見つめる目には欲望の片鱗が垣間見える。

安心しきって休むエイミールの掌は、記憶の中のあの掌より随分大きくなったが、今だに華奢な・・・少女の掌。

それがアルファーレンの服の裾を握りしめていた。

ふ、とアルファーレンの顔に微笑が浮かぶ。吐息を吐くように微笑んで、瞳のどす黒い欲望がなりを潜めた。

この義妹を守るのだ。

身も心もあらゆる災難から守りきって、成長した暁には、誰がなんと言おうとエイミールは、私のものだ。

そっと、肩口まで毛布を引き上げてやる。
そのまま、眠るエイミールを見つめて、宵闇を数えた。
傍らに眠る誰かの存在にこれほど心安らげる日がこようとは。過去の自分からは、想像もつかない。
欲望を抑えて、瞳に滲む激情を押さえ込んでまで、側にいたいのだ。
その柔らかいからだを引き裂きたい衝動を抱えている事は否定しない。
ただ、今までと違うのは。
身体だけではない。心が欲しいと、この胸が叫ぶのだ。
寄り添い寄り添って、この先の未来すべて。余すところ無く、欲しいのだ。
そのために。
魔王となったのだから。
アルファーレンは、眠るエイミールをじっと、見詰めていた。

第六話：執務と義妹（後書き）

・・・うん。なんかコメント入れたら魔王閣下に殺されそう・・・。

第七話：不死者と義妹

魔王直属側近達の執務室。
・・・そこは傍目にみると、動物園・・・。
鳥顔だったり、兎だったり、狼だったり。（獣人族）
ワニだったり、蛇だったり、蜥蜴？竜？だったり。（竜族・蛇族）
そして。
ゾンビだったり・・・。（アンデッド族）

「包帯巻け！」
アマレッティが叫びながら新顔のゾンビに包帯を投げつけた。
「急げ！エミーが来る！」
もたもたと、巻きつけていたら、小さなノックの音。そして扉が開かれて。
・・・ぱたり。
かすかな音と共に、エイミールが気絶した。
うああ。と天を仰いで、アマレッティが呻く。
それを横目にアルファーレンが歩み寄り、優しく抱き上げた。
愛しい妹を気絶させたというのに、われらが魔王閣下の、機嫌は悪くないようだ。
（まあ。エミーが怖がって気絶するような奴、ライバルになりっこないもんな！）ｂｙ、アマレッティ。
「やすませて来る」
そういいおいて、私室（エミー観察部屋）に向けて歩き出した。
まさかね。

・・・ゾンビがライバルになるなんて誰も思ってなかったもんなぁ・・・（しみじみ）。

ゾンビは気のいい奴だった。
死肉を好んで食べる以外は、花が好きで、生きている動物が好きな奴だった。もちろん、子供も。
腐りかけて白を通り越し、赤茶色の瞳が、駆け回る犬（双頭）を微笑ましそうにみていた。
自分の姿が余り見栄えのいいものじゃないと知っていたから、エイミールに近寄る事もなかった。
また、気絶されたら、心苦しいなんてものじゃないから。
お花のように可愛らしい女の子は、明るく華やかに微笑んでいるべきだ。泣き顔なんかごめんだよ。
それが、彼。

アンデッド族いちの見識家、レイ・テッドだった。

死んでアンデッドになるまでは、当たり前だが人間で、不死者になったのも自業自得。
レイは類稀な才能を持つ、魔法使いだったのだ。
生前の彼は数多の使い魔を使役し、数多くの精霊を従えていた。
使う魔術の威力は凄まじく、国を賭けて戦い、勝利したほどの偉大なる魔法使い。
だが、彼は自分の力を過信する余り、禁呪に手を出した。

不老不死の魔法。

・・・まあ。
不死は叶えられたんだから、レイが結構いい魔法使いだった事は証明できる。
だが、レイは詰めが甘かった。
「不老」の魔法に失敗したのだ。

日々老い続け、やがて、身体機能の劣化が進み、身体のあちこちが疲弊していく。指先が腐って落ちても、内臓が腐り爛れても、腹腔内に水が溜まり膨れても、死ねない。
筋肉が衰え、腐り始めて異臭を発しても、彼は死ねなかった。
人間界に居場所がなくなって彼は、使い魔に懇願した。
殺してくれ。と。
使い魔の答えは。
おいでませ、魔界へ！だった。
人としての枠にこだわるから、疲弊するんだ。いっそはじめからアンデットだと思えばいいじゃん！
そう使い魔に説得された彼は・・・納得した（！）。
彼は魔界で心穏やかに暮らし始めた。
化け物！と叫び追いかけてきた人間たちはもう居ない。
彼の知識を魔法を利用し、私腹を肥やそうとした輩もいない。
魔界の水が合うって言うのかな？ゾンビ友達も沢山出来た。
そして、仕事。
なんと博識を買われて、魔王側近の仲間入りを果たした。
今代の魔王閣下は、勉強家の彼も舌を巻くほどの博識家。元人間だった彼から得る知識に、重きを置いてくれているようだった。
毎日が楽しかった。
その楽しい毎日に彩を添えてくれているのが、魔王閣下がこよなく愛する義妹姫。
エイミール嬢だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

毎朝の日課となってきた、包帯を巻く。
腐った肉が落ちないように、目玉が飛び出さないように。指先は特に丁寧に。
頭の天辺から巻き始めて顔を覆い、首を覆い、腕を指先までを丁

寧に覆っていく。
それから、匂い取りの花をポケットに忍ばせる。
鏡で見て、準備完了。出勤。
魔王城の執務室で自分の定位地に着くと仕事を始めた。
休みなく精査し、決済していく。所見を書き込み、注意点をまとめ、どこの部署にいっても分かるように。抜かりなく落ちは無いかを確かめて。
すると、周りの同僚がそわそわし始めた。
それに、ああ、そろそろか。と思い至る。
そっと、席を立ちアマレッティ様に言付けて、部屋を出ようとして・・・花とであった。
ああ、しまった。間に合わなかったか。そう思ったのもつかの間、急いでそこを離れようとした時、花が。
可憐な花が。行く先を遮った。
え。と思う間に、花が先を急ぐように話し出した。
「あ、あの、この間は気絶してしまってすいませんでした！お気を悪くなされたのでしょう？あの後、お茶の時間にいらっしゃらないから・・・」
ああ、声を出さなければ。この花は勘違いをしている。気を悪くするはずなどないじゃないか。だって私は、化け物の中の化け物なんだから。
「・・・いいえ。気など悪くしてません。嬢様。私はただ、みなのお茶の時間に異臭がしてはいけないと思い、この場を辞しているだけです。けしてそのような・・・」
「じゃあ、いつも、みんなとお茶にしないのですか？」
「ええ。・・・嬢様、ご覧の通り、私はゾンビです。腐臭を嫌う方も居るでしょう？休憩時間くらい、良い空気を吸っていただきたいのです。それに、私は、この身体ですから、みなの頂く物が食べられないのです」
「あ、あの、では何時もどこにいらっしゃるのですか？」

「・・・この時間ですと中庭で・・・番犬と遊んでいます」
では。
そう言って歩き出した私を引き止めることはなかったが、背中に戸惑いの目が当たっているのに気がついた。ふ、と笑う。ああ、優しい花だ。優しくて健気な花だ。
魔物の範疇でも最も嫌悪すべき存在にまで、手を差し伸べようというのか。
かつて人だった頃、あんな存在に出会っていれば、もしかすると、禁呪に手など出さなかったのかもしれない。そう思って、レイは笑った。

一方エイミールは、申し訳なさで一杯だった。
ああ、そうか。お茶を飲めない方もいるんだ。不死者の方がどんなものを好むのか、それを準備してこそ、立派なお茶くみじゃないのか！
これでは、にいさまのお役に立ててなど・・・いないのでは？
そう思い至ってゾクリとした。
役に立てなければ。・・・にいさまに、いつかいらないって言われてしまう！
エイミールはお茶を配り終えると、彼の後を追いかけた。
その姿を見た魔王閣下の機嫌が下降修正されたのは言うまでもない。

中庭にいるとの言葉を頼りに追いかけると、はたして彼はそこにいた。
風に包帯が舞っている。
その目は死者のものだったが、優しく、駆け回る犬（双頭）を見

ていた。
穏やかだった。静かに静かに、彼はそこにいた。
行く雲の流れを目で追い、風を楽しみ、土を草花を慈しむ。それは生きている者の謳歌に耳を澄ましているようで。静謐な一片だった。
その静謐さを壊しはしないかとの少しの恐れと共に、エイミールは彼の隣に腰を下ろした。
「・・・嬢様・・・」
「教えてくださいませんか？不死者の方はどのようなものを好むのですか？お茶の時間にこちらに準備いたします」
「・・・いいえ。もったいないお言葉です。私などのためにそこまで言って下さっただけで十分です。不死者が好むもの、それは腐肉。死肉です。そんなもの嬢様に準備していただくなんて、とてもとても」
そう言って（多分）苦笑した彼に、エイミールは何かをしたかった。お茶の時間を提供できないなら、何をすればいいのだろう？
静謐な印象の彼は、アルファーレンのまとう空気にどこか似ている。
・・・アルファーレンにいさまならば、何もせずともただ一緒にいるのが嬉しいといってくれるのだが。と思ってエイミールははっとした。
そうだ。何もせずともただ一緒にひと時を共有すればいいのではないか？
お茶もお菓子ももてなしにはならない。むしろ、居心地の悪さをもたらすものでしかないのだ。
ならば。
「あの・・・。こうして午後一緒に庭を見ていてもいいですか？」
その申し出に彼は瞠目し、それから、笑ったのだ。

第七話：不死者と義妹（後書き）

風薫る（腐臭を乗せて）。中庭に座って戯れる犬の鑑賞（ただし双頭）。

花の揺らぎに微笑む静謐な印象の・・・ゾンビ。

その隣に、ちま。と座って同じく風に吹かれ、花を愛でる美少女。

うん。絵になる。

あ。魔王城の執務室では大荒れ気味の魔王閣下が氷河期並の冷気製造中。

第八話：義姉と義弟

日々繰り返される、ままごとのような時間。
それは居並ぶ魔王軍最高幹部をも、魅了する。
可愛い、エイミール嬢の為ならば。我等、一丸となって事に立ち向かいますとも！
ああ、でもね。

紅の貴公子と名高い御方様のご乱心には・・・ご容赦ください・・・。

「兄上！眼！紅くなってるから！魔力もれてる！」
アマレッティが叫んだ。
常に冷静な我等が魔王閣下において、イメージする色は、冴え冴えとした静謐な印象の青銀。
だが、一度でも彼の御仁の戦を眼にした者は、彼をしてこう呼ぶ。
「紅の貴公子」と。
苛烈極まりない戦いに身を投じた際、アルファーレンの纏う魔力が紅蓮の如く、彼を彩る。
それはまるで炎が彼を包み込むようで。
戦いに興じれば興じるほど、残酷に高揚し高まる魔力。
やがて魔力の本流が、瞳に宿り彼の青銀の眼差しが、紅に染まるのだ。
そして、今。
戦いの場でもないのに、アルファーレンは溢れ出す戦闘意識を隠さず、瞳に紅の炎が宿っていた。
憎憎しげに見つめる先は・・・。
中庭でただ寄り添って座っている二人組。

レイとエイミールだった。

「・・・今日も・・・」

苦々しくも呟いた言葉は、恨み節。

アルファーレンの紅蓮の眼差しはグサグサとレイの背中に刺さっていた。

気のせいじゃなかったら、窓枠が魔力にやられて、ぐんにゃりと溶け出している。

「あーあーあー。兄上！エミーはね、お茶の時間に、あいつには、お茶を供することが出来ないから、お茶の時間を共有するって言ってたんだ。もてなしの代わりなんだよ！」

「・・・エミーの時間を共有するのは私だけだ・・・」

・・・あいつ、殺すか・・・？と物騒に呟いている魔王閣下に、慌てるアマレッティ。

「や。無理だから！不死者だし、ゾンビだし、何よりすでに死んでるから！」

「首を引っこ抜けば良いだろう。あるいは・・・魔力で焼き殺せば良い・・・」

「ややや。やめとこうよ！エミーが悲しむだろう！（やる気だ！すげえやる気だ！）」

それにはチラリと流し目をやって。・・・彼の眼が紅い。

「・・・私がぼんくらだと言いたいのか・・・？」

エイミールの耳に入る前に的確に適正に事をもみ消すに決まっているだろう。

しかし何より聞き捨てならないのは、あれを始末して私のエミーが悲しむと思っていることだ。

ゾンビごとき喪って、私のエミーが悲しむ・・・？許せないな。

アルファーレンの紅蓮の眼差しに文字通り焼かれながら、アマレッティはそれでも食い下がった。

何よりエイミールのために。

「エミーは、結構あいつ気に入ってるんだよ。でもな、何より、兄上のためなんだぞ。エミーは「にいさまのお役に立つために」お茶くみをしているんだぞ。にいさまって、兄上の事だろう」
それには虚を突かれたような顔で、アルファーレンがアマレッティを見た。
あーあーあー。言いたくなかったのにな！
「はじめにさ、エミーに、魔王側近達の緊張を和らげる為にお茶を入れてくれって頼んだんだよ。そしたらエミーなんて言ったと思う？俺達の疲れを癒せれば、にいさまのお仕事もはかどりますか？だぞ！俺は頷いたぞ。俺らの疲れが癒せれば、魔王の仕事もはかどるからな！これぞ自明の理って奴だろう？エミー、にいさまのお役に立ちたい。立たなければ！っていつも一所懸命だろうが！お役立ちの一貫なんだよ」
この間の戦いなんてどーよ。
あっという間に自称勇者倒しちゃったじゃないか。
「・・・」
「俺ら、やる気満々だったから、あっさり終わっただろー」

蟻の如く湧いてくる人間達が、魔族の領域まで侵攻を始めたのは、何時ごろだったのか。

不死者が、獣人が、魚人が、蛇人が、石持て追われ。
闇の眷族たちは、煌々と灯る松明に住処を追われ。
竜族、蛇族は、異形の者よと蔑まれ。

魔王軍はそんな魔族を守るために各地に斥候を置き人間と戦っていた。
相応の痛みには相応の償いを。

人間が侵攻するならば、魔族とて黙っていないのだ・・・。
アマレッティは藍の髪を揺らしながらアルファーレンに対峙した。
「まあ、腹が立つかもしれないけど、エミーの一番は間違いなく兄上だよ。だから、ゾンビに妬くのは無しって事で！」
「・・・」
アルファーレンは無言だったが、身を覆う紅蓮が収まって行く。瞳の紅も今は・・・青銀。
それを見て、やれやれと息をついたアマレッティだったが、窓の下を見て、眉を顰めた。

「兄上、あれ・・・夜の眷属じゃねえ？」
その声に、アルファーレンは秀麗な眉を歪ませた。

＊＊

「ごきげんよう。出来損ないの姉上」
声は突然だった。
頭の上から蔑んだ声で姉上と呼ばれて、エイミールは面食らった顔で相手を見た。
相手は、短めの黒髪に黒い瞳の白皙の美貌の主だった。
年のころは十五・六歳くらいか？
背中から黒い羽を出して、緩く羽ばたき浮かんでいた。
「・・・どなた、ですか？」
エイミールが尋ねる。
すると少年はエイミールの周りをふわふわと漂って、じっくりと彼女を見つめた後で、ふんと意地悪く笑って言ったのだ。
「本当に幼いな！魔力も欠片しか感じない！髪は金色だし、瞳は

翠！あんた、ほんとに出来損ないなんだな」
悪意に満ちた目線でエイミールを見る少年に、彼女は声もなかった。
ただ呆然と悪意に満ちた白皙の美貌を見つめた。
その顔を見て、少年が瞳を輝かせる。
だが、切れたのは傍らに居たゾンビだった。
「嬢様を侮辱するのは止めなさい」
静かに言い聞かせるように。噛んで含めるようにレイが言う。
それに侮蔑の目線を投げやって、少年はさらに嘲笑った。
「・・・穢れたゾンビ如きと話が弾むのだ。貴女が出来損ないなのは今更なのかもな」
「・・・訂正を。彼はけして穢れた存在ではありません。ただ、種(しゅ)が違うだけです。貴方は犬を犬だと言って蔑むのですか？」
レイをけなされて、エイミールは静かに腹を立てていた。悪意ある者の言葉に負けている場合ではない。諭すように言う。
「賢しい口を！だが、まあ、知能は発達しているようだ。ならば、むしろ話は早い」
そう言って、少年は羽に風を含ませて、エイミールの髪を嬲った。
「・・・俺はね。姉上。あんたの弟だ。あんたを生んだ女から生まれた一歳違いの義弟だよ」
おとうと。
その言葉はゆっくりと染み込み、エイミールは理解するも、戸惑っていた。
「おとうと？でも、年が・・・」
「はっ！何も知らないんだな。いや、知らされていない、のか。なるほど溺愛、というのもあながち間違ってはいないのか！いいかい、姉上。俺達、夜の眷属は、一年で三歳分年を取るんだ。俺は、五歳だから、身体的には十五、くらいかな」
産まれてから、どんどん成長していって身体能力で最高の時に成長が止まるんだぜ！

なのに、あんたはまだまだ幼いまんまだ！俺より一年も前に産まれているのに、俺より随分と幼いじゃないか！

・・・これが出来損ないじゃなかったら、なんと言えばいい？

そう言って、少年はエイミールの瞳の中を覗き込んだ。

けれども。

それを聞いて納得していたのは、他でもないレイだった。うんうんと頷く。

「ああ、なるほど。だから、嬢様は大人びていらっしゃるのですね」

それでは、今、嬢様の精神年齢は、十八歳ですか・・・。ぴちぴちですな！

見た目六歳児。如かして精神的には十八歳。・・・なんでしょう、ぞくぞくして参りますなぁ。

それから傍らの羽つき少年を顧みて、包帯の影で大きくこれ見よがしにため息をついてやった。

はあ、やれやれって感じだ。レイの、その仕草に少年が睨む。

「・・・餓鬼。ですな。好きな女の子を虐めるのはおよしなさい。みっともない・・・」

しみじみとした、レイの呟きだった。

その呟きに、はたして羽つき少年が真っ赤になった！

「んな！なんだと！お、俺は別に！」

「・・・最近、夜の眷属の長老から、子供を一人、魔王付きの従者に出来ないかと要請が盛んでね・・・」

「んぐ！い、言うなあっ！」

ゾンビに食って掛かるも、なぜか、風が阻んでゾンビに近寄れない。

じたばたと空中で身動きする少年に、エイミールが眼をぱちくりとさせた。

「・・・なんでも、一目惚れした相手が魔王閣下の妹君だとか・・・」

「き、貴様あぁー！！！」
尚ももがく羽つき少年に、レイは冷めた眼差しをやった。（・・・まあ、瞳濁っているけど！）
ふん。と鼻を鳴らしてゾンビはきつい語調で言った。
「姉君の気を引きたい気持ちは分かりますが、他人の身体的特徴をあげつらって傷付けていいわけありませんよ。金の髪、翠の瞳に生まれたのは彼女のせいですか？彼女が望んでそうなったわけではありませんでしょう？先天的なものをあげつらう事ほど醜いものはありません」
その言葉に少年は真っ赤な顔で悔しそうにゾンビを睨みつけた。
「ゾンビ如きに・・・！」
ぎりぎりと呟くも、しかし、目線はすでに弱い。
彼はゾンビの前に敗北を確信した。
羽がもがく様に一、二度羽ばたき、静まった。
ゆらりと地に降り立つ。
それを見て、レイが言った。
「改めて自己紹介をなさい。初めての姉と弟の対面が、意地悪な言葉に満ちた醜いものであって良い訳がありません。さあ」
それに、少年が観念したように呟いた。
「・・・俺、いや、僕は・・・貴女の弟の、レミレア・パルナスです。・・・姉上・・・」
その顔は。
真っ赤に染まって目線をエイミールに合わせることすら出来なかった。

第八話：義姉と義弟（後書き）

ツンデレ！

ツンデレ属性の弟君。デレるの早いよ・・・。がっくし。

第九話：不死者と義弟

「さて、自己紹介も済んだ事ですし、エイミール嬢様、そろそろ、始業の時間ですぞ」

あ！という顔をしたエイミールにレイは優しく笑いかけた。・・・ただし包帯の影となり分かりにくい。

「先に行ってください。嬢様、わたくし、彼ともう少し話しをした後で追いかけますので」

「えと、では先に参りますね」

失礼いたします、といい置いてエイミールが駆けて行く。それをにこにこと見送って。

エイミールの姿が見えなくなったことを確認してから、レイが振り返った。

・・・鬼がいた。

レミレアは一気に縮まった寿命を感じた。

ゾンビから漂ってくる威風。その圧倒的な重量感。怖い。身体が畏縮し、縮こまり、動けない。

なんだ、このゾンビの威圧感は！

おまけに風が、逃げを図った彼を嘲笑うかのごとく吹き付ける。これでは羽も使えない！

風は、レイの身体から吹きつけ吹きすさぶ。この風の出所は？

「・・・ま・・・魔法・・・？」

精霊の気配が辺りに満ちていた。

それは主にレイの周りに。彼を慕い、彼のために、彼の思うとおりの事を成すために。

溢れんばかりの精霊からの愛情を受け取って、レイ・テッドはそこにいた。

風が逆巻いて、彼の顔を覆った包帯を解きほぐす。包帯が解かれ、そこに立つ者は。

・・・美貌の男がそこにいた。
流れる黒髪、黒い瞳。夜の眷属よりも余程それらしい面立ちの、男。
レイ・テッドは、今は煌く眼差しをレミレアに向けていた。
「さあ、躾のなっていない五歳児にはオシオキが必要だね？」
覚悟なさい。そう言って、妖しく笑うは・・・不死者。
「お、おまえ、なぜ？」
今まで溶けて爛れてたじゃないか！なのに、精霊魔法ってなんだ！お前、不死者だろう？
「ふ。分かってしまえば容易かったのです。エイミール嬢様と風に吹かれているうちに自ずと理解しました。以前の私は彼ら、精霊達をただ力で、支配し使役していたのです。そうではなく、エイミール嬢様のように、彼らに寄り添い、ただ側にいるだけで、彼らは私に応えてくれるという事に・・・遅かれながらも、気付いたのです」
レイは思う。
精霊の声に耳を傾けもせず、彼らを圧倒的な力の元に支配していた過去の自分を。
その傲慢さを浅ましいと感じられるようになった事を。
「私が過去の自分と決別したのを知って、彼らはまた私に力を授けてくれたのです。何と言う愛情でしょうか。私は彼らにこんなにも愛されていたのです。そしてそれを気付かせてくれたのが、エイミール嬢様なのです」
精霊達はエイミール嬢様が大好きなんですよ。知ってましたか？
魔界で魔族に属しながら、精霊に好かれている者を始めて見ました。
精霊達はエイミール嬢様が大好きだから、もう一度私に力を貸すことを決めてくれたのです。
「生前、私はガズバンドいちの黒魔法使いと呼ばれていた、いやな奴だったんですがね・・・」

いや、人間変われば変わるもんです。あ、今はゾンビですがね。
「・・・じゃ、なんでそのままにしないんだ？溶けて爛れた顔よりそっちの方がいいじゃないか！」
「は！餓鬼はこれだから！いいですか。ただでさえ魔王閣下に厳しい目で見られているんですよ！素顔がこれだなんてばれたら・・・速攻死んでますね！」
・・・ちなみにゾンビだって、首を引っこ抜かれたりしたら死ねるんですよ？
その痛さは尋常じゃない痛みだって顔なじみのゾンビが教えてくれたんです・・・。
え？そのゾンビ死ななかったのかって？
おお。良いところに気がつきましたね！
生きてますよ。彼。たまに首から頭が転げ落ちて大変なんです。
「・・・死ねねえじゃん！ってか、それ死んだって言わねえから！」
「おや、そうですか？」
不死者（ゾンビ）は何回死んだら死者として扱ってもらえるのでしょうねえ・・・。
しみじみと呟く死なない男、黒魔法使いのレイだった。

「では、改めて、嬢様の前に現れたのはなぜですか？嬢様を中傷する為ではありませんね？」
夜の眷属の長老に何か吹き込まれたのではありませんか・・・？
レイの眼差しがきつくなる。黒い瞳がレミレアを見つめた。
「・・・前に、成長が遅かった同属がいたんだと。そいつは、吸血族で、まだ牙もなかった。でも、同属の血を飲ませたら成長が始まって、ちゃんとした大人になれたって・・・じいちゃんが」
「・・・ふ。なるほど。良い情報を与えて誘導されたようですね。五歳児は短絡的ですね！それはね、魅惑の魔法と呼ばれる魅了術です。しかも与える者が同属で、触媒が血液！いけませんな。嬢様の

自我という自我が無くなって、傀儡となってしまう術ですよ！」
レイの眼差しが鋭さを増した。
反面、白い顔が更に白くなったのは、レミレアだった。
「魅惑の魔法・・・？じゃあ、やっぱり、じいちゃんは・・・」
「現在の夜の眷属の権力では、中枢に及ぼす影響力が無いのです。このたびの魔王閣下の人事にも、魔王軍幹部の中に夜の眷属出身者は一人も居りません」
獣人族、竜族、魚人族、不死者と、魔王軍の直轄幹部はさまざまな魔族から精鋭を集めてきたが、今回の人員の中に夜の眷属はいなかった。
発言権の低下を懸念した夜の眷属の長が目をつけたのがエイミールの存在なのだろう。
レイは頭の中でざっと考えると、顔色を悪くしたレミレアを見た。
踊らされた子供。
出来損ない、という言葉を区も無く口に乗せたその様子からも、夜の眷属の、選民意識は根深いものがあると推察された。
出来損ない、か。レイはふと思った。
人間の枠を超えて不老不死を望み、手にした物は不死のみで。日々爛れていく顔を見たくなくて何枚鏡を割っただろう？
そんな自分の元に伝え聞く言葉は・・・出来損ないの黒魔法使いのあだ名。
化け物と罵られ、顔を背けられる存在に、手を差し伸べてくれた人。
何も言わず、ただ側にいてくれた人。
花を見つめては微笑みあってくれた優しい人。
「レミレア殿。貴方、エイミール嬢様の髪を見て、美しいとは思わないのか？金の髪、翠の瞳を見て、尚、嬢様を出来損ないと称するのなら、私にも考えがある」
風に包帯を遊ばせながら、美貌の黒魔法使いはその黒い瞳に力を込めた。

たじろいだのは、レミレア。レイのきつい眼差しに刺されて声もない。
しかしレミレアは、意を決したように顔を上げ、レイの黒い瞳を真正面から捉えた。
「・・・黒髪黒い瞳が最上にして最良だと教えられていた。だから、あの子を見て、戸惑う自分が信じられなかった！」
レミレアはその衝撃を叫ぶように告白した。
「初めて会ったのは、魔王閣下の式典で！妖精かと思った！あんなに綺麗なのに、じいちゃんも大叔父も、大叔母も、母ですら！あの子を見て、不吉きわまり無いって言ったんだ！みんなが口を揃えて言う『出来損ない』の意味もやっと聞き出して！・・・姉上だって知った時は、母上を恨んだ！」
なのに。
ある日思い出したように、夜の眷属の長がやって来て、エイミールに会いに行けと言ったのだ。
弟だと知ってもらえれば、仲良くなれるだろう。美味く気を引いて、ここへ連れておいで、と。
突然の言葉にレミレアがなぜと尋ねれば、じいちゃんは、眼を細めて孫に会ってはならぬのかと聞いてきた。あの子の成長を促す術を知っているのに隠しているのは、心苦しいからと。
「胡散臭かった。汚らわしい。不吉な子。出来損ない。色々言っていたのに、今更会いたいなんて」
でも、ようやく分かった。
エイミール姉上を手に入れて、魔王に何らかの働きかけをするつもりだったんだな・・・。
「エイミール嬢様に辛い言葉を浴びせかけたのは？」
「ここで、ああ言えばあの子はこないだろう？俺が弟ならなおさら。夜の眷属の側に寄らなくなるだろう？」
黒い瞳には、大切なものを守ろうとする気概が込められていた。
その眼差しを、瞳の奥の真実までも見つめ、そこに嘘が存在しな

い事を突き止めると、レイは肩の力を抜いた。
「よろしい。やり方は最善ではなかったですが、五歳児にしては良く考えましたね」
そう言って、美貌の黒魔法使いはレミレアに微笑んだ。
「では。次の質問です」
レイはレミレアに向けてやや砕けた感じで尋ねた。
「夜の眷属と、決別は可能ですか？」
それは、住み慣れた家を離れよという事か？それとも、家族から独立せよと？色々な考えに陥ってしまったレミレアだったが、しばし考えた後、レイの目を見て頷いた。
その応えに。
満足したように微笑むレイだった。

「さて・・・『敵と見なしたものはすべて。殲滅』する」
言霊だった。言葉を発した瞬間に空間に魔方陣が広がりだす。幾重にも重なり構築された陣は、やがて矛先を定めた。
「エイミール嬢様を傀儡術の元で操作しようとした・・・『謀った、夜の眷属の阿呆どもを全て、捕捉殲滅』せよ」
その瞬間。
風が逆巻き、光は明滅を繰り返し、大地が揺らぎ。
魔界の広い大地のあちこちで、鉄槌が下された音が鳴り響いた・・・。

「さて、レミレア。魔王軍最高幹部の一員として、私、雑用使いが欲しいなあと思っていたんです。手伝ってくれますよね？」
にっこりと微笑むは、肉が腐り爛れた無残な表情の・・・ゾンビ・・・。
「ああ、もちろん。私が成した事柄は、すべて『見なかったこと』ですからね？私の素顔があんなだなんて言ったら分かっていますね

？」

もちろん、エイミール嬢様にも秘密ですよ？あの素直な嬢様が魔王閣下に隠し事が出来るはずがありませんからね。何よりも、私と嬢様の憩い（らぶらぶ）の時間を大事にしたいのです。

言ったら、酷いですからね？

そう釘を刺す事を忘れない、黒魔法使いでゾンビなレイは、くるくると丁寧に包帯巻きつつ、レミレアに言ったのだった。

第九話：不死者と義弟（後書き）

ゾンビと見せかけて実力者。使う魔法は一級品。
でも、最大にして最高の憩いとして上げるのが、エイミールとの逢瀬（デート）・・・。

第十話：不死者と義妹・2

とろけるような微笑を見せる魔王閣下。
その視線の先には当然といっちゃ、当然な事に、エイミール嬢の姿が。
小さいからだで精一杯背伸びして、魔王閣下の胸元を整えようとしている。
その姿が真剣であれば在るほど、何と言うか・・・微笑ましい。
かわいい。
そう思っているのはきっとここにいる全ての者。

「・・・魔王閣下って、笑えたんだ・・・」
「失礼な事を」
ぎゅむーっとゾンビに耳を引っ張られて悲鳴を上げた。
その声に、顔を上げた魔王閣下は、もう鉄壁の無表情だった。
「レイ・テッド。それはなんだ」
「は。魔王閣下。これは、夜の眷族の一員にして、エイミール嬢様の弟君で、名をレミレア・パルナスと申します」
レイの言葉にアルファーレンの優美な眉がぴくりと動いた。
アルファーレンの傍らでは、エイミールが心細い顔をしている。
その心もとない表情に、打ち震えるゾンビが一人。
・・・ああ、嬢様！そんないたいけなお顔もそそります！
このレイ・テッド、嬢様の幸せのためならば死ぬ気で事にかかりますとも！・・・あ、すでに死んでますな。やれやれ、ゾンビとは因果な商売（？）ですなあ・・・。
「・・・エイミール、ご苦労だった。次の仕事まで部屋で休んでおいで」
「はい。にいさま」
そう言って下がるも、後ろ髪が引かれたのだろう。レミレアのほ

うを心配そうに見ていた。
部屋からエイミールの気配がなくなると、同時にアルファーレンの機嫌も低下する。
眼差しは冷気を伴なう青銀だった。
「・・・で。先ほどの精霊魔法の説明が成されるのであろうな？」
「御意。この者、夜の眷属の意向を持ち、嬢様に近付くも、嬢様を思って企みを崩そうとしました。同属の血で個体を縛る術式でございます。夜の眷属は余程切羽詰っていた模様で、幼いこの者を利用して、嬢様を連れ去ろうとしていた由」
「・・・ほう。それで？」
ゆらりと、アルファーレンの魔力が揺らいだ。紅蓮の炎がちらちらと、瞳に灯る。
「この者の申告により、潰えましてございます。先ほど追跡魔法の術式を展開いたしました。狙いを付けた者どもを風の精霊が追跡し、殲滅しております」
「それは、確かか？」
「御意に」
そうか。そう言って軽く頷いた魔王閣下。
改めてゾンビとレミレアを見つめた。
「・・・だが、エイミールに関する事は全て私に報告せよ。この怒り、どこに打ち付ければよいのだ？レイ、貴様相手をするか？」
「は。差し出がましい事と思ったのですが、なにぶん、嬢様の大事ゆえに、自制できず・・・なれど、魔王閣下」
レイが顔を上げ包帯の影から濁った瞳でアルファーレンを見て言った。
「張本人はまだ仕留めてはおりません」
その応えに瞠目し、一層残酷な微笑を浮かべたアルファーレンだった。

男は走っていた。
背中の羽は風が邪魔して使えなくなっていた。風を捉えて大空に羽ばたく事が出来ない！
惨めに地べたを這いずり回るなど、自尊心の高い男には屈辱以外の何物でもなかったが、ただ、今は、命が惜しかった。
つい先ほどまでは、輝かしい未来を思い描いていたのに。
「出来損ない」の、不吉な娘が、良い駒になってくれるなんて！と、眷属どもと笑いあっていたのに。
なぜ！
ああ、やはりあの娘は不吉なのだ。
産まれた時にくびり殺しておけば良かったものを！
苦々しくそう思ったとき。

目の前に災厄が文字通り、化身となって舞い降りた。

「ごきげんよう。長老。散歩かな？」
「あ。ま・・・魔王閣下・・・！」
男の顔が一層白くなった。
魔王閣下から滲み出る威圧感に足が縫い付けられたように動かない！
しかも、しかも・・・。魔王閣下の眼が、紅い！！
「・・・君の言動は腹心から聞いた。君達は、私のエミーを「出来損ない」呼ばわりしていたらしいね？私の可愛いエイミールを・・・。ただ、髪と眼の色が違うからと言って・・・」
しかも、レイの奴が勝手に夜の眷属を殲滅したと言うじゃないか。
では、私のこの怒りは誰が受け止めてくれるのだ？
「せ・・・殲滅・・・？」
長老と呼ばれた男の身ががくがくと震え始めた。
「今代の魔王軍幹部たちは、個々それぞれ知恵と実力に溢れているからね・・・。時折勝手に暴走して困るのだ」

まあ、それも、魔王である私と、エイミールのためを思っての事なのだろうがね。
事エイミールのことに関しては「行きすぎ」はよくないと言ったら・・・流石私の腹心じゃないか。
ちゃんと憂さを晴らす相手を見繕って取っておいてくれたのだ。優秀だろう？
「さあ。夜の眷属の頂点に立つという貴殿。何回殺せば、魂まで消滅せしめる事ができるかな・・・？」
アルファーレンの瞳に、残酷な紅蓮の炎が宿った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「エイミール嬢様。風の精霊は嬢様のことが大好きだと申しております」
レイの包帯に包まれた掌の上で、花が、木の葉がくるくると回っている。
それがひときわ高く舞い上がると、ふわりひらりと、舞い降りて、エイミールの髪を飾りつけた。
「わあ！レイはすごいですね。精霊魔法を使えるなんて」
花々を見つめながら、いつもの定位置に座る二人。
眼を合わせ、ふわり弧を描く翠の眼差し。
それに言い知れぬほどの幸福感がこみ上げてくる。
幸せとは、こんな簡単なことだったのだ。
同じものを違う眼差しで見てやって、時折ふたり、瞳をあわせ、微笑みあう・・・。それだけなのに。
この時間を、誰にも邪魔されないのならば。
ゾンビぶらぼー！
・・・レイはそう思う。

エイミール嬢様は気付かないかもしれないが、魔王執務室の窓枠は今日も嫉妬に溶けそうだ。
溢れる魔力が紅蓮の炎となって眼に見える。傍らには必死で魔王を宥める苦労人(アマレッティ)。
そして、人身御供に差し出された使いっぱしりのレミレアが、魔王の紅蓮の眼差しに焼かれているのだろう。
くすり、とレイは不敵に笑う。・・・包帯の陰に隠れて見えないが。
この身がゾンビであるためか、魔王閣下は寛大な風を装って、私と嬢様の逢瀬(でえと)を見てみぬ振りをしてくれる。
それが嬉しくもあり、口惜しくもある。
この身に隠した真実を、いつ、嬢様の前に晒そうか？
嬢様のおかげで、精霊の加護を取りもどし、溢れんばかりの愛情で、精霊が知る過去の自分の姿までをも取り戻せたのに。
きっともとの姿を取り戻した自分を見ても、嬢様は微笑むだけだ。
わあ、良かったですねえ、と微笑んでくれるが、それだけだ。
逆に、要らぬ者どもを引き寄せてしまいそうな、この容姿。
ゾンビの時は眉をひそめ、鼻を覆い、あっちへ行けと罵った奴等に付きまとわれる・・・？
そんなのは、ごめんだ。何よりも嬢様との時間が減ってしまう危険性がある。
それどころか、どこか控えめな嬢様は、身を引きそうだ。いや、引く。
ならば、今はまだこのままで。
ゾンビのままなら、嬢様のお側近くにいても、誰も気にも止めないだろう。・・・魔王閣下以外は。
彼の御仁の溢れる愛情を一身に受けてすくすくと成長される嬢様。
・・・嬢様に気付いて欲しい。

・・・嬢様に気付いて欲しくない。
嬢様には、過去、絶賛された私の容姿にのみ心奪われて欲しくは無いのだ。
幸い、あのアルファーレン閣下がお側にいるのだし、嬢様自身、絶世の美貌の持ち主だ。
美に鈍感なのかと思うほど、鈍いところもあるし。（アルファーレン閣下の溢れんばかりの愛情表現もどこ吹く風？なのだ）
まあ、そこが可愛らしいところなのだが！
嬢様には、私の内面に触れていただき、その上で、ゾンビでもかまわないと言わせて見せる！
対決だってして見せましょう。
アルファーレン閣下との戦いは、凄惨なものになりそうですが。
日々技を磨き、その時に備えましょう。
なに、時間はたっぷりあります。
エイミール嬢様が、匂い立つ美貌の姫に成長し、嬢様が私を選んでくれた暁には・・・このレイ・テッド。
魔王閣下と雌雄を決する所存でございます。

第十一話：おつかいと義妹

・・・魔界と人界は、険しい山脈で分断されている。
一介の人間が踏み込めば、死を免れる事など無い、険しくも荘厳な立ちはだかる壁。
前人未到の豪峰。
あたりに満ち満ちた魔力の渦が人間の踏襲を阻むのだ。惑わしの魔力渦巻く山脈の尾根。

それが、魔の葬剣と名高い、ガズバンドのダウニー山脈だった。

だが、もちろん、魔族にとっては気軽に登れる山にしか過ぎない。
彼らにとって、ダウニー山脈は鼻歌交じりで散歩する、ハイキングコースでしかないのだから。
魔力のほとんど無いエイミールにとっても、そこは馴染みのお散歩コースだった。
だから。
エイミールが普段着で（総レース、アルファーレン選）山すそを籠待って歩いていても、誰も気にしない（魔王閣下以外は）
「エイミール、ダウニーへ行くのか？・・・まさか、ひとりで？」
アルファーレンの声にエイミールは頷いた。
「はい！にいさまのお好きな木苺がそろそろ熟す頃なので！」
「待て。一人でなど行かせられるはずあるまい。今、私も」
「大丈夫ですよ、にいさま！レミレアの言葉だと、私、もう十八らしいですから！身体は小さいですけど、もう大人なんです！」
そう言って、エイミールは小さな胸をえへんと張って見せた。
その仕草にくらりとした魔王閣下は、その小さな胸に己の顔を埋める日を妄想した。
・・・精神的に十八ならば、もういいか？と、悪魔の声。

いや、だめだろう、俺！と、天使の声。
サイズが合わな過ぎて、エミーが傷ついてしまう！とか何とか暴走を始めた魔王閣下の脳内。
・・・どこのサイズ？何が合わないの？なんて質問はいけません。
と、無表情のまま、脳内で理論を戦わせている魔王閣下を尻目にエイミールは尚も続けた。
「一年で三歳分大きくなるんですって！私は体が成長しない分、精神的に大人になっているんだろうって！レミレアが！」
なら、体の小ささで子ども扱いされるのもおかしいですものね！だから、もう、一人で行こうと思うんです！
「・・・ほう・・・レミレアが・・・ね・・・（そう言って保護者を足止めし、自分だけが合流するつもりだな！）」
姑息な。
魔王閣下の揺らぐ瞳を不思議そうに見つめて、それからエイミールは微笑んだ。
それは、ほのぼのとした、心温まる笑みだった。
「にいさま、お仕事頑張ってくださいね！エイミールも頑張って木苺摘んできますから！」
「・・・仕方が無いな。では、これをもっていけ。お守りだ」
アルファーレンは自分の指から指輪をひとつ抜き、エイミールの指（もちろん、左薬指）にはめさせた。
だが、サイズが合わずに緩んでしまう。ちっと舌打ちをしたアルファーレンは、己が髪を引き抜いて、魔力を込めた。
青銀の髪ひとすじが輝きを潜めると、そこに現る、青銀の鎖。
それに指輪を通し、エイミールの首にかけてやった。
エイミールの華奢な首を彩る自分の色に、アルファーレンは満足すると、エイミールを送り出した。
アルファーレンの隣で、エイミールを心配そうに見つめてアマレッティはダグニーを見あげた。
「・・・兄上。やっぱり心配だから、誰か・・・レイにでも付い

て行ってもらおうぜ」
「ああ。護符の指輪だけでは遮られる物に限りがあるからな。レイ・テッド。エイミールの後をつけていけ」
「御意」
「あ！俺も！俺もー！」
そう叫ぶレミレアには、アルファーレンとアマレッティが声を揃えて。
「「貴様は却下」」

レイの教えもあって、最近彼女は、精霊達を身近に感じられるようになっていた。
今日も、風がそこここで優しく揺らいで、彼女の金の髪を遊ばせている。
その揺れる金髪を、遠めに微笑ましく見つめるゾンビがここに一人・・・・。
・・・ああ、眼福です！嬢様！
なんて可憐なんでしょう！絵になりますな！
己の幸福に打ち震えるゾンビ。
・・・やはり、魔王閣下、想定外のこのポジション！おいしすぎる！
ゾンビぶらぼー！ゾンビになって良かった・・・！
そんな変態に見守られているなんて知らないエイミールは風の精霊と戯れていた。
（嬢様、あっちに木苺あるよ）
（あっちには山葡萄が）
（嬢様、ここに、甘い実がなってるよ）
「わあ。ほんとだ！ありがとう！」
嬉しいな。
木苺で何を作ろう？アルファーレンにいさまのお好きな木苺のパイかな？

それとも、山葡萄のジュース？ああ、リアナージャねえさまは果実酒のほうがいいかな。
アマレッティにいさまのお好きなジャムクッキーも作りたいな。
それから、いつもお仕事を頑張ってくれている、執務室の皆さんの口に合う一品を、何にしよう・・・？
考えている合間も手は動き、木苺を摘んでは籠に入れるを繰り返す。
単純作業ゆえの没頭。
警戒すら必要の無い、日常の空間。
なぜならば、ここは魔族の庭。
・・・精霊達も、エイミールも、すっかり油断していたのだ。
ひとしきり摘み終わって、ほっと一息をつく。
これぐらいあれば、みんなの分に間に合うはず。
服についた小枝や、葉っぱを指で丁寧につまみ上げ、さて、城へ帰ろうと籠を待ち上げた時。

あたりに緊張感が走った。

「嬢様！伏せてください！」
レイ・テッドが警告の声を投げつける。
え？と思う間もなく、一斉に、射掛けられた。
煌く銀光。大地を縫い付ける刃の音。その重量感溢れる音の連続。
その、冷たい音。硬く鋭利な、研ぎ澄まされた。
「レイ？」
「っ！嬢様お怪我は？」
「レイ！血が！」
「・・・なぁに。これしきの傷でゾンビは死にません！何しろ、すでに死んでおりますからな！」
身の内を流れる命が、その異物を伝わって滴り落ちる、その恐怖。
レイの身体に取りすがって、エイミールは傷を調べた。

「大丈夫ですよ、嬢様。それより、嬢様こそ、傷は？怪我はありませんかな？」
「わ・・・私は大丈夫！どこも痛くなんか無い」
「それは良かった！では、嬢様、立って走れますか？きっとここに新手が来るでしょうから」
「これ抜けば・・・わたし、抜くわ！」
「・・・嬢様、触れてはなりません。これは魔族を封じる為の術具。何、この程度の術具このレイに掛かれば、すぐに！」
「レイ！」
レイ・テッドが無言で己が身体を刺し貫いていた術具を引き抜いた。尖った槍をぽいと放り投げ、いつものように顔をエイミールにあわせた。包帯の影でにこりと微笑む。
「さあ、ここは私に任せて、エイミール嬢様は魔王閣下にお知らせしてください」
「にいさまに？」
「そうです。魔界の一大事です。ここまで人間がやって来た証拠ですからな！」
「あ！」
「恐らく、嬢様の指輪が魔王閣下に異変は知らせているでしょうが、一刻も早く、嬢様は城へ！」
「は・・・はい！」
すくっと立ち上がる。足がすくむが気になどしていられない。
エイミールはいま自分ができる事を成そうと思った。
無力な自分。
アマレッティにいさまのように早く走る事も、リアナージャねえさまのように空を翔ることも。
レミレアのように羽も無ければ、レイの様に強大な魔法力も無い。
敬愛するアルファーレンにいさまのような、圧倒的な魔力も無い。
では、何も出来ないとうずくまって震えてる？
否！

ダウニーに入り込んだ人間に捕まらないよう逃げる事！逃げて、そしてにいさまに伝える事！
私がやるべきことは、それ。
「レイ！先に行ってにいさまたちに知らせます！それまで、どうか、無茶をしないでね！」
エイミールはそうレイに告げると、脱兎の如く走り出した。
「嬢様も！無茶はいけませんぞ！」
「はい！」
駆けて行くエイミールの背中に、レイは魔法をひとつ、授けた。
見る見る、エイミールの姿が薄れていく。不可視の魔法。さらに、まわりで息を飲んでいた風の精霊に声をかける。
「・・・行け。守ってくれ」
風の精霊がエイミールを追っていくのを見届けて、レイ・テッドは包帯の影で、安堵の吐息をついた。
おもむろに立ち上がる。
風がまわりに集まってきていた。
濃い精霊の気が満ちる。
立ち昇る、揺らめくような魔力の渦。
その中で、レイ・テッドは今は煌く黒い眼を来る者に向け、力を全身に駆巡らせた。

第十二話：変質者と義妹

衝撃は突然だった。
アルファーレンの気が紅蓮の色に変えて燃え上がった。
「兄上？」
「・・・護符の指輪が危機を知らせている。アマレッティ、行くぞ」
魔王軍最高幹部たちが一斉に立ち上がった。
ダウニー山脈に人間が侵入したのは何もこれが初めてではない。
だが、彼らをしてここまで焦らせたのはひとえに、エイミールの不在が合った。
「エイミール嬢は、まだ山を下りてはいないのですな？」
鷲の顔をもつ、マクギーが問いかければ、蜥蜴の顔のガーランドがダウニーを見あげた。
「レイがいる。だが、相手がどれほどか分からないから・・・」
アマレッティの呟きに、先を急ぐようにマクギーが翼をはためかせた。
「では、一足お先に参りますが、魔王閣下、よろしいですかな？」
「行け。エイミールを見つけたら、許す。急ぎ連れ戻せ」
それに奇妙な沈黙が。
そ！そそ！それは、嬢様をこの腕に抱きしめても良いとのオユルシですなあああっ！！！
嬢様！待っててくださいね！今この私め（馬鹿ばっか）がおたすけにまいりますぞおおおっ！！！
俄然やる気を出した彼らが、その場から飛び去るのに、瞬きひとつの間もなかった。
ちなみに。
山にはいる前にあっさり、アルファーレンがエイミールを見つけた（・・・）。

まあ、護符の指輪が呼び寄せてくれるのだから、当たり前と言っちゃ当たり前なんだが・・・。
山から駆け下りてくる少女を、あっさり見つけた魔王は、彼女を抱き上げ、微笑んだが、無念の涙を流した幹部達の劣情は・・・暴れる鉾先を探していた。

「「「「「うおおのれえええっ！人間どもめえええっ！！！」」」」」

男の純情、弄ばれて、だまっていられるかあああっ！（・・・いや、弄んでないから・・・）
目に物見せてくれるうううっ！！（・・・いえ、あのね・・・）
エイミール嬢様の柔らかい身体を抱き上げる、千載一遇のちゃんすだったのにいいいいっ！！（おい）
もしかしたら、小ぶりでカワユイお尻触れるはずだったのにいいいいっ！（こら）
助けた事で愛が芽生えたかもしれないのにいいいいっ！！（おーい）

・・・いや、まあ、その・・・。
魔王軍率いる、最高幹部たちの、士気は高く。
並み居る魔族たちを手駒に、更に自分から前線に立ち、戦う姿は勇猛果敢であったという。
何が幸いするのか分からないものだ。とは、魔王閣下の言葉である。・・・鬼。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

レイ・テッドが並み居る人間を相手に魔方陣を構築し展開し終えた頃。

魔王閣下は速やかにレイの元へやって来た。
「魔王閣下！嬢様は？」
「無事だ。さっさと終わらせて城へ帰るぞ！」
そう言って、発現させた魔力は。
強大で強力で、容赦なかった。
敵と見なした者を、殲滅するその圧倒的な力は。恐怖の根源となって人間達の心に蔓延るだろう。
「さて、覚悟せよレイ。エミーが泣いている・・・」
言外に貴様のせいで。と言われて固まるゾンビ。
それを面白くなさそうな顔で見て、帰還を宣言した魔王閣下であった。

はたして魔王軍の帰還を、涙で出迎えたエイミールであった。

そして魔王閣下に取ってよかったことがひとつ。
ぐしぐし泣きながらエイミールはアルファーレンの腕の中、こう言った。
「に、にい、さま。エイミールは、まだ子供でした。ちゃんとお役に立てるまで、みんなに付いていて貰います。今日はレイがいてくれて良かったです。レイがいなかったら・・・エイミールは・・・」
「それは、どこへ行くにも私と共に行ってくれるという事か？」
「・・・は、はい。にいさまが、嫌じゃなければ」
「嫌ではないぞ。そうだな、それでは・・・」
と、良からぬことを考えた魔王閣下。
・・・いつでも一緒。どこまでも一緒。
・・・ああ、嬉しいぞ。エミー！
その心のままに、アルファーレンは胸のうちをエイミールの耳元にそっと囁いた。
きょとん、とするエイミール。

「・・・いやか・・・？」
憂いをこめた眼差しで、見つめられ（でも慣れているので！）あっさり首をたてに振ったエイミールだった。
「はい！では、今からいかがですか？私ちょっと汗をかいたので、入りたいなあって思ってたんです」
「「「「どこに！！！」」」」」
エイミールとアルファーレンの言動に注目していた幹部連中、特にアマレッティがすかさず突っ込みを入れた。
「「お風呂です（だ）」」
「こっ・・・！！！」
「アマレッティにいさま？」
エイミールが小首を傾げてアマレッティを見た。なんだか、アマレッティにいさまが震えている。
しかしその間もアルファーレンの歩みは止まらない。
エイミールを腕に抱きかかえたまま、「今日は終業」と言い置いて執務室を去っていく。
その背中に。
「・・・っのっ！！！変質者ーっっ！！！」
アマレッティの叫び声が響いた。

「にいさま、アマレッティにいさまが・・・」
「気にするな。さて、エイミールには私の髪を洗ってもらおうか？」
「はい！エイミールがんばります！」
「・・・ふふ。では、お返しにエイミールの髪は私が洗ってあげよう」
「わあ！本当に昔みたいですね！」
「そうだな。昔みたいに、一緒にお風呂に入って、一緒に洗いっこをしよう。エイミール」
「はい！」

全幅の信頼を寄せてくる、彼女に、邪な愛情は余計なものかもしれないが。
少しずつ、大人の本気を見せておくのも。

そう、悪い事ではない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

カクシテ、いとしのエイミールとのむふふな時間を堪能した魔王閣下はご機嫌だった。
「兄上！」
怒り心頭のアマレッティも、うらやましそうに見つめてくる幹部連中の眼差しも、どこ吹く風の彼。
ほこほこになったエイミールを抱き上げて、髪の毛を乾かしてやっていた。
「・・・ふ。焼くな。アマレッティ。私はもうずっと、エイミールと風呂も床も一緒だっただろう？最近エイミールがひとりに拘るので寂しいと思っていたのだ」
そう。幼いエイミールの世話は全部アルファーレンがやっていたのだ。
魔王閣下は稀に見る愛妻家。
エイミールのために髪に良いシャンプー、リンス。肌に良い入浴剤、ボディソープなどなど！
お取り寄せするのが魔王様・・・。
「だ！だけど！いいか、ねえさま！異性と入れるお風呂は六歳までなんだぞ！！！」
「今、六歳だ。それに、別に私とエイミールの仲なのだから、何歳でもいいだろう」
などと、傲岸不遜な魔王様・・・。
実際、何歳までだって一緒に入るとも！当然だ！

なんて考えているアルファーレンの胸の中。

当のエイミールは、必死に眠気と戦って、負けそうになっていた・・・。

第十二話：変質者と義妹（後書き）

魔王側近の心の声。
「魔王様。・・・・・・どこまで洗ってもらってるんですかっっ！！！」
もしくは。
「魔王様。・・・・・・どこまでナニであらっているんですか！！！」
魔王様の回答。
「どこまで？エイミールの手の届くところまでかな」
「どこまで？なにで？貴様ら一度死にたいらしいな」

第十三話：人界と義妹

ガズバンドの大陸に、存在するは三国。

魔法士を重用し、各国との対話政策で確固たる地位を築いた、魔法大国リカンナド。

軍部に魔法士を重用し、軍事政権を屹立させた、軍事大国ビエナ。

そして研究肌の知識人を多数有し、少ない魔法力でも魔法構成を成せるように、研究をしている、大国アリアナ。

三国が直面していたのは、象徴の不在による権威失墜の危機であった。

三国を主と仰ぐそれぞれの国の中枢では、六年前の占いに対する是非が取りざたされていた。

「リカンナドの占い師は、声を揃えて言うておりますぞ。王！占いの通り、女神はすでに転生を果たしておりまする！見出せないのは、神が試練を与えているのでしょう！」

「ビエナが誇る魔法士も、口を揃えて言いおった！転生は行われたと！だが、見当たらん！」

「アリアナが誇る教授連も、認めている・・・もう、六年もたっているのに、ね」

三国が三国なりの調査結果を告げると、場に沈黙が満ちた。

一人の男が立ち上がると、その会場にいた者、全て彼を見た。

研究者であり、剣士でもある彼は、大国アリアナの次代を担う、十六歳の若き皇子殿下。

銀髪、青瞳の精悍な面持ちの・・・フォルトラン・デルサ。

「私の仮説を披露しても？」

無言の肯定に軽く頷くと、フォルトランは話しはじめた。

「・・・六年前に占いの大鏡が割れたのは皆、ご存知のはず。過去の範例にのっとって、直ちに嬰児の捜索がなされたのも事実。そして、各国が口を揃えて言う結果になったのも事実。嬰児は依然不明のまま、歳月のみが経ってしまった・・・。ここで皆の疑心暗鬼が始まった。何処かの国が女神を隠しているのではないか？わが国でないのなら、他国が！と。・・・だが、ここでひとつお忘れですぞ、皆様。

・・・ガズバンドの大地に三国あり。しかし必ずとも三国だけとは言いますまい？」

その問いに、割って入った男がふたり。軍事国ビエナの若き将軍・・・ガルストとイスタファ。

「周辺小国に至るまで探査の手は伸ばしたぞ」

「およそガズバンドの地に在って、逃れる事ができる者など・・・」

「まだです。行われていない地があります」

ガルストとイスタファを遮り、フォルトランが続けた。

「ガズバンドの大地に連なりながら、探索の手を逃れし地・・・魔界が」

「「「「「ダウニーか！」」」」」

その声に。会議の場は喧騒に包まれる。

・・・だが、探索するにはダウニーは危険すぎた。魔族の領土であり、魔族の支配域であるのだ。

人間の行く手を阻むダウニーの、更に先に魔界が在った。

どうにかしてダウニーを越え、そして魔界域に入らねばならなかった。

リカンナドとアリアナは、魔王に対抗する手段として、魔法力を挙げた。魔法士全てで魔界自体に結界を張り巡らし、魔族の動きを牽制した上で探索の魔方陣を構築し展開すべしと主張した。

・・・だが軍事国であるビエナが魔界掌握を唱えた。

魔族は忌むべき存在。そのような輩の下に万が一転生の女神がいるのなら、一刻を争う大事。
急ぎ女神を助け出す為に・・・王の思惑としては、女神である娘を助け出し、彼女をビエナへ迎えたいというところだったのだろう。アリアナのフォルトランが、一国での侵攻に疑問を唱えたのに対して、王は鼻で笑って言い切った。
「魔族に対抗する軍備増強はされている。またわが国の精鋭に付いて来れるだけの力が貴国らの兵士に備わっているのか？」
「ビエナの国軍の力は重々承知しております。ただし、相手が魔族となれば、慎重にことを進めなければ命取りになると言っているのです。一国だけで攻め入るなどと仰らず、ここは三国で協力し合って・・・」
「フォルトラン皇子殿下！」
ビエナ国王がフォルトランの言葉を遮り、声を荒げた。
アリアナのフォルトランとしては、まだ一国の皇子にしか過ぎず、王の話を遮る事は出来ない。それを知っていながら・・・知っているからこそ、片頬で嘲笑ってフォルトランを見やったビエナ国王は続けた。
「・・・アリアナの魔法技術はすばらしい。私もそこは認めよう。だが、魔族に対しては、魔法構成力など微々たる物でしかない。わが国には幸い、数多の魔法士が所有する使い魔がおります。私も何も人間が前線で魔族に対抗できるなんて思っておりませんぞ。魔族に対抗するは、魔族！魔法士の持つ使い魔を最大限利用して、彼らを翻弄し、彼らが隠しているだろう女神をお助けしようと言っているのだ」
そう言って光る眼差しで見つめてくるビエナの王に、誰が否と言えるだろうか・・・？
三国会議の場は静まりかえり、それを満足げに見やったビエナ国王は、高らかに宣言した。
「では、決定だ。ダウニーへはビエナが誇る国軍と、使い魔を向

かわせ、女神奪還を目指す！」
そして。
ビエナ国王が自ら指揮を取り、女神を奪還するのだと意気込んでダウニーに向かい。
たった一日で・・・（戦闘には一時間と掛からなかった）全滅したのだ。
ダウニーに向かった軍の一部がぼろぼろになって命からがら逃げ帰って来た時。
・・・彼らが守るべき王も王子も、魔族の一撃で、冥界へ旅立っていた。
王位継承者を失った軍事国は、その後、失墜していく。
ガズバンドの大地に長く君臨した軍事大国ビエナが、滅亡したのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「なー。兄上。この間の騒ぎで使い魔になってた奴らが結構、魔界に戻って来ててさー。謝罪するから、受け入れて欲しいんだとー」
アマレッティが気のない声で呟いた。
一緒のテーブルで、エイミール特製のお茶とお菓子を頂いていたリアナージャがふんと鼻で嘲笑った。
「使い魔など、力のない奴らがなるものじゃ。謝る前に己が使われてた魔法士殺してから来るのが本当じゃろ！」
「あ、やっぱし？だよなー。魔法士ごときに捕まるなんて、魔族の恥さらしだ」
リアナージャの言葉にアマレッティが頷く。
そんな彼らの言葉に耳を傾けもせず、アルファーレンはエイミールを見ていた。
・・・くうっっ今日も可愛いぞ！流石私のエミー！

・・・あの滑らかな手触りの服はやはりエミーのためにあるのだな！腰のラインから尻の丸みのえも言われぬラインといい、胸元の危うさといい！・・・思わず後ろから襲ってしまいたくなるではないか！

（・・・あーあー・・・兄上様、視姦してるよ、ナニその犯罪者の眼差しは！・・・それ以前に妹だよ、分かってる・・・？）

アマレッティは日々妖しさを増していくアルファーレンの眼差しにちょびっと危機感を抱いた。

危機感は危機感なのだが、なんだろう、この言い知れない脱力感は・・・？

（ま、どうせ兄上はエミーに無体はできないから！）

結構信頼しているのだ。

変態な兄でも、一途にエイミールを愛しているのは分かっているので、その時、エミーが望むのなら、応援してやろうと思っていた。

好きあってるなら、ノウ・プロブレーム！エイミールが幸せならば居並ぶ敵を殲滅してでも叶えて見せる！それが、常識であっても！

・・・アマレッティはそう思う。

「・・・もー、兄上ってばー。聞いてるー？んじゃさ、使い魔に成り下がってた奴らには、使われてた魔法士の首もって帰還を認めるって、伝令しちゃうけど、いーよね？」

「・・・かまわない」

ものすごく気のない返事にも関わらず、アマレッティは破顔した。

・・・信頼しきった兄に、視姦されてるなんて考えもしないエイミールは、今日もワゴンを押して執務室の机の合間を縫っている。

今日はちょっといつもと違う。

身に纏うのは、やや膝上のぴっちりとした滑らかな白さの・・・ナース服。

金の髪はまとめてアップにして、ナース帽がちょこんと乗っかっている。

それはまるで・・・。

「・・・天使・・・」
誰かがうっかりうっとり呟いた。
だが、アルファーレンの紅蓮の眼差しに貫かれるので、あわてて側近達は顔を伏せた。
間近で見れない。見ちゃいけない。あくまで、自分の席を横切る際に、横目で（頭動かしてもアウト！）目の端に収めて至福に浸らねばならないのだ！あんなに、胸鷲掴み！な格好なのに！
拷問？拷問ですか、魔王閣下！泣きますよ！？
あんなにカワユイエイミール嬢様を！
すぐ横をにこやかにワゴン押してくださっているのに！
見ちゃいけないなんてええええっっ！！！
「マクギーさん、羽根のお加減はいかがですか？包帯かえましょうか？」
・・・これは、あれですか、魔王様。
・・・何の拷問ですか・・・。
泣く泣く、（顔には出さずに）、エイミールの手当てを断って。
そうですか？と心配そうなエイミールの背中に、男泣きしつつ、鷲な男前は次の戦いに意欲を燃やす。
次こそは！
大怪我おって（死なない程度の）、エイミール嬢様に、手ずから包帯巻いてもらうんだい！
・・・魔王軍、最高幹部たちの士気は今だ衰えを知らない。
次にまた人間が攻勢を仕掛けてきても、返り討ちに合うだけだろう・・・。

第十三話：人界と義妹（後書き）

馬鹿。
側近さんたら、ナイチンゲールなエイミールにくらりら。
手当てしてもらいたいのに！してもらったら、速攻、冥界いき。
・・・なお、じゃすとさいずのナース服はリアナージャ様の差し入れです。

第十四話：皇子と皇子

ビエナの失墜はリカンナドとアリアナの両国王に衝撃を与えた。
まさか、出立して僅か一時間で、ビエナ軍が全滅するなど、誰が想像できようか。
転生の女神を見つけ出すのは無理でも、魔王軍と対等の戦いを展開してくるだろうと思っていたのだから。
両国の国王はそれぞれ、馬鹿な。と言ったきり・・・絶句した。
つい先ほどまで三国会議があった、その場所で。今は二国。
黙り続ける王に焦れたのは、両国の皇子殿下だった。
アリアナのフォルトラン・デルサが父王に迫った。青い瞳が切り込んでくる。
「父上。絶句している場合ではありませんぞ。急ぎビエナ周辺に軍を向かわせねば」
それに続き、言葉を続けたはリカンナドの皇子殿下。
魔法士であり、精霊魔法の使い手でもある、黒髪に黒い瞳の御年17歳のディレス・レイ。
彼もまた黒い瞳に力を宿し、王を見た。
「周辺地域で台頭する小国を抑えねば、一気に国を興そうとする者の戦闘に我が国も巻き込まれてしまいます」
「「父上。どうぞ、ご英断を！」」
次代を担う若者に、進言されて両国王は思い知った。
古い時代の終焉を。
三国で国を、力を、栄華を、競い合った、それの終わりを。
ふたりの国王はお互いをそれぞれに見つめた。
かつての敵であり、友であり、同じ時代で命を懸け、国を賭けて争った相手を。
張りがあった肌にしわがより、慧眼鋭い眼差しに、かつては無かった優しさが加わっている。

・・・お互いに、年を取った。そう、感じ入った。
「・・・フォルトラン。アリアナ軍に指令を」
「・・・ディレス。リカンナド軍に伝令を」
「「ビエナ周辺を沈静化せよ」」
その言葉に、若いふたりが高揚していくのが手に取るように分かった。
過去の自分が国を思い奮い立った時のように。
・・・小童だと思っていたかったのかも知れんな。現王ふたりはそう思った。
「「御意！」」
青の瞳と黒の瞳が交差する。
片頬で笑い合い、二人は会議室を後にする。
その若獅子の、跳ねるような闊達さを微笑ましく、そしてどこか物悲しく見つめ、ふたりの現王は未来に思い馳せる。
「・・・のぅ、アリアナの。戴冠式は、何時がいいかね？」
「・・・奇遇だな。わしも今、何時がいいかと考えていたところだ」
「「・・・お互い、年を取ったな」」
そう言って、壮年の獅子は微笑をかわした。

伝令が走る。
軍の中枢で各国皇子が声を出した。
「ビエナ周辺国の制定を目指すのだ。闘争の火種を灯させるな。平定させる為の出撃だ。けして挑発してはならない。・・・そして、略奪行為は厳重に禁止する！」
「平定が目的の進軍だ。ビエナ周辺が管理下に収まるまで、けして挑発も略奪もするな！一級魔法士に監視を徹底させよ！」
伝令が駆け巡る。
・・・ビエナ軍全滅の一報が入ってから、およそ半日後、リカン

ナド・アリアナ両国軍がビエナ周辺地域に入国を果たした。
両軍はけして挑発せず、略奪せず、小国の自治を認め、ビエナ国王亡き後の代表者を選出し、国としての秩序を取り戻すまで、ビエナ周辺地域を両国間の監視下に収めた。
・・・監視と言っても、ビエナ国に圧政され冷遇されていた周辺小国は、かえってこの変化を喜んだくらいであったが。

こうして、三国あった、ガズバンドの大地に、今は二国。・・・リカンナドとアリアナ。
周辺には、二国に肩を並べるほどの大国はなかったが、中堅の国が数多存在する。
リカンナドとアリアナの国王は、そのバランスに頭を悩ませていた。
彼らは何度も話し合った。
国力と軍事力に溺れ、小国を圧政の元で支配し、従わぬ者が悪いのだと言っては侵攻し、略奪していたビエナ国。
独裁的な軍事国家が無くなってほっとしたのも確かだが、新たな火種を提供しかねない。
そして。
人心の心のよりどころである、転生の女神の行方が分からないのも、民衆の不安に拍車をかけていた。
転生を告げられてから、六年の不在は大きい。
ガズバンドの大地は、神に見放されたのだと嘆きを深める者が出てきたのだ。
それは、国を違えても同じことで。
それを知っているからこそ、現王ふたりは悩んでいた。
人界において、女神探索の手は尽きた。
フォルトランの言う通り、後は魔界を捜す以外手立ては無い。
しかし、魔王軍は強かった。ここまで力の差があるとは思っても

いなかったのだ。
ビエナが滅亡して喜ぶ国は多々在るが、では、いったい誰がまた、魔界へ赴くのだろう・・・？
そんな現王の悩みに、快く応じたのはふたりの息子皇子だった。
「我等が行きます。何、戦いに行くのではなく、まずは、様子見に、ね」
「こっそり行って、こっそり見てきますよ。本当に女神がいるのかどうかも知らねばならないでしょう？」
そう言って、若いふたりは笑ったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・なぁ、ディレス。私は、魔族様さまだと思うんだ。今は苦しくとも、横暴な独裁者が居なくなったんだ。暮らしやすくなったとビエナの民衆が喜んでいたのを知っているかい？」
「・・・フォルトラン、また王宮を抜け出しているのですね？」
フォルトランの呟きに、ディレスが呆れたように肩をすくめた。
「・・・悪いかな？王宮に居るだけじゃ、いい情報は手に入らない。・・・たとえば。今回のビエナ国軍。全滅とあるが実際、帰還した者が数名いる。いずれも傷だらけで五体満足とは言えないがね」
そこでフォルトランはディレスの黒い瞳を見た。
「そのうちの一人が、斥候だったらしい。ダウニーで奇妙な二人連れを見たと言っている」
「・・・二人連れ・・・？」
ディレスの優美な眉がひそめられた。
それを満足そうに見やってから、フォルトランは頷き、先を続けた。
「一人は少女。顔は分からないが、金髪。ダウニーを駆け下りていく途中で少女の姿が消えたそうだ。そして、もうひとり。顔を包

帯で包んだ男がひとり・・・。そいつが、妙な技を使ったと言うんだ」
「妙な、技？」
ディレスは訝しげな声を出した。
「・・・精霊魔法を使ったそうだよ。風と光の混合魔法だと言うんだ」
「馬鹿な！」
ディレスが驚愕の声を上げた。それに、フォルトランは満足げに頷くと更に続けた。
「斥候だった男はかなり腕のいい光魔法士だったそうだよ？・・・・まぁ、今じゃ廃人みたいになっているがね・・・まんざら、廃人の狂言とは言い切れないだろう？」
フォルトランは眼を細め、ディレスの黒い瞳を覗き込む。
刹那、皇子ふたりは無言で睨みあう。
「・・・事実か？」
「信じるも信じないも勝手だよ？ただ、私は混合魔法を使える魔法士くらいなら、不可視の魔法も使えたんじゃないかと見ている」
だから、私はこの頭のおかしい傷痍軍人の言葉を信じる事にしたんだ。
「・・・うわごとのように呟いていたよ。大きな光と共に風の渦がやってくる、とね。喪った両腕を振り上げながら、見えない敵に向かって怯えた眼を向けていた」
圧倒的な力の元にひれ伏すしかなかったんだろう。そう呟くフォルトランをディレスは見ていた。
「・・・ガズバンドの魔法士の中で、風と光を同時に操る魔法士は、リカンナドに一人しかいない」
ディレスが呟くように言った。
その白皙の美貌から感情を伺うことは難しい。黒い瞳が驚愕に揺れていた。
半信半疑と言ったところか？そう、フォルトランは思った。

「・・・その一人としては、認めたくは無いのかな？何も君がダウニーに居たなんて言ってないだろう。君と同じ技を持つ者が居たって訳だよ」

肩をすくめながらフォルトランはディレスに言った。

やがて、吹っ切れたのかディレスが頭を軽く振った。気を取り直すように、フォルトランに向き合う。

「・・・傷痍軍人、ね。フォルトラン。何も私だって、王宮に篭ってのほほんとしていたわけじゃあ、無い」

ディレスが黒の髪を揺らし黒い瞳を細く眇めて、フォルトランを見た。

「戦いが始まるまさにその時、青銀の髪に青銀の瞳の男が現れたそうですよ。・・・彼は、その胸に金色の髪の子供を抱いていたそうです」

まるで、神の一対だったそうです。

そう言って、ディレスはフォルトランを見た。

「・・・どうやら、転生の女神は本当に魔界にいるようですね・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

皇子ふたりは議論を戦わせる。

傷痍軍人の言質に確実性はないが、彼らが見た者は幻ではないのかもしれない。

そして、父王が頭を悩ませている女神の転生者を見極める為にも。

・・・ダウニーに行かねばならない。

第十五話：鎮魂と義妹

ビエナ国、王城の目前に広がる広大な広場。いや、『元』ビエナ国と言ったほうが良いのか？

そこに、ビエナの誇るビエナ軍の姿は無く、今在る者たちはかつて肩を並べていた二国軍。

・・・アリアナとリカンナドの軍だった。

フォルトランとディレスは、ダウニーへ向かうための人員に頭を悩ませていた。

彼らに同行を希望する者は少なかった。

さもあらん。

第一に、魔族への純粋な恐れがある。

そして、先の戦闘で招じた惨状を目の当たりにしなければならない事実があったのだ。

・・・誰が好き好んで遺体の散乱する戦場に赴きたいものか。

「少数精鋭にすらならんな」

「同感だ」

フォルトランの呟きにディレスが同意する。そしてやや困惑気な顔で、相手を見た。

「・・・まぁ、あのビエナ軍が全滅した地に、好き好んで行く馬鹿は居るまいよ」

「・・・では、私達はその馬鹿なのですね」

「・・・まぁ。そうだね」

ふたり、そう呟いて、ため息をつく。

・・・だが、見極めは必要だった。転生の女神にしろ。精霊魔法を使った魔族にしろ。

そして・・・。

皇子ふたりは広場を見渡した。

そこに集まっている人々は皆が疲れた表情を晒している。

ビエナ国の、『還らずの騎士』の家族達だった。
リカンナドとアリアナの管理は正常に働いており、然したる混乱は無かったが。
遺体は愚か、遺品すら持ち帰れなかったビエナ軍の惨状は目に余る物があった。

ダウニーへ同行する騎士を募っているとの広報に、手を上げたのは、実はビエナ軍騎士の遺族が多かった。
年端も行かない少年達が、自分の父、自分の兄を捜しに行きたいのだと、古い鎧に身を包んでやって来た。また、ある遺族は遺体は諦めるから、せめて花を、と必死な顔で縋ってきた。
・・・彼らに、家へ帰れと告げるのは、心痛い仕事となった。
皇子ふたりは重いため息をつく。
嘆きに満ちたこの場所で、彼らふたりは立ち尽くす。
・・・と。その時。
ディレスが訝しげな顔をして、広場の中央に眼をやった。
「ディレス？どうした？」
フォルトランが様子のおかしなディレスに眼を留めた。
ディレスは困惑の表情で、何かに耳を澄ましているようだった。
「・・・なんだ・・・？なぜ、こんなにも、風の精霊が集まってきた？」
ディレスの呟きに、フォルトランは眉を寄せる。
「・・・濃密な、精霊の気が・・・溢れんばかりの・・・誰だ？誰が、操って・・・」
ディレスが黒い瞳を煌かせて見下ろす広場の中央。
そこに、淡く輝く魔法陣が浮かび上がった。
フォルトランが眼を凝らす。
フォルトランの専門は、魔法陣の構成と術式の展開に対応した魔法陣の作成。

その彼にしても容易に理解しがたい複雑な術式だった。
だが、構築されていく魔法陣の端々に、移動の術式が組み込まれているのを見て取った。
フォルトランの優美な眉がきゅっとしなる。
「ディレス！転移法陣だ。それも・・・でかい！」
常に冷静を己に戒めているフォルトランが、焦り声を出したのを、ディレスは頭の隅で聞いていた。
ディレスはディレスで、精霊魔法を発動し、風の精霊を鎮めようとしていたのだ。
だが、だが・・・。
「・・・っく！だめだ！主導権を握れない！」
精霊の、手綱が取れない。そもそも、ディレスの言葉に耳を傾けてくれる精霊がいないのだ！
リカンナド一との呼び声も高い自分の、更に上を行く精霊魔法士の存在に、嫌が応無く背筋が凍った。これでは、まるで・・・。
「・・・大人と子供だ！」
ディレスは精霊を鎮める事を諦め、広場に向かい走り出した。
フォルトランもすでに伝令を捕まえて何事か叫んでいる。
途切れ途切れに、フォルトランの声。
「急げ！広場から離れるんだ！」
それに続けて、ディレスも叫んだ。広場にいた人々に向けて。
「はなれろ！何か転移してくる！早くここから離れるんだ！」

その声に、パニックに陥った人々が、走り出した。
その彼らの頭上から。
花が。
降ってきた。
色とりどりの花々。赤に、白に、黄色に、青。オレンジ、ピンク、紫に、朱色。

人々が花に見とれて、足を止める。
ひらひらと、花びら。
そして、声。
「慌てずに。広場の中央を空けてくれさえすればいいのです」
その声の求めに応じて人々が静かに場を空けるのを、フォルトランとディレスは見ていた。

・・・圧倒的な魔法力に、動けなかったのだ。

「・・・人間よ。今代の魔王閣下は人間の侵攻に憤りを感じていらっしゃいます。攻め入らなければ、我等が攻める事などないものを。・・・だが、死者に何を言っても仕方が無い」
その言葉の後に、広場の中央に次々に遺骸が現れ始めた。
淡く輝いた後、舞い散る花の絨毯に静かに横たわる彼ら。
物言わぬ彼らは、それでも、誰かの、父であり、息子であり、夫であり、兄弟だったのだ。
無残な遺体が多かったが、服の切れ端、ボタンのひとつでも、と遺品を求めていた遺族達の切ない喜びは大きかった。
花に横たわる彼らも、きっと。
息絶えるその瞬間まで、妻を、子を、家族を、思っていたに違いないのだから。
「・・・ああ、もちろん、全員ではありません。遺体自体残らなかった者が多かったのでね」
声がするほうを見あげれば、何も無かった空間に、男がひとり風を纏って浮かんでいた。
顔面を包帯で隠した・・・魔法士が。
「精霊魔法士！」
ディレスが叫んだ。それにチラリと眼をやって、包帯の男・・・レイ・テッドは続ける。
「・・・人間よ。魔界領域へは近付くな。侵攻すれば、またこれ

を殲滅する。・・・魔王閣下のお言葉です」
よろしいですか？確かに伝えましたぞ？
そういい残して。
包帯の男は消えたのだった。
後に残るは、切ない悲しみに満ちた遺族達と、立ち尽くす、フォルトラン・デルサとディレス・レイ。
どちらとも無く呟く。
「・・・包帯巻いた、精霊魔法士。ですね」
「・・・ああ」
ふたりは頷くしかなかった。
・・・完敗。だったのだ。ため息ついて呟いた。
「「勝てる気がしない・・・」」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・・・ことの起こりは早朝のエイミールの一言。
みんなと囲む食卓。
正面、主の座にアルファーレン、隣の奥方（！）の席にエイミール。その隣にリアナージャ、さらにアマレッティ。
その食卓で、いやに沈んだ顔のエイミールにアルファーレンが気付いた。
優しく尋ねれば、揺れる瞳に涙が浮かんだ。途端に慌てるアルファーレン。
・・・エミー！ど、どうしたのだ！？涙など・・・！
「どうしたのだ、エイミール・・・？」
「・・・にいさま・・・。エイミールは昨日、魔獣がダウニーで亡くなった方達を食べている、と城の者に聞きました・・・。それで、なんだか悲しくなって・・・」

・・・おのれ人間め！死んだ後までエミーを泣かせるとは！細切れにしてやればよかったのか！？

いや、いっそ、消滅させれば・・・などと物騒な考えを浮かべるアルファーレン閣下。

「・・・あの時、レイがいなかったら、エイミールも、同じく、し、死んでしまって・・・魔獣に食べられていたのかなぁと思ったら、あそこに居る死者の方々が、かわいそうになってしまって・・・」

・・・死なせるはずがあるかっ！！！エイミールは全身全霊で持って私が守るのだからっ！・・・などと更に物騒になるアルファーレン閣下。

「にいさま、エイミールお願いがあります。死者の方々を家族の元へ返してあげて欲しいの。きっと、死者の方々も帰りたいと思っているに違いありません。・・・だって、だって、エイミールだったら・・・たとえ、死んでもアルファーレンにいさまの元に帰りたいと想うもの！」

ずきゅんっ。

あ、打ち抜かれた。

・・・アマレッティはそう思った。（はー、やれやれ・・・）

第十五話：鎮魂と義妹（後書き）

・・・魔王閣下の脳内は、えらいことになっております・・・。

妄想が暴走状態です。

第十六話：魔法と義妹

・・・ああ、嬢様は褒めてくださるかなぁ！
レイ・テッドは、うきうきしながら移動していた。
ビエナへ死者をおくったその足で。それはもう、空中でスキップしちゃうくらい浮かれていた。
・・・このレイ、嬢様の笑顔の為ならば、死体運搬だって厭いませんぞ！
なんせ、いつも鏡で見ている自分の方がもっとすごい（！）んですからな！
嬢様に笑顔でありがとう！なんて言われたら、このレイ、嬉しさの余り本当に死んでしまうかもしれませんな。あ、死なないですけどね！ゾンビだから！
浮かれ浮かれて空飛ぶゾンビは、魔界に戻り。
華麗にエイミールの前に着地して見せた。
それを真ん丸い綺麗な翠で見つめる少女がひとり。
ああ、麗しい。と、悶える変態（ぞんび）がひとり。
思わず、頬が緩むレイであったが、この次の少女の発言に、文字通り、死ぬかもしれなくなった。・・・ま、死ねないけど・・・。

「・・・レイは、不死者なのに、精霊魔法が使えますよね？それどころか、いろんな魔法も使えますよね？」
「？は。そうですな。このレイ、生前は精霊魔法士で、黒魔法使いでしたから、大抵の術は使えますぞ」
包帯の陰に隠れて見えないが、今は煌く黒の瞳が愛おしげにエイミールを見つめていた。
そのレイの瞳の意味に気付かない少女は、深く考え始めた。自己を真摯に顧みる。
少女は。小さな掌を胸の前に差し出して、じっと見つめた。

「エイミール嬢様？」
レイが声を掛けるも、エイミールは自分の掌を見たまま動かなかった。

・・・弱い自分。

鋭い爪が欲しかった。アマレッティにいさまのような。

鋭い牙が欲しかった。リアナージャねえさまのような。

・・・この身に魔力が宿っていて欲しかった。

アルファーレンにいさまのように、強大な力でなくていい。

こんなにも無力な自分が、アルファーレンにいさまの側に何時までも居られるはずはないのだから。

日ごと、夜ごと、念じても魔相は現れず、成長してもレミレアのような羽は愚か、尻尾さえ出てこない。
早く走る事も、空を飛ぶ事も、土にもぐる事も、水の中を自在に行き来する事も出来ない。
およそ、魔として、成立しないこのからだ。
どこまでもどこまでも、貧相で貧弱な・・・エイミール。
何時までアルファーレンにいさまの側に居れるのだろう。
何時までアルファーレンにいさまは側にいてくれるのだろう。
エイミールは悲しい気持ちでじっと手を見詰めていた

やがて少女は決意を胸にレイ・テッドを見あげた。
「レイはどうやって魔法使いになったのですか？」
「魔法使いに、ですか？・・・あぁ、人界には、魔法使いの学校

があるのですよ。そこで学びました。なつかしいですなぁ・・・」
レイが、昔の自分に思い馳せて呟いた。
ああ、懐かしいな。
他人を蹴落とし、至高の高みから見下し、ちゃちなプライド持った奴らを踏みにじって高笑いを上げたっけ。
裏から手を回して何人再起不能にしたっけなぁ・・・？
などと、爽やかそうに、黒い過去を思い返していたら。

エイミールが真剣な眼差しで、レイに聞いてきた。
「・・・レイ。魔法は、私にむいていると思いますか？」
その質問に、レイは眼をぱちくりとさせた。
・・・嬢様が魔法に向いているかって？
「・・・嬢様は、精霊達にかなり好かれておりますからな。十分、向いていると思いますぞ」
レイのその答えを聞いて、エイミールはようやくほっとした顔を見せた。
それにつられる様にレイも微笑む。その微笑が次の瞬間凍りつく・・・。

「・・・レイ。私、魔法使いになりたい！レイの言う魔法使いの学校に行きたいわ！人界に行きたいの！」

・・・・・・。
・・・あ、いかん。軽く逃避してしまった・・・。
・・・嬢様、それってあれですよね。
・・・もう一回、わたしに、涅槃を覗いて来いってことですよね・・・？
レイ・テッドは、魔王閣下の怒りの波動を思い浮かべて、そっと涙を零した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

勢いのまま、エイミールに拉致られて。（気分です、気分）
ここは、魔王の執務室。
なぜか、しっかり握られたエイミール嬢様の掌の感触も、記憶の彼方。（口惜しい・・・）
レイ・テッドは魔王閣下の真ん前に、エイミールと共に立っていた。（繋いだ手を、槍のような魔王閣下の眼差しが、ぐさぐさと貫いております！）
高揚したように話し始めるエイミール嬢様は、可愛らしいのですが、なんでしょうか。
その、魔王軍最高幹部の皆様の視線も、痛いのですな・・・。（刺さってます！刺さってますぞ、同志諸君！）
「・・・にいさま、お願いです！エイミールは、にいさまのお役に立ちたいの！レイのような魔法使いなら、なれるかもしれないの！」
「・・・魔法使い・・・？」
気のせいでしょうか、嬢様。魔王閣下の眼差しが、先ほどから、紅い色を成しているような気がいたします。や、やや。魔王閣下。やばいですよ。嬢様の前で！
気持ちの焦りが通じたのか、魔王閣下の眼差しが完全な紅になる事は無かったが、レイは、寒気と灼熱を行ったり来たりした。
凍る。青銀の眼差しで。
焼ける。紅蓮の眼差しで。
しかも、今だワタクシめの腕は、嬢様の腕の中！（死ねる！今ならゾンビと言えども死ねそうです！）

「にいさまのお役にもっと立ちたいの！にいさまの隣にずっと一緒にいたいから！・・・だから、私を、人界へ行かせてください！」
「・・・じんかい・・・」
魔王閣下の呟きが、「人界」ではなく、「塵芥」に聞こえたのは気のせいではあるまいな・・・。
その証拠に、周りにいた幹部達にもそのように変換されて聞こえたようだったから。彼らの挙動が一斉に不審になった。（やる気だ！魔王閣下、すごいやる気だ！）
腐って、爛れた皮膚の汗腺では、出ないはずの汗を。
ものすごくかいた。
なお。
長い長い沈黙の末に、魔王閣下が導き出した答えは。
「・・・わかった・・・」
だった。
やはり、閣下は嬢様に甘い。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

レイ・テッドの前をスキップしながら、エイミールが歩く。
その体からは、溢れんばかりの喜びと、「学校」に対する希望が透けて見えた。
それを微笑ましく見つめながら。
レイ・テッドは人界における、最高の魔法学校を探そうと、心に誓った。
なお、エイミールが部屋で勉強中に、レイ・テッドは何回死んだら死人と呼べるかというギネスも真っ青な取り組みに、（無理やり）挑まねばならなかった。
・・・。
魔王閣下の温情により、生還を果たしたレイが、エイミールの前に出れるまで、丸一日掛かったという。

・・・やはり、ゾンビぶらぼー・・・・。（ああ、生きてる！）
レイはそう思う・・・・。

第十六話：魔法と義妹（後書き）

悶えるゾンビ・・・。

第十七話：魔法と義妹　2

フォルトランとディレスは、ビエナ国広場に立ち、空を見上げた。
風を纏い、見事な術で転移法陣を操った男の姿が忘れられない。
たった一人で精霊を操り、無数の遺骸を運んできた男。
特に、リカンナドのディレスにとって、あの男は初めて自分の魔法が叶わなかった相手である。
その視線ははるか彼方のダウニーを捉えていた。
その眼差しの真摯さにフォルトランは眉を寄せてディレスを見た。
「・・・ディレス、まさかと思うが一人でダウニーへ行こうなどと考えているわけではあるまい？」
その問いには答えず、ディレスは尚も感慨にふける。フォルトランは更に続けた。
「父王は、ダウニーから手を引くと公言したぞ。アリアナは魔族との対立を避けるつもりだ」
「・・・リカンナドも同じだ。父王は魔族を挑発してはならないとお考えだ」
ディレスがポツリと言う。それにフォルトランは頷いた。
・・・歴然とした力の差だった。
圧倒的な魔力と、毅然とした統率力で、魔物を率いた魔王軍。
魔王軍の前では如何なビエナ国軍と言えども、風に揺れる葦のようで、あっさりとなぎ払われた。
数の上では負けはないと言い張っていた彼らの、自己に対する驕りだろうか。
しかし、先日の一件はそんな希望すら潰えさせた。
たった一人現れた魔族の男に、ガズバンド一とあだ名された魔法皇子が戦わずして破れ、魔法陣の構成力に長けた皇子はその構成を完全に読み取る事もできなかったのだ。
同じ土俵の上にも立てない相手と喧嘩ができるはずがない。

分かっていた。

「・・・だが、転生の女神の所在の確認はしなければならない・・・」

ディレスが沈思しながら呟くのに、フォルトランは頷いた。

ディレスの目当てが最早女神でない事はフォルトランには明白だった。

魔法士として、彼はあの男に魔法で挑みたいのだろう。・・・無謀すぎるが。

「希望だからな」

分かっていながらディレスを止めようとしない自分も最早、共犯なのだ。

フォルトランはくくっと笑った。

ダウニーの懐深く隠された、それは謎となるはずだった。

・・・私達ふたりが居なければ。

しばしの沈黙の後、フォルトランがディレスに向かい片頬で笑っていった。

「・・・まぁ。戦う意思がないと分かれば襲ってはこないだろう。付き合ってやるよ」

「・・・いいのか？」

「なに。散歩だ。行き先は遠いがな」

そう言って肩をすくめて見せたフォルトランに、ディレスは何事かを言おうとして・・・やめた。

小さく聞こえる程度の声で、すまん。と呟く。それに鼻で笑ったフォルトランは。

「さて、父王に見つかって止められる前に・・・行くか」

そう言って鮮やかに笑ったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

魔王城の中庭で、いつものように、レイとふたり。風の中佇む。
違うのは、いつになく真剣な、エイミールの顔。
それに悶えるゾンビは、内心を押し隠し、エイミールに向き合った。
「・・・さて、嬢様。魔法使いになるためには、まず属性を見定めなければなりません。その属性を元に、嬢様を預ける最高の教師を選んでまいりますからな」
レイ・テッドはエイミールの目の前に掌を出した。
掌の上に、楕円形のつるりとした石がひとつ。
「さて、石の色は？」
「？　白です」
エイミールの言葉に頷くと、レイは石を握りこんだ。途端にふわりと風が舞う。
心地よい風に目を細め、かすかに笑った後、レイは掌を開いた。
「・・・わぁ・・・光ってる・・・」
つるりとした石は、色は白くそのままで、淡い輝きを放っていた。エイミールが目を真ん丸くして見つめる。それにまたひとつ微笑んで、レイは続けた。
「・・・そうです。では、これでは？」
風に光の粒が混ざり、きらきらとまるで宝石のような輝きを表した。風と光の混合魔法。しかし、かつて人間に向けて放ったような、凄惨なものではなく、それは、まるで万華鏡を覗いているような、華やかな術式だった。
「・・・黄色になった！」
エイミールがその麗しさに歓声を上げる。それを見てまた微笑んだ後、レイは更に続けた。
「ええ。では、嬢様、少しはなれて」
はい。と下がったエイミールを見てから、レイは石を持たないもう片方の掌に、黒い玉を発現させた。ぽいと投げ捨てると黒い闇が、野原の植物の気を喰っていく。レイが、戻れと命じると黒の玉はレ

イの掌に戻ったが、黒の玉が喰らった場所は、植物が枯れ果てていた。
そして、レイの持つ石の色も・・・・。
示された掌の上。石のいろは。
「・・・黒くなってる・・・」
「・・・ええ。風属性を持つ者は石が白く輝きを増します。光属性を持つ者は、黄色に。水属性は青く。火属性は紅く。土属性を持つ者は緑に。金属性を持つ者は石の色が透明になり、最後に、闇属性を持つ者は黒く変化します。私は風と光と闇を持つ珍しいタイプの魔法使いなんですよ」
そう言って笑ったレイにエイミールは尊敬の眼差しを向けた。

すごい！レイはなんてすごいんだろう！

不死者なのに、精霊魔法が使えて、綺麗なきらきらも作り出せて、黒魔法使いでもあって・・・。
そんな思いがそのまま顔に出てしまっていた。
そのきらきらした眼差しに見つめられたゾンビは、最高の賛美の眼差しに打ち震えていた・・・。
・・・ああ！嬢様の眼差しが・・・！！！背筋がぞくぞくしますゾ！嬢様！
この眼差しだけでどこかへ、逝ってしまいそうな、レイであった・・・。

さて、そんな葛藤があったなんてもちろん知らないエイミールは、示された石を前に戸惑っていた。
「どうすればいいの？」
と、心もとない顔で上目使いに（びば！身長差！ｂｙ．レイ）レイに尋ねる。
そんな彼女の表情をうっとり見つめてから、レイは石をエイミー

ルの掌に乗せ、そっと握らせた。
「・・・そうですな。いつも通りでいいのです。嬢様はいつも精霊に囲まれておいでですから。そのままで・・・」
エイミールは手の中の石が暖かくなるのを感じた。
小首を傾げてそっと吐息をつくと目を閉じる。脈動する。暖かい。
「・・・嬢様、もういいですぞ」
レイの言葉にそっと目を開け、掌を開いた。
「・・・虹・・・きれい」
エイミールの掌で、白かったはずの石は、さまざまな光彩を放っていた。
赤、黄色、緑、青、白、混ざってピンク、水色、黄緑、紫、橙色・・・。
そして、中央に溢れんばかりの黄金色。
・・・レイ・テッドは、身を襲う歓喜に震えていた。
歓喜、羨望、崇拝・・・。
言葉に出来ない感情の羅列。
過去、これほどに見事な光彩を放って見せた者はいない。
・・・ああ、嬢様！
陶酔しきった眼差しで、レイがエイミールを見つめている。・・・
その眼差しは、包帯の陰に隠れて見えないが。
そのレイの真ん前で、エイミールは自分の掌に生じた光に目を奪われていた。
無数の輝きがあった。
きらきらと、光の粒。
「・・・レイ、わたし、魔法使いになれますか？」
おずおずと、尋ねた声に。
「ええ。このレイが保障いたします。嬢様は偉大な魔法使いになれますぞ」
レイ・テッドが大きく頷き答えた。
レイの、その答えに大きな瞳を更に大きくして、エイミールがふ

わりと微笑んだ。

＊＊＊

第十八話：少年と少女

・・・忌々しい不死者め！
男はちっ！と舌打ちをすると、気配を消して城内へ駆け戻った。
魔力の希薄なあのゾンビが、あんな魔法力を持っていたなどと、計算外だった。
しかも、精霊の加護のせいか、気配を読むのに長けている。
尻尾を捕まれる前に場を離れてよかった、と思わずにいられない。

・・・ああ、忌々しい。

我が、敬愛する魔王閣下のお側に居りながら、あの小娘を排除しようともしない輩達が。

魔王閣下の側近という大役を受けながら、その恩に報いようとしない輩達が。

心底、憎かった。

敬愛し、尊敬するに値する、偉大なる魔王閣下。
玲瓏な美貌。怜悧な頭脳。撃ち振るう力は最大にして最高の魔力。
最強にして最高の・・・魔王閣下。
彼の元で魔軍の一員に名を連ねる事が最高の名誉だと思っていた。
彼の名の下に集えて幸せだった。
彼の君は、孤高。
居並ぶ魔族の誰よりも、気高く美しい最高の御方。
なのに。
彼の君が求めたは、貧相で貧弱な小娘。
あのような貧相な輩が、彼の君の隣におわすなど、許せるはずが

無い。
・・・城内に戻り、男は共犯者の下へ急ぐ。
男がこの計画を思いついたのはこの女に出会ってからだ。
ある日、女は男の前に現れて、男の耳にそっと囁いたのだ。
「我等が敬愛する魔王閣下を支えてまいりましょう。我等こそが真に魔王閣下を支えていくのです」
その言葉に、男は、歓喜した。
分かってくれる者がいたのだ。男の忸怩たる思いを。
あんな小娘如きが魔王閣下の側にいていいはずが無いのだから！
「全ては魔王閣下の御為に」
女は、そっと男の耳に囁いた。
「われらの行いこそが、まこと、魔王閣下の御為に叶うのだから・・・！」
・・・女は、今は滅んだ夜の眷属の一員だという。
夢魔。淫魔。夜の闇に巣食う魔物たち。
中でも女の異能は、夜の眷属達ですら、忌避するものだった。
畏れられ、敬遠されるその力。産まれ持ったその力を恐れた夜の眷属たちは、女の力を封じる事にした。
産まれ持った力ゆえに畏れられ、それゆえ同属からもはじかれた女。
はじかれていたが為に、夜の眷属の滅亡に巻き込まれずにいた女。
そして、眷属が滅びた為に課せられていた封印が解かれた女。
彼らは信念の名の下に、行動を興し、信念の名の下に、破滅を呼ぶ。

＊＊＊

かったし、夜の眷属が素晴らしく、飛びぬけて優秀だなんて思ってもいなかった。
優秀な奴はそれこそどこにでもいる。
獣族の長は強くて憧れたし、竜族の長の桁違いの強さを聞けば肌があわ立った。
そして、魔界最強を誇る、魔軍指令官の名前は畏怖を持って心に刻み込んだし、彼らの元で命に従うのが当たり前だと思っていた。
彼らの元に馳せ参じ、魔軍の構成員の一員に数えられれば、少年は幸せだったのだ。
現実を見ようとしない、じいちゃんのように、何時か、魔界を夜の眷属が征するなんて思っていなかったのだ。
それがだ。
「・・・夢とか、希望に、目を奪われすぎてたなぁ、おれ・・・」
レミレアは大きな溜息と共に呟いた。
夢と希望に目を輝かせていた少年は、夢が虚構であったことを知る。それは、なりたかった魔軍の一員に組み込まれたからであったが。
目の前には、獣族の長である、アマレッティが、ぐでんと椅子によっかかっている。
手にはエイミール特製のサンドウィッチ。幸せそうにもぐもぐしている彼は、日向ぼっこ中の豹のようだ。
その隣では、なにやら、布地を弄繰り回している竜族の長、リアナージャが。
どうじゃ！と広げた布地に目をやり、純情少年レミレアは鼻血を噴きそうになった。
「り・・・リア様！それもうドレスじゃないから！ってか、そんなのねえさまに着せるつもりか！」
そう叫べば、ナニを今更！とばかりの目で見られ。
「あたりまえじゃあ！」
ときっぱり言い切られて、レミレアは憤死しそうになった。

こいつら馬鹿だ！馬鹿ばっかりだ！
イタイ頭を振りながら、それでも、と希望を目にすれば。
最後の希望である、孤高の魔王閣下アルファーレンは今日も窓枠を握りしめ、嫉妬で溶かしにかかっていた。
「・・・おのれ・・・。エミーの時間を独り占めにしおって・・・」
レイに向ける物騒な眼差しは、最初こそ皆を慌てさせたが、最近じゃアマレッティも止めに入らない。日常になりつつあった。
嫉妬に燃える魔王閣下を見やって。レミレアはまたため息をついた。
「・・・こんな・・・こんなシスコン達が、魔軍最高幹部なんて、詐欺だ・・・」
レミレアは、一人呟く。だが、彼も列記としたシスコンの一員であるという事実に気付いているのか、いないのか？・・・恐らく、気付いていないのだろう。
「・・・そろそろ、始業の時間だな。ねえさん、遅いな・・・」
そう思ったとき、金色の少女が慌てたように、執務室に駆け込んできた。
その姿を目にして、レミレアは、小さな違和感を覚えた。
金の髪、白皙の肌、赤い唇。・・・緑の目。
小さな手足、華奢な肢体。・・・危うい仕草。
「ねえさん？」
声をかけた。ほんの少しの違和感がレミレアにそうさせた。
レミレアの声にぱっと顔を上げた少女は、一瞬目を見張り・・・そして顔を伏せた。
「？　ねえさん？　レイは？」
「・・・、ミ・・ァ・で・・・」
少女が俯いて何かを呟く。その呪詛に満ちた小さな声。
その声に、リアナージャ、アマレッティが、立ち上がる。
「エミー？どうしたのじゃ？」

「エミー？どうしたんだ？」
「エイミール？」
アルファーレンの呼び声に、我に返った少女が魔王を見た。魔王と、ふたりの兄を。弟を。
魔王を・・・緑の瞳に写した。獣族の長を。竜族の長を。今は無き夜の眷属の公子を。
緑の瞳に写した。
魔王の顔色がさっと変わる。アマレッティの目が尖る。リアナージャの目が細く険しくなる。
そして、レミレアは確信した。

「「「「だれだ、きさま！！！」」」」

エイミールだった少女は、一瞬身体を震わせると。
その身を黒く溶かした。
空間に黒い靄が現れて、魔王と側近達をつつみこんだ。
レミレアはこれに、覚えがあった。
背中がざっとあわ立つ。
「吸うな！この靄を吸うな！」
レミレアの叫びに場が騒然と成った。マクギーが倒れる。ガーランドが苦しみだした。
レミレアは翼を出して靄を追い出そうとした、が・・・間に合わない！
「魔王！アマレッティ様！リアナージャ様！吸うな！これは・・・夢魔の霧だ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・・・物心付いた時、じいちゃんの屋敷には一人の少女が呪符の

檻に入れられたままで、悲しそうだったのを覚えている。
自分とさほど変わらぬ年頃の少女で、多分、ねえさまと同い年だと思う。
一人ぼっちで檻の中は可哀想だと何度じいちゃんに言った事か。
出してやってと何人の大人に頼んだか。
けれどもそうして頼むのは、かえって少女にとって辛い事だと気が付いた。
頼めば頼むほど、少女の身体に傷が増えるのだ。
ある日こっそり檻を見張っていたら、じいちゃんが、眷属の男にその少女を痛め付けさせている所を見てしまった。
「ワシの大事なレミレアに色目を使うとは！このおぞましい記憶喰らいの娘が！レミレアを誑かしてこの檻から出してもらおうとでも考えたのか！」
「坊ちゃんを使うなんて、なんて計算高い奴だ！」
男達は口々に罵りながら、少女を蹴りつけ、殴り倒し、やがてそれに飽きたのか、そこから離れていった。
檻の中に残された少女は、ぼろぼろで、生きているのか心配になった。
じいちゃんたちが消えてから、そっと側により、檻の間から手を伸ばした。
そっと撫でてやったら、少女が目を覚ました。黒い黒い瞳だった。
「・・・ごめんな。俺が余計な事を言ったから、痛め付けられたんだろ？」
そう言って謝ると、少女は目を見張って、首を振った。
「・・・ごめんな。今薬持ってきてやるから・・・」
そう言って立ち上がると、少女が慌てたように首を振った。
「・・・だめなのか？・・・あぁ、また殴られる？」
その問いに少女は頷いた。ああ、そうか。と思った。余計な事はしないほうが良いと分かっても・・・何か、してやりたかった。
「・・・こっそり、持ってくるよ。そうすれば・・・」

レミレアの言葉に、少女は始めて微笑んで、それから、言ったのだ。
「・・・大丈夫です。公子様。記憶を喰ってしまえば、痛いのもすぐに忘れられますから・・・」
「記憶？」
「ええ。公子様。私は記憶喰らいのキリエ。自分の記憶でさえ、跡形も無く喰ってしまえるのです。だから、いやな思い出も、痛い思い出も・・・私には何もありません」
「・・・う、ん。でも、痛いのは嫌だろう、ぬり薬くらいはいいだろう？」
そう言って走り出したから。
レミレアは知らない。
走っていくレミレアを、キリエがびっくりしたように見ていたことを。
それから、嬉しくて泣いた事を。
キリエが、この暖かな記憶だけは、喰ってしまわないように、それから後もずっとずっと、気をつけて生活していた事を。
・・・レミレアは、知らない。

第十八話：少年と少女（後書き）

これより、シリアスに突入します。

第十九話：義兄さんにんと義妹　2（前書き）

今回ちと、痛いです。別人注意。

第十九話：義兄さんにんと義妹　2

執務室の窓が、外に向けて吹き飛ばされた。
レミレアが必死に翼を使って、黒い靄を追い出そうとする。
だが・・・。
魔王執務室の惨状は目に余るものがあった。
そこここで、倒れている者がいた。
レミレアは慌てて魔王に近寄った。
魔王の側に、アマレッティとリアナージャも立っている。倒れてしまった側近連中とはやはり格が違う。レミレアはそう思ったが、安心してはいなかった。
過去、一度だけ見たことがある。
あれは、キリエと呼ばれた少女の持つ力だった。
記憶を跡形もなく喰らい、そのものを再起不能にする・・・。ぞっとした。
夜の眷属の一員がしでかした事にレミレアは焦っていた。
「魔王様。・・・アマレッティ様、リアナージャ、さま？」
眼差しは冷めていた。いつものような、どこかからかいを含んだあの眼差しではなかった。
そのことに、絶望が走る。
「・・・キリエ。いるんだろう？何をしたんだ？魔王様達に何をしたんだ！」
レミレアの叫びに答えるように、黒い靄が集まり、形を成し一人の女となった。
あの少女の面影を持つ女に、レミレアは詰め寄った。
「何を・・喰った」
その言葉にキリエは・・・笑った。
笑うしかなかった。
まさか、彼が生きていたなんて！

そして彼もまた、あの娘の虜になっていたなんて！
なんて、現実。
なんて、不運。どこまでもどこまでも、付いて回る忌々しい小娘！
「キリエ！貴様・・・！」
壊れたように笑い続けるキリエに業を煮やしたレミレアが声を上げたとき。
「うるさいな」
アマレッティの声が遮った。
慌てて魔王たちを見やれば。そこは。
険呑な眼差しで見つめる先には、なぜかアルファーレン。
またアルファーレンも、アマレッティとリアナージャを冷めた眼差しで見つめている。
そして、リアナージャは尊大な態度で、研ぎ澄ました魔力を漲らせ、彼らを見ていた。
まさに、一触即発。
その構図にレミレアが、はっとキリエを見た。
キリエが笑う。それを見て笑っていた！
「・・・まっ・・・待って！これは、キリエが記憶を喰ったからだ！どんな記憶を喰ったのか分からないけど、だから、落ち着いてくれ！」
レミレアの取り成しに、答えるものは誰もいない。

一触即発のその場を動かすのは、誰にでも出来る事ではなかった。
だから、澄んだ声が聞こえた時、実はレミレアはほっとしたのだ。
「アルファーレンにいさま？アマレッティにいさま？リアナージャねえさま？どうしたんですか？」
エイミールが、レイと共に執務室に入ってきた。
一見して異常に気付くと。レイは床に倒れこんだ側近幹部達に手を貸し、介抱しようとエイミールから離れた。
エイミールは顔色を変えてアルファーレンに駆け寄り、怪我の有

無は無いか調べようと手を伸ばした。
ほっとした表情でレミレアがエイミールを見、それから、これでとりあえずは収まるだろうと、思ったその時。
ぱしん。と。
アルファーレンがエイミールの手を弾いた。
それにレミレアとレイの動きが止まる。
エイミールは、きょとん、とアルファーレンを見た。
「にいさま？・・・お怪我は？」
小首を傾げて、アルファーレンを見上げ、そして、もう一度手を伸ばした。
その手を捻り上げられるなど、考えてもいなかったのだ。
「・・・！！に、いさま？」
「・・・だれだ」
「何者？」
「だれじゃ、」
三人の兄の眼差しは。
エイミールを見てはいなかった。
それは取るに足りない虫けらを見下ろす眼差しで、エイミールは余りの冷たさに、身体を震わせた。
「・・・な・・・キリエ！お前、ねえさまの記憶を喰ったのか！？」
「レミレア殿！魔王様方は、いったいどうなさったのですか！？」
レイが険しい顔でレミレアにせまる。
その間も、エイミールは自分を拘束する青銀の眼差しを見つめていた。いつもの瞳、なのに、いつもと違う眼差し。
エイミールは震える心、そのままに、アルファーレンを呼んだ。
アマレッティを。
リアナージャを。
「にいさま？」
アルファーレンの眉が眇められる。忌々しそうに少女を見つめる

と、掴んだままの腕を乱暴に振り上げて。
投げ捨てた。
その先は・・・。
大きく崩れた窓。
尖るガラス、粉々に砕け散った窓枠。その大きな瓦礫の中に。
「！！！じょうさまっ！！！「ねえさんっ！！！」
レイとレミレアの声が重なり、小さな悲鳴が上がった。
信じられなかった。
あのアルファーレンが、エイミールを故意に怪我させるなど。
守るべき少女だといい、実際守りきってきた彼が、彼女に取った仕打ちが。
だから、レイは動けなかった。
だから、レミレアは動けなかった。

アルファーレン・カルバーンが、エイミール・リルメルを、傷つけるなんて、誰も思っていなかった。

「嬢様！嬢様！あ、あ、血が・・・！！！魔王閣下！なんてことを！」
レイが慌ててエイミールに近付こうとした時。
一足早くアルファーレンがエイミールを持ち上げた。抱き上げたのではない。
・・・まるで小動物の喉元を絞めるように、片手で、持ち上げたのだ。
目線の高さまで上げられて翠の瞳が涙に滲む。首元を絞められて、息ができなかった。
それでも、エイミールは、アルファーレンに手を伸ばした。
それを横目で見やったアルファーレンは。
「私の名を呼ぶ権利を与えた覚えは無い。・・・何者だ？」
そう、問うたのだ。

エイミールは、アルファーレンの言葉を聞いていた。
ただ、聞いても頭に入ってはこなかった。
だから。
「あるふぁーれん、にい、さ、ま」
名を、呼ぶことしかできなかった。
エイミールにはそうすることしか出来なかったのだ。
・・・たとえそれが、彼の怒りに油を注ぐ事になろうとも。

アルファーレン・カルバーンは言いようの無い怒りに苛まされていた。
頭が燃えるように痛い。熱い。
何か、大事なものを失ったようで、失うものなどないと思い返す。
大切な何かを忘れているようで、忘れるものなどないと、思い返す。
その繰り返し。
そんな苛立ちの中に現れた、小娘は、誰にも許さなかった名前を簡単に口に乗せていて、それも怒りに拍車をかけた。
苛立っていた。何もかもに。
顔を合わせたくもない男が目の前にいる。アマレッティ・ゼランドと、リアナージャ・ナーガ。
魔王として魔族を治める立場においては仕方のないことかもしれんが。
彼らを警戒する余り、小娘を容易に側に寄せてしまって腕に触れられた。
その衝撃は言葉に出来ない。
なぜこんな小娘を容易く近付かせたのだ、私は！
触れた娘を手で払いのけ、放り投げれば、魔力の欠片も持たない娘が容易に血を流した。
それを見て、胸のどこかが、血を流す。

その事実に更に苛立ちを募らせる。
なぜ、こんな小娘一人、血を流したくらいで、私の胸は痛むのだ！？
苛立たしかった。なにもかも。だから。
不死者よりも、羽持つ子供よりも先にその小娘の元に行き、その小娘を締め上げた。
何者だと問う声に、娘は翠の瞳を丸くして、苦しそうに呟いた。
「アルファーレンにいさま」と。
一気に膨れ上がった感情は。
名を呼ばれて、身のうちを震わせたこの気持ちは。怒りだと思った。
なぜなら、この娘に見覚えがない。
一度も面識がないと言い切れる。
だから、身を震わせる声を持つ、この娘を。

・・・生かしてはおけなかった。

膨れ上がった魔力が、研ぎ澄まされた剣を作り上げた。
それを片手に掲げ持ち、アルファーレンは尚もエイミールに詰め寄った。
「何者だ。きさま」
「に・・・さま」
エイミールには最早抗う力はなかった。ただ、ひたすらに、兄を呼んだ。
それしか出来なかった。
アルファーレンは、苛立ちをつのらせた。この娘のつむぎ出す声が、身を震わせて止まないのだ。
・・・そんな哀れを誘う声で、私を呼ぶな！！

エイミールの翠の瞳が。
アルファーレンを捕えて、涙を零した。
剣が、エイミールの喉元に突き当てられた時。
レイとレミレアが動いた。
翼に風をはらませて、レミレアがアルファーレンに体ごとぶつかって行った。
レイが魔法を展開し風の塊をアルファーレンにぶち当てた。
風がエイミールを捕え、それを見たふたりが目配せする。
大きく床を蹴って、エイミールを抱え、そのまま外へ、逃げ出した。
後は、レイの魔法とレミレアの翼の限り、魔王城より遠ざかるだけ。

この腕の中で震えながら見上げてきた小娘。
翠の瞳に涙を浮かべ、真っ直ぐに。
その一途な眼差し。
アルファーレンは開いた掌を見つめていた。
まるで、掌に残された、ぬくもりを捜しているようだった。
その掌を握り締めると、見たくもない顔に向き直った。
「さて、なにやら、記憶操作をされたようだが、貴殿らは大丈夫か？」
「問題ない」
「わらわもじゃ。大体、喰われて困る記憶など、有りもしないだろう・・・」
「・・・ふ。確かにそうだな」
そうだ。
喰われて困る記憶などない。
アルファーレンと、アマレッティが目を合わせる。

リアナージャが眼を細め、ふたりを見、そして三人は頷いた。
魔界における、魔王軍の結束の固さに、些かの揺らぎもなかった。
たとえ、彼らの心に、大きな穴が開いていたとしても。

第二十話：義兄さんにんと義妹　3

執務室はいつになく緊張感が漂っていた。
・・・いつになく？いや、違う。いつもこうだったではないか。
魔王軍最高幹部の一員であるマクギーは、頭の隅の違和感を打ち消した。
魔王閣下の御為に、智略を尽くし、粉骨砕身お勤めするのが我が仕事！
・・・だが、なんだろう。この喪失感は。
この、胸にぽっかりと空いた、寂寥感はなんなのだろう・・・。
そんなマクギーの葛藤を知ってか知らずか、アマレッティが声をかけた。
「・・・マクギー。あの夜の眷族の子供が言っていた、キリエとやらを探し出して来い」
藍色の瞳が険呑な色を載せてこちらを覗いていた。
それにぞっとして、またいつもの事だと打ち消した。そうだ。獣族の長は強く気高く静謐なお方だった。
・・・だった？
自分の中に浮かんだ答えに、ふと違和感を抱く。そうだっただろうか。アマレッティ様はこんなに冷たい眼差しで我等を見ただろうか・・・？
だが、一瞬の逡巡も、主の為にかき消して、マクギーは恭順な仕草で命を受けた。
「・・・キリエとやらを追うのですな？あの小娘ではなく？」
獣族の長は、厳しい眼差しで鷲を見つめた。その眼差しに失言を悟る。
「・・・夜の眷属だ。追う者を間違えるな」
「は！申し訳ありませぬ」
慌てて平伏しながら鷲な男前はなぜ、今、こんなことを口に乗せ

たのだと自分を責めた。
命令遵守が当たり前なのに！
・・・だが、どうしても。
マクギーは、空を駆けていった彼らの方が。
・・・気になったのだ。

頭の中が熱い。痛い。
苛立ちは際限なく押し寄せる。ちっ！と舌打ちをして、アマレッティは回りを見渡した。
執務室は凄惨な有様だった。
大きく崩れた窓から、外が見える。そのはるか彼方を目でおっている自分に気付き、また苛立った。
・・・なんなのだ、一体！
目を逸らすその一瞬に、目の端に捕えた血だまり。
それを目にしてまた背中があわ立った。動揺する自分に、動揺する。
だが、これを悟られてはいけない。あんな小娘一人、傷付いたからどうだと言うのだ。
生きようが死のうが関係ないではないか！
名前も知らない。顔も知らない。言葉を交わした覚えもない。
取るに足りないただの迷い子。傷付いて血を流そうが、息絶えようが、関係はないのだ！
・・・なのに、心のどこかが急を叫ぶのだ。
・・・追いすがり、怪我を確かめ、それから・・・？
「・・・忌々しい！」
なんなのだ。この心の揺らぎは。
いったい何なのだ！

軽く頭を振って、執務室の次の間を目に入れた。
今日の仕事は、ここでは無理だ。
今日から暫く次の間で決済をするか。
そう思い至って足を向けた。
それが更なる動揺をもたらせるとは知らずに。
管理責任者の欄に、エイミール・リルメルと名があった。それは別に良い。誰だろうが別に良い。
問題は、それを記した文字が・・・自分の筆跡だという事。
そして、記憶力には絶大な自信があるアマレッティにとって、書いた覚えがない事実が、彼に自己の揺るがぬ記憶を疑わせる一歩となる。

リアナージャ・ナーガはすらりとした痩身で、そこに在った。
腕を組み、周りを見渡す。
酷い有様だった。
大きく崩れた窓。引き裂かれたドレスの切れ端。
そこから滴る、血。
それを見て胸がざわめく。血だまりなど、見飽きたはずなのに。
なぜこの色に、ここまで動揺するのだ？
それに柳眉をきゅっと吊り上げて、側近らを見渡した。眼差しが細く尖り、一人の男を睨みつける。
アルファーレン・カルバーンは孤高の魔王の呼び名の通り、静謐な面持ちでそこにいる。
その彼は、開け放たれた窓枠から、外を見ていた。
かすかに歪む眉が魔王の苛立ちを露にしていた。
アルファーレンも、言い知れぬ苛立ちを抱えているのか。そう思い至って、リアナージャはおのれの全身に魔力を走らせた。
身体のどこにも異常はない。断言できる。
だが、記憶は？・・・喰われて困る記憶などない、と言い切れる。

だが、そう思う事さえも、何か事をなした輩の思うツボだったら？
頭の中に熱がこもる。重く熱く、じんとした。
これをよこした奴等を許しはしない。
わらわに対し成した罪は、贖わねばならん。

「・・・アルファーレンよ。わらわはキリエとやらを探し出すぞ。それから、キリエの後ろにいる奴を炙り出す。いかなる事も容赦ならん。我らに害なくとも我等に対して行った物事の見極めは必要じゃ。よいな？」
「・・・好きにすればよい」
ただじっと窓の外を見つめている魔王に、竜族の長はふんと鼻を鳴らし、言い放った。
「・・・貴様も、気になるのなら、追えば良いではないか！軌跡を目で追うのも限度があろう」
その問いに、わずらわしげな眼差しをよこして魔王が口を開いた。
「・・・別に、気になどなっていない。死のうが生きようが・・・どうでも良い」
「・・・ふん。追いかけたいと思うておると見たは、まちがいかの？」
嘲るような声音でそう告げられて、アルファーレンは険呑な光を目に浮かべた。
睨みあうふたり。
それに詰まらなそうな眼差しを送ったリアナージャが声を出した。
「・・・アルファーレン。先にも言うたが・・・わらわに喰われて困る記憶などない。無いが、それでも、わらわの記憶じゃ。誰にもやらんと決めた！竜族の長の記憶を喰らった輩、見つけ出して八つ裂きにしてくれる。アルファーレン、ガーランドを貸せ」
その言葉に、冷めた眼差しで答えるは、魔王。
「・・・好きにしろ」

＊＊＊

魔軍の中でも結構な地位にある男にとって、この間の人間による魔界侵攻は許せるものではなかった。
圧倒的な力の差を見せつけて勝利に終わった今も、男にとってそれはヌルイ手でしかなかった。
「魔王閣下は、魔界のみならず人界も掌握すべきなのだ！」
おこがましくも希代の魔軍師である、魔王閣下に歯向かった人間達。
無秩序なイキモノは統制されなければならない。
人間の知識、力が如何ほどでも、魔王閣下の足元にも及ばないのは明白。
ならば、人間は人間による統治などすべきではないのだ。
魔界を統べるアルファーレン・カルバーン閣下。
彼の絶対的統治の元に「生産する家畜」であれば。
人間にとっても、それは良い事だろうから。
「魔軍幹部を焚き付けて、人界掌握の第一声をあげてもらうのだ・・・！」

魔王閣下に慈愛や優しさなど必要ない。あの小娘のもたらす甘やかな微笑みなど、魔軍を率いる魔王閣下には不必要なのだ。
ましてや、今までなら、侵攻してきた人間の遺骸を送り返すなど有りもしなかったのに。
戦に破れ、倒れた遺体は、魔獣のえさとなるが、常であったのに。
魔王閣下は、あの小娘の一言で、遺骸を返す事を決めたと言うではないか！
忌々しかった。
魔王閣下の心を占めるあの娘が、心底忌々しいと感じた。
我が敬愛する魔王閣下の側に、そんな腑抜けた輩がいることが。
冷徹で冷酷な、孤高の魔王閣下を、ただの男にしてしまう小娘が。
脅威だったのだ。

＊＊＊

第二十一話：存在と不在

エイミール嬢様をつれて逃げる。
いつもであれば、すわ駆け落ち！とのたうつところだが、話が違う。
駆けに駆けて、少しでも魔王の魔力の届く範囲から逃げ続けた。
心臓が悲鳴を上げるが、速度を緩める事ができない。ひたひたと、背後に忍び寄る影に怯えていた。
「・・・レミレア！追っ手は？」
「・・・見えない！」
常にない真剣な声が返る。
あたりに探索の風を使わせて、追っ手がいないことを確認する。目視だけでは安心できなかった。
追っ手がいないことを確かめてから、レミレアに頷くとレイは速度を落とし始めた。腕の中のエイミールを見る。
顔は青白く、虫の息だった。頬に掛かった金の髪も血に塗れ、腕から滴り落ちる血の色に背筋がぞっとなった。とめどなく流れる涙が哀れを誘う。
胸が痛かった。
「レミレア、嬢様がもう持たない。下りて、どこか休める場所を探さねば」
「だけど、どこに・・・」
ざっと足下を見渡せば、魔界領域の端、ダウニーへ入り込んでいることに気が付いた。
うっそうとした森の中なら追っ手の目も眩ませるし、薬草もあるだろうと検討つけてレイとレミレアはダウニーへ降り立った。
居心地の良さそうな木陰を見定めて、そこにそっとエイミールを降ろした。
・・・酷い傷だった。

背中に刺さった小さなガラスや木片を抜いていく。縦に裂かれた傷口から滴り落ちる血の色が痛ましかった。悲鳴を上げることもできず、身をわずかに震わせるだけのエイミールに、危機感を感じた。
応急処置を施すにも、手元に何もないのが痛かった。レミレアが自分のシャツを引き裂きながら、レイに問いかけた。
「治癒の術は？あんた、魔法使いだろう？」
レミレアのその言葉に、今一番打ちひしがれているレイだった。
治癒術など、力の無い者が学ぶ術だと侮っていた。
自分が傷つかないほどの力を内包しておけば良いと思い込んでいた。
過去自分が習得した術は、破壊を中心とした強大な術ばかりで、更に内在する力全てを攻撃力にする為に黒魔法に手をだした・・・。力なく首を振る。
「・・・治癒術は、使えない・・・。黒魔法士とはそういう者なのです・・・。ですが、幸い、薬草の知識はあります」
そう言って、レイはレミレアにエイミールを預け、薬草を探しに森へ入った。
傷口を洗うための水も欲しかった。
精霊を呼んで水のありかを尋ねると意外に近いところに川が流れている。
それにほっと一息ついて、さあ、水をくもうと近付いたら。
・・・人間と出くわした。
ふたり組みの、若い青年だった。
「「・・・精霊使い！」」
・・・しかも、向こうは一方的にこっちのことを知っているようだ。
「・・・失礼な」
「ま、まて！」
「・・・うるさいな。私は忙しいんです」
そう言って眉間にしわを寄せ、苛立ちのまま背を向けて、しかし、

待てと足を止めた。
相手は人間。怪我もすれば死にもする。それでは？
レイは改めて顔を向けて黒髪と銀髪に尊大に尋ねた。
「・・・少しモノを尋ねます。あなた方、治癒術は使えるか？」
「治癒？フォルトランが得意だぞ。誰か、怪我でもしたのか？」
・・・若い男ふたり組みは、アリアナのフォルトランと、リカンナドのディレスだった。
訝しげに尋ねてきたディレス・・・黒髪にレイは頷いた。
「使えるのなら話が早い。手を貸しなさい」
慇懃な態度でお願いをしているようだが、それは懇願ではなく命令だった。
ディレスの眼差しにフォルトランが頷いた。頭が痛い。
「・・・なんにせよ。困っている奴に手を貸すのは良い事だ」
たとえそれが魔族だろうが、人間だろうが、さ。
そう言って、急ぐレイの後に付いて行き。
・・・彼らは天使に出会う。

＊＊＊

また、弾かれるかもしれない。
その思いが、腕の動きを鈍らせる。
繋いで欲しかった。
この手を取って、離さないでいて欲しい。
「・・・に、・・・さま」
呟いて、拒絶の畏れに震えたエイミールの手は今度は弾かれることなく、温かい掌に包まれる。
それにほっと息をつき、眦から涙を零し目を閉じた。
・・・ああ。やはり夢だったのだ。
あれは酷い夢だったのだ、と思いながら、エイミールは今度こそ幸せな夢を見る。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・眠ったようだ。レイ殿」
治癒の術式を、構築し展開したフォルトランが、そう呟いて、レイとレミレアはほっと安堵の吐息をついた。
「間に合ってよかった。こんな酷い怪我、どこで受けたのだ」
ディレスが痛ましげな顔をエイミールに向けた。
小さな女の子が、受けていい傷ではなかった。
「・・・そもそも、あんたたちはどうしてここに居るんだ」
ディレスのもっともな問いに、レイは沈思した。
なぜ、とは彼が問いたい事柄だった。そもそも、なぜ、あの魔王閣下が、よりにもよってエイミール嬢を痛めつけたのだ？
あの眼差しを思い出し、レイは背中をあわ立たせた。冷たい眼差しだった。あんな眼差し、嬢様に向けるものではない！
・・・そんなレイとは対照的にレミレアが苦い顔をし、呻くように言葉を発した。

「・・・夜の眷属だった。夢魔の一人で・・・キリエの術は記憶を喰うんだ・・・」
「記憶喰らい？では、魔王閣下は・・・！」
「・・・魔王だけじゃない。・・・アマレッティさまも、リアナージャ様もだ・・・！あそこにいた側近全て、ねえさまの記憶を喰われている・・・！！！」
レミレアは泣きそうな顔で、更に続けた。
「・・・キリエだった！ずっと、檻に繋がれていたあいつが、なんで今、魔王閣下を襲うんだ？・・・襲うなら俺だろう？あいつを迫害していたのは、夜の眷属なのに！教えてよ、レイ！なんで、あいつ、ねえさまの記憶だけ喰ったんだ！？」
「・・・私のほうが、聞きたいですよ・・・。ですが、そうですか、記憶喰らい・・・だから、ですか。魔王閣下の変貌は」
そう言って痛ましげな眼差しでエイミールを見た。
エイミールは今は安らかな顔で、眠りについていた。
治癒の術式のもたらす淡い光の中で、フォルトランの手を握り締め。
仄かに血色の戻った頬が、危うい影を作っていた。
それを見つめて、レイ・テッドはおもむろに包帯を解き始めた。
それをぎょっとした顔でレミレアが見つめる。
「レイ！・・・い、いいのか？」
「魔王閣下がいないのです。それにそろそろ嬢様に素顔を見せてもいい頃でしょう。レミレアも、覚悟なさい。魔王閣下が混乱なさっている今、嬢様が見つかればそれは死を意味します。閣下の混乱が収まるまで、閣下の目から隠さなければなりません」
そう言ったレイの目は本気だった。
本気でエイミールを隠し切るつもりなのだと思い知った。
魔王を相手に真っ向から歯向かおうとする不死者の意気込みにレミレアも、覚悟を決めて頷いた。

＊＊＊

大丈夫だと、心配は要らないと、声にするでもなく伝えてあげたかった。
だから繋いだ手を、少女が握り返してくれた時。
その翠の瞳が自分を捕らえて、淡く微笑んだ時。
・・・歓喜が襲った。
生きようとしているのだと、諦めてはいないのだと、知らせてくれた少女の手。
暖かさが胸を打った。
フォルトランは、エイミールの手を掴んだまま、ただじっと、エイミールを見つめていた。

第二十一話：存在と不在（後書き）

・・・フォルトラン・デルサ。落ちました。

後、裏に未来予想図アプ。

第二十二話：不死者と皇子

光の精霊が暖かく照らす光に包まれて、エイミールは横たわっていた。

その横顔に苦悶の様子はなく、安心しきって眠っている。

・・・フォルトランの手を握り締めて。

そんなふたりをぎりぎりと睨みつけながら憤る不死者、レイは忌々しげにフォルトランを見た。

だが、エイミールの気持ちを思えば引き剥がすのは躊躇われる。

彼女が男の銀髪に誰を重ねているのかは明白だった。

魔王閣下。

エイミールの絶対の崇拝者。

その彼が成した、記憶を喰われていたからと言えども、許せない仕打ち。

沈思する意識を浮き上がらせて、レミレアに向き直った。

「レミレア、キリエという女の術は、いつまで続くのです？喰われた記憶は戻るのですか？」

その問いにレミレアもまた、深く思考に沈んだ。過去に見た、あの術。

キリエの意識から離れたところで起こったのなら、止めようもなく記憶を全て喰らわれて廃人になっていた。だが、キリエが望んで引き起こした時はどうだった？

「・・・分からない。キリエが望んで記憶を喰うのは自分だけだったから。いつもは、じいちゃんに術かけられて操られてた。そんなときは喰われた相手も大変だった。意識も全部喰われてしまって・・・再起不能になっていた」

「では、今回の魔王様は？」

「・・・分からない。力ある方の記憶を喰ったことはないはずだから、もしかすると、戻るかもしれないけど・・・」

と、歯切れ悪くぽつぽつと話すレミレア。
「不確定と言う事ですね」
レイの言葉に苦い気持ちのまま頷いた。
エイミールを踏みにじり、消せない怪我を背負わせた、魔王閣下。
だが、それは彼から記憶を奪わなければ起こるはずのなかった事件。
そして。
「・・・記憶が・・・戻ったら苦しむのは結局、魔王閣下だ・・・」
愛して止まないたった一人の少女を守り抜く気概を持っていた美丈夫は、あの傷を正視できるだろうか？
「だが、それでも。記憶を戻していただきますぞ。エイミール嬢様のためにも」
魔王閣下の苦しみも、エイミール嬢の傷に比べれば何ほどのものか！絶対に、記憶を取り戻してもらいますぞ。それまでは、魔王閣下の眼から嬢様を隠し切って見せますとも。
レイは黒い瞳に力を込めた。
話を側で聞いていた人間がそっと口を挟んだ。黒髪の男・・・ディレス。
「レイ殿たちは、魔族なのだろう？この子も・・・その、魔族なのか？」
ディレスがポツリポツリと話しかけてきた。
「魔族ですよ。私は不死者で以前は人間でしたが、嬢様も、このレミレアもね、立派な魔族です」
そう答えたレイにディレスはそっと尋ねた。
「・・・魔王から逃げてきたのか？」
その問いにレイは改めて自分達を思い返した。さぞや、慌てて見えたのでしょうねと自嘲する。
「・・・そうですよ！魔王閣下が馬鹿な奴らの術に嵌ってしまいましてね！混乱なさっているあの方から、尻尾巻いて逃げるしかな

かったんです！私達は、嬢様を守れなかったんです！それもこんな、癒せない傷を背負わせてしまったなんて・・・」
重い溜息を吐きながら、半ば投げやりに言い放つレイに、レミレアも暗く沈んでしまう。
そんなふたりに、ディレスは慌ててしまった。
・・・ダウニーに入ったのは女神を探すため。
・・・それは建前で、実際ディレスの狙いは目の前のこの精霊使いだった。
包帯男を川の側で見つけたときは、いつになく慌ててしまって、思わず、フォルトランと共に指差して叫んだくらいだった。
不機嫌な感じを隠しもせず踵を返した男に慌てて、追いすがろうとまでした。
幸い男のほうから、接触を試みてくれたけれども。
・・・治癒術を修めていてくれたフォルトランには感謝してもし足りない。
それほどに、この目の前の男に会いたかった。
先を急ぐ男の後を追い、たどり着いた先には、同年代の少年と、彼が抱える血塗れの少女。
虫の息の彼女の治癒を最優先で行って、その合間に、彼らふたりの話を途切れ途切れに聞いていた。
そして話の端々で大体を掴んだ。
彼らは理不尽な出来事で魔王の怒りを買ったらしい。・・・だからこうして逃げている。
魔王は本来ならば少女を守っていたらしい。
だが、悪意ある者のせいで記憶を喰われ、少女はそのために傷付いた・・・。
彼らは魔王の記憶を取り戻そうとしている。・・・少女のために。
ならば、彼らを引き止めるのも、この少女を使えばいいのではないか？
ディレスは囲いを狭め始める。せっかく飛び込んできてくれたの

だ。
ここで、逃がすわけには・・・いかない。
「貴殿らはこれからどうするのだ。その・・・力になれることもあるかと思うのだが？」
「はっ！人間ごときが口を挟むな！」
レミレアと呼ばれた少年が嘲りの声を上げるも、レイの手が差し出されて押し黙った。
先を促すような眼差しに、ディレスはレイを見たまま続ける。
「レイ殿。こんな森の中であの子をどう守る気だ。傷が癒えても失くした血液の量は半端ないようだ。このまま、ここに隠れるつもりか？夜はどうする。冷えてくるぞ。今のあの子には致命的だ」
レイの眼差しはディレスを捉えたままだった。
黒い瞳。険呑な眼差しが己を見つめている。怖気そうな自分を奮い立たせ、更に続けた。
「・・・私と一緒に来ないか。匿ってやりますよ」
「？」
一瞬あっけにとられた素の顔でレイがディレスを見た。
「レイ！」
レミレアがすかさず牽制の声を上げるも、それを押しやってレイは更に先を促した。
「・・・それで？」
「あのこの傷が癒えるまで。何ならその後も隠しましょう。魔族といっても貴方たちみたいな容姿なら人間で通る。傷が癒えるまで、貴方は、私に魔法を教える。傷が治ってもまだ、行き場がないならその後も匿う。そして貴方は私に魔法を教える。それでチャラです」
「魔法を？いいのですか。人間が魔族に魔法を習うなんて」
「決めていたんだ。ずっと貴方を捜していた。・・・だから私はここにいる」
「貴方、誰なんですか？魔族に教えを請うなんて、なんてまあ、破天荒な・・・」

呆れた声を出すレイの目の前で、ディレス・レイはにっと口角を上げて笑った。
怖いものなどない、若者特有の無謀な笑みだった。
「私の名はディレス・レイ。・・・リカンナドの第一皇子です」
それを聞いたレイの顔は、レミレア曰く、びっくり通り越して意表を突かれた顔だったそうだ。
「・・・リカンナドの、第一皇子・・・ね」
ある程度の時間がたってから、レイが歯切れ悪く呟いた。それに頷いてディレスは晴れ晴れとした笑みを見せていった。
「ええ。ビエナ国の兵の遺体を運んで来たでしょう？あの時あそこにいたのです。圧倒的な魔法力の前に手も足も出なかった！あれからずっと、私は貴方に会いたかった。捜していたんだ。で、あそこで天使に魅入られてる男は、アリアナのフォルトラン・デルサです」
その答えに、レイは眉をひそめた。レミレアがレイの服の裾を引っ張ってきた。
「どうするのさ、レイ」
「・・・悪くないですね。王族の庇護下に入り、魔族、人間の目を眩ませれば、あるいは嬢様を守り通せるかもしれません・・・」
それに。とレイは思うのだ。
「嬢様のために探していた魔法学校は・・・リカンナドにありましたな・・・」
「学校？」
レミレアの言葉にレイは頷いた。エイミールを思う。
「レミレア、貴方も私も自分の身は自分で守れますね。けれども、嬢様は・・・」
レイの言葉にレミレアも頷いた。
脆いからだ。傷付いて容易く流れる血。
少女の儚さは、弱さでもあった。それを少しでも無くせるのなら。
「・・・身を守る術として、魔法は嬢様にとって有効です。魔王

閣下の記憶が戻るかどうか、分からないのなら尚の事・・・」
その声にレミレアも同意した。
彼女が攻撃された時、彼女の守りが減った今、彼女自らの防衛力を高めておく為にも。
「魔法」が必要だった。
魔族に在りながら、魔力の無い彼女が生き延びる唯一の術。
だから、彼らは魔法力を求めた。
彼らの唯一を、これ以上泣かせないために。
「・・・リカンナドの皇子殿下、傷が癒えたら、彼女を魔法学校に入れてくれますか？そうしてくれたなら、私、貴方の先生になってもよろしいですよ」
・・・レイのその声に、ディレスは一もにも無く頷いたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、その頃。
空を行く従属の男が、キリエに連なる道を探し当てていた。
そして、もう一人。
地中深く、結界の網を潜り抜け、竜族の長自らが動いていた。
幾重にも張り巡らされた、結界の呪符の中。
静かにゆっくりと破滅が忍び寄っていた。
すうっと、床が、透き通る。はじめに黒髪の頭が、美貌の顔が、麗しの胸元が、魅惑の腰が、床から抜け出してきた。
そして。
驚愕に動けずにいた・・・あまりの魔力に身動きが取れずにいたのだ・・・魔軍幹部の男の前に。
「・・・見つけた・・・」
リアナージャ・ナーガはそう言って妖艶に微笑むと、髪を一筋さ

らりと梳いて見せた。
その麗しの軌跡に男は目を奪われて、動けなくなってしまった。
妖艶な物腰の美女に、微笑まれて。
彼は死を予感した。

第二十三話：不死者と皇子　2（前書き）

残酷注意！リアねーさまが、かーなーリー、やばい人になってます。

第二十三話：不死者と皇子　2

男の目の前に妖艶な美貌の女。
「り、リアナージャ、さま・・・」
男が震える声で呼んだ名前は、竜族の長の名前。
リアナージャ・ナーガは圧倒的な魔力と共にそこにいた。
男の目がせわしなく動く。逃げ道を捜し、逃げ口上を捜している、その浅ましい男に、ふんと鼻で笑ったリアナージャが。
「・・・のぅ、ローレン。椅子ぐらい勧めてくれても良かろう？」
「・・・は！た、ただいま！」
その慌てぶりにくく、と笑い、優雅に席に座って見せると、足を組んだ。
手触りの良さそうなドレスの端から覗く、輝かんばかりの美脚。
男の目線が釘付けなのを良い事に、リアナージャは優美に小首をかしげて見せた。
「・・・さて、ローレン・・・。此度の仕業、お主じゃな？・・・あぁ、言い訳は聞かんぞ。嘘も許さぬ。キリエと呼ばれる小娘を出せ、貴様が小娘を庇って死ぬか、小娘を差し出した後で死ぬかの違いじゃ」
男の心境はいかばかりか。
匿っても死。差し出しても死。
ならば？
「・・・お。畏れながら、リアナージャ様！私たちは、けして皆様を亡き者にしようとしたわけでは在りません！む・・・謀反ではないのです。私たちが成した事は、全て、魔族、魔王閣下の御為に、良かれと思って成した事！われわれは、ただひとえに、魔王閣下、側近の皆様方に、目を覚まして頂きたかったのです！魔族こそ、最強！魔族こそ、最良！敬愛する魔王閣下の御為に、煩わしい記憶を取り去ってしまえば、また更なる飛躍が望めると思ったのです！雑

多な記憶を取り攫えば、強大な力を振るいやすくなると・・・」
「・・・貴様が思ったのだな。われらではなく」
「り、リアナージャさま！私たちは、決して」
「・・・貴様如き小物に、わらわの記憶は無駄と取られのだな。このリアナージャも堕ちたものよの・・・。貴様如きに、この竜族の長を、侮られるとは・・・」
静かな怒りに身を震わす美女に、男は恐れたじろぎ、そして這い蹲った。
蹲り震えながら、それでも、声を出した。命永らえるために。
「わ・・・私は！魔界を魔王閣下をこよなく敬愛してございます！魔王閣下の御為に、成したのです。謀反ではございません！」
哀れに懇願する男の周りで、リアナージャの魔力が渦を巻く。
濃い魔力に苛まれ男が悲鳴を上げた。
「・・・ローレンよ。それでもそれは、わらわの記憶じゃ。だれにもやらんとわらわが決めた！だから、ひとつ問おう。消えた記憶は戻るのか？」
リアナージャの冷酷に灯る黒の瞳に魅入られて、男はがくがくと首を振った。
「・・・そうか。戻らんか」
リアナージャの呟きはぞっと背中を粟立たせる物だった。
「・・・キ、リエならば、或いは元に戻せるかも・・・そ、そうだ。キリエなら！元はといえば、あいつから持ちかけてきたのです！魔王閣下の御為に成すべき事を成そうと！」
浅ましくも命乞いをし、聞き入れてもらえないなら、仲間を売る。
醜かった。
醜いこの男に、まんまとしてやられたのだ！
リアナージャの怒りは果てが無かった。
「キリエか。しかしそれでも貴様が成した事柄は、目に余る。・・・身を持って後悔するがいい。わらわに、挑んだことを・・・」
リアナージャの魔力が瞬間ふくらみ破裂した。

男の断末魔の声を嫌そうに聞きながら、男を嬲る。
やがて、優雅な指先が、男の眼差しを受けながら伸びていく。爪先が、がくがくと震える男の額につぷ、と突き刺さった。
悲鳴が上がる。男の悲鳴に、哀れな声に、眉を歪めリアナージャは指先を振るった。
脳髄に行きついた爪先から、情報が腕を伝ってくる。
主要な仲間たちの情報。
取るに足りない者たちの中で異彩を放つ・・・女。
キリエの行方を捜した。
「・・・キリエとやらはどこにいるんじゃ。・・・ほぅ・・・もう、魔界にはいないのじゃな?」
男は声もなくリアナージャの優美な爪に脳髄をかき回されているだけだった。
かくかくと頷く。
「・・・ふむ。嘘ではないようじゃな。キリエはどこにいるのじゃ?人界か?」
リアナージャの指先が男の脳髄を探る音が響く。
「他の仲間は、まあ、取るに足りん輩ばかりじゃなあ・・・ガーランドおるか?」
「ここに」
声と共に鱗に覆われた精悍な面立ちの蜥蜴男が姿を現す。
「キリエとやらはわらわが追う。ガーランドは残りの輩を駆逐せよ」
「御意」
男の動きがどこかマリオネットじみてきた。
そろそろ限界かの、とリアナージャは思う。
脳髄に指先を浸し、脳を弄くりながら情報を引き出すのは難しくも無く単純な作業だが、確実な情報が、文字通り手に取るようにわかるので、重宝だった。
更に甚振りながら苦痛を味あわせるのも忘れない。

竜族の長に喧嘩を売ったのだ。報いは受けねばなるまい。
そして散々痛みを与え、気絶すら許さず、長い爪先で四肢をもいでいった。
さくりと切り込めば、切放される、パーツ。
血を浴びながら、冷めた眼差しでリアナージャはかつて動いていたものを見た。
側近の蜥蜴男の目も冷めていた。竜族の長に喧嘩を売って無事でいられるはずなどないのだ。
馬鹿な男だ。と目が言っていた。
「・・・まだ、死ぬでないぞ。死んだら許さぬ。・・・さ、仲間の姿を思い浮かべよ」
どこかうっとりとした表情で、リアナージャが男の耳にそう囁いた。
男の脳が、瞬間仲間の姿を映し出す・・・。
「ぐ、ぎゃ、あああああっ！」
まさにその時、リアナージャが男の眼球を引きちぎった。
片方の眼球をガーランドに放り投げ、もう片方、血が滴るそれを、舌先に乗せ、ゆっくりと味わう。　男の断末魔の声と同時に、キリエの肖像が、仲間の肖像が、脳裏に浮かぶ。
その姿。細部にわたるまで記憶する。
顔を上げたリアナージャは口角をゆったりと上げて微笑んだ。
「・・・仲間の姿、よう分かった。感謝するぞ、ローレン・・・。ガーランドも良いか？簡単に殺してはならんぞ？苦しめて苦しめて苦しめて・・・それでも殺すな。わらわが止めを刺すのじゃからな」
そう呟いて、結界の中に身を投じていく。足元から順々に床に沈みいくその身体。
「御意」と呟き、ガーランドが恭しく腰を折る。
最後の一瞥もローレンには与えなかった。
愚者の遺体は、原型を留めてはいなかった。誰が見ても、ただの汚物にしか見えないだろう。

「人界か・・・。何百年ぶりかのぅ・・・」
リアナージャ・ナーガは、一人ごち、転移の為に魔力を漲らせた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

不死者の言質を取ってやや浮かれ気味のディレス・レイはフォルトランを振り返った。
「フォルトラン！天使はどう？動かせそうかな？」
その声にややあってから、フォルトランが頷いた。
「大方の傷は癒しました。だが、やはりこんな森の中より、暖かな寝床のほうがいいでしょう」
気を失っている今動かすのは危険だが、ここに留まるほうが更に危険だ。魔獣もいる。
第一、いつ追っ手が来るのか分からない・・・。
ディレスの言葉にレイとレミレアは頷いた。
そして、「追っ手」と考えた自分達の意識の変化に沈み込んだ。
レイとレミレアは、魔王城のある方角を見上げ、悲しげに眉を寄せた。
青銀の瞳。藍色の瞳。黒の瞳。心配そうに瞳揺らして、追ってくるはずの過保護な方たちがやってこない。
その事実がどこか、悲しかった。
「・・・転移方陣をしきましょう。行き先は・・・リカンナドの王宮前の時計塔でどうですか？」
悲しみを振り払うようにレイが一、二度頭を振り、淡々と声を紡いだ。
その言葉に、ディレスが子供のような顔でレイを見る。
「王宮前の時計塔を、知っているのですか？」

純粋な驚きはディレスを年相応に見せた。
「随分昔、リカンナドに居を置いた事がありました。あれならば、残っているだろうと思ったのです。そこを拠点に転移方陣を敷きます。さ、嬢様の下に集まって」
レイの声にレミレアもディレスも続く。フォルトランは戸惑いの眼差しでレイを見た。
「下準備も無しにいきなり転移ですか？それは少し、無謀では・・・」
「過去に行った国なら転移陣を構築できます。ああ、治癒の術式も消す必要はありませんからね。貴方は嬢様の治癒に専念していてください」
「え・・・！」
フォルトランが驚きの声を上げる。
それもそのはず、別の術式を構築する為には、他の術式が発動していてはいけないのだ。
なのに、この男は事もなく治癒を続けろと言う・・・。
何もかもが規格外の男だった。
その存在も、魔族という事実も、振るう魔法も、その構成力も！
「では行きますよ」
フォルトランの戸惑いに気を使う事もなく、レイは術式を構成し、展開し始めた。
複雑な魔法陣が、青い光を発しながら描かれて行く。縦に横に円を描き線を描く。そしてことさら丁寧にエイミールの横たわる場所を駆け抜けて行く・・・。
かすかな光が明滅し、淡い光が消え去った時、そこに残る姿は無かった。
彼らはダウニーを去ったのだ。
・・・魔族の庇護から脱したのである。

第二十三話：不死者と皇子　2（後書き）

理性のたがなんて無いのが当たり前の魔族にとって、やはり、エイミールは箍だったんです。解き放たれた彼らは怖い。判らずに解いてしまった奴らはこれから後悔するけど、まー、おそいよ・・・。

第二十四話：金の少女と黒の少女

夢を見た。

青銀の眼差しが、優しく弧を描く。

私の大好きなにいさまの、大好きな、笑顔。

抱き上げてくれる腕が好き。緩く優しく回してくれる腕の強さも、抱き上げられるたびに掠める、青銀の髪も。静謐な香りが好き。・・・アルファーレンにいさまに抱かれていると安心する。

藍色の眼差しが好き。企んでいる顔、その煌く眼差しも。

楽しんでるか？と聞きながら、抱き上げてくれる腕が好き。そのまま、ぐるぐる回されて、眼を回すのも楽しかった。内緒だぞ！と言い合って、ひそひそ話もわくわくした。・・・アマレッティにいさまの明るい笑顔は安心できる。

黒い艶やかな瞳が好き。美しすぎて困るくらいのお顔を、もったいないくらいに崩しまくって大口開けて豪快に笑う。からかいを含んだ眼差しで、見つめられるとドキドキした。大きなお胸に閉じ込められると息ができなくて困るけど、リアナージャねえさまに包まれると安心する。

大好きでたまらない、私のにいさまとねえさま。

静謐なアルファーレンにいさま。剛健なアマレッティにいさま。豪快なリアナージャねえさま。

・・・いつか、彼らのお役に立てる私になりたかった。

精一杯背伸びしても敵わない彼らに、感謝と愛情と尊敬を注ぐだけではなく、役に立ちたかった。
彼らが誇れる妹になりたかったのだ。
・・・魔法に出会えたのは幸いだった。
レイも魔法なら私に向いていると言ってくれた。にいさまも説得して、人界へ赴いたら勉強して、立派な魔法使いになるんだと思っていた。
魔法使いになって、魔界へ帰ったら、にいさまとねえさまの為になにが出来るだろう？と考えては、嬉しくなった。先の未来が明るく開かれた感じがしたのだ。
・・・もう、これで、怯えなくていいんだと思った。
もう、いつ、捨てられるのか、と怯える事は無いのだ。と・・・思っていた。

甘い、にいさま達の雰囲気が、青く凄烈さを帯びてくる。眼差しが研ぎ澄まされて、貫く視線が痛い。

戸惑いに揺れる瞳で彼らを見た。・・・これは、夢のはず。

訳も無く息苦しくなる。動悸が激しくて、息ができない。・・・でも、夢のはず。

伸ばした手は弾かれてしまった。・・・これは、夢じゃ、ない、の・・・？

だってさっきまで、甘く微笑んでいてくれた。
だってさっきまで、いたずらっ子の眼差しで見守ってくれていた。
だってさっきまで、艶やかな微笑で私を見つめていてくれた。

容赦なく投げ捨てられて、冷たい眼差しで睨まれた。

・・・これは、現実。

首筋を締め上げられて、息ができない。

見つめる先に、いつもなら甘く蕩けるはずの・・・青銀。

にいさま。

にいさま。

にいさま。

・・・わたしはもう、いらないの？

＊＊＊

キリエは自嘲しながらそう思った。
・・・あの男にとって、実行犯のキリエの存在は諸刃の剣だった。
早々に屋敷から立ち去れと、声に出さずに言っていた眼差しを思い出す。
その眼差しは、夜の眷属の長の眼差しに似通っていて、キリエを苛立たせた。
・・・長はもういないのだ。自分を縛るものはもういない。
操られるまま、他者の記憶を食い尽くすことも無ければ、へまをしたと罵られる事も無いのだ。
夜の眷属の崩壊も、仲間たちの全滅も・・・夜の眷属の自業自得だと思っていた。
ただ、いなくなってしまったたった一人の仇をとろうと、乗り込んだ先で、その人の姿を目にするなんて・・・。
なんて、現実。
蹲りながら、腹に収めた高位魔力を抑える。もう何時間そうしているのか判らなくなっていた。
がつん、がつん、と頭を打ちつけ、血を流しながらも自我を保ち、必死に押さえつける魔力。
腹の中で渦を巻く記憶に、押しつぶされそうになる。
元凶はあの娘だった。
長が嘲りながらも、その影響力を手に入れることを夢見ていた娘。
『あれを手に入れれば、我らはまた表舞台にたてる！』
出来損ないで、役立たずな不吉な娘だと罵られていた金の娘。
内在する力を制御できずに恐れられ、蔑まれたおぞましい黒の娘。
夜の眷属でありながら、どちらも。
夜の眷属に認められずに捨てられた・・・忘れられた娘ふたり。
黒の私と金のお前。
甘やかな記憶が、脳裏で渦を巻く。

腹立たしくて何度も何度も頭を地に打ち付けた。
笑う金の娘の映像が、胸を焦がす。
身を苛む。
こんなにも、大事にされていたのだ。魔王の側であの娘は。
誰の記憶の中にも、この娘の笑顔が在った。
はにかんだ笑顔、煌く翠の瞳、優美に弧を描く艶やかな唇。
華のような、少女。
大事に大切に育まれた、金の娘。
悔しかった。うらやましかった。妬ましかった。
ただ、側にいて微笑んでくれる誰かの存在を、それすら望めなかった自分と。
溢れんばかりの愛情に包まれ、慈しまれていたお前と。
何が違ったのだろう。
同じ夜の眷属に生まれ、同じく忌み嫌われておきながら。
・・・蔑まれ罵られ愛など感じたことの無い私と、愛情に包まれ過ごしてきたお前。
うらやましくて。妬ましくて。

・・・たまらなかったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・・・うずくまったまま、内の魔力の本流に苛まれていたキリエは気付かなかった。
地を踏み駆ける、魔物の存在に。
地に潜み音も無く近寄る魔物の存在に。
藍色の魔物と、黒の魔物が、彼女を捜しここへ来たことに。

「やっと見つけた！」
威圧をこめた眼差しで見詰められて、ざっと鳥肌が立った。藍色の獣が、豹のような身のこなしで、うずくまるキリエの前で威嚇の声を上げた。
じゃり、と土を踏む足。その爪の鋭さに、大地に亀裂が入る。大きく撓った尻尾が揺れる拍子に大地を抉る。
ぐるる、と獣の喉がなる。
怒っているのだと物語る藍色の瞳はひた、とキリエに合わさっている。
逸らせないその眼差しに、背中が粟立った。
殺される。と思った。
「アマレッティ、それはわらわの獲物じゃ」
声と共に地面から、うねる邪身が現れた。空一面を覆うほどの、優美なからだは鱗に覆われている。
金に光る瞳、大きく裂けた口からは、蛇の舌が踊り出る。常には見せない本性を曝け出してまで追いかけてきた彼らは、お互いを認め合うと、冷めた眼差しを苛立ちに揺らした。
「・・・こいつは俺の獲物だ」
「わらわの獲物じゃ！」
「リアナージャ、手を引け」
「貴様こそ引かんか！」
ぎりぎりと見詰め合う二人の前で、今にも息絶えそうな顔色でキリエはうずくまっていた。
竜族の長と、獣族の長の諍いは、娘の動揺を誘った。
押さえつけていた・・・押さえ込んでいると思っていた、記憶がまたも膨れ上がったのだ。
「ぐっ！ううっ」
胸を掻き毟り、悶絶し始めたキリエの様子に、二人は一瞬、目をキリエに合わせた。
「げっ！げえっ！」

こみ上げるものを吐き出そうと腰を折り、地面でのたうつ女を冷めた眼差しで見る。
合点がいったのだ。
「・・・馬鹿め。夢魔如きに、俺の記憶が喰えると本当に思ったのか」
「・・・愚かじゃな。力の差を思い知れ。わらわを甘く見るでないぞ」
冷めた眼差しで、取るに足りない獲物を見る目で、口端に乗せた言葉。
キリエは冷水を浴びせかけられた気分だった。
腹の中で渦巻く記憶の中に、こんな眼差しの彼らはいない。
いつも柔らかい笑みを浮かべていたはずだ。
「いつも」それは、金の娘に向けられていた・・・。
瞬きすら忘れ、見入ってしまった彼らの優しげな眼差し。金の娘に向けられていたそれ。
・・・だが、今はもう、ごみを見る目だった。
そんな目で、見ないで欲しかった。
そんな、取るに足りないものを見る目で・・・見ないで欲しかった。

・・・ただ、私は羨んだだけだ。
羨ましかった。
愛されているあの子が。
妬ましかった。
愛されているあの子が。

同じ境遇でありながら、愛されて育ったあの子。
同じ境遇でありながら、愛されず育った私。

望んでも手を差し伸べてくれる者はおらず、唯一の暖かい記憶の

主さえも、あの子に囚われ。
求めても、何も残らず、足掻いても、抜け出せない自分。
その絶望感がキリエの気力を殺いでしまった。
押さえつけていた記憶たちが、外へ出ようと暴れだす。

・・・慌てて押さえつけたが、もう、手遅れだった。

ああ、と吐息をついてキリエが目を閉じる。
瞬間、霧散した彼女の身体から、淡い輝きがほとばしる。
泡沫の飛沫のように消えていく輝きたちに手を伸ばし、アマレッティとリアナージャは苦々しく見守った。
彼らの記憶が消えて行くのを、指先をすり抜けて行く様を・・・見守るしかなかったのだ。
竜族の長も、獣族の長も、闇に咲く花火を目で追う以外、なす術が無かったのだ。
そして、キリエの身体も霧散したまま、形を成す事は無かった。
彼女も、弾け飛んだ記憶たちと同じように。
・・・消えたのだ。

第二十五話：虚無と呼び声

憤りのまま、魔界に帰ったふたりの前に、整然と並ぶ高位魔族たち。
みな、みな、青い顔だった。
自分が加担した事柄への恐怖と、これから行われる粛正に怯えていた。

彼らを一瞥し、竜族の長は眉をゆがめた。
彼らを見やって、獣族の長は忌々しそうに目を眇めた。
そして、魔族、魔物の長である魔王閣下は。
青銀の瞳に嫌悪を浮かべそこにいた。
魔王の傍らに進むは魔族。竜の長。獣の長。
彼らはしばし瞳をあわせ、それから、彼らのほうを向いた。
途端に高まる緊張感。
裁定を待っている魔族たちは、ただひたすらに平伏し、怒りが過ぎるのを待っている。
魔王の怒りがどれほどのものか、謀りかねていた彼らは、逃げる事も、謝罪する事もできずにいた。
「・・・よくもまあ、これだけの数を揃えたものだな」
アマレッティが呟く。
「ガーランドとマクギーが連れてきた。何も言えずに震えているだけで、埒が明かない・・・」
アルファーレンがそう続ける。
「魔王に楯突く意味を知らずに加担した馬鹿な奴らじゃな」
リアナージャの言葉にいっそう震え上がった彼らは、顔色を悪くし、縋るように貴人を見上げた。
そんな彼らを尻目に、アルファーレンがリアナージャを流し見た。
「・・・首尾は」

その問いには、リアナージャもアマレッティも、舌打ちするしかなかった。
逃げたのだ。逃がしたのだ。キリエを！
「・・・消えやがった！腹ん中の記憶ごと、霧散した！」
「目の前で消えおった。忌々しい・・・」
腹立たしく言い募る、義兄弟を冷めた眼差しで見て取って、魔王閣下は落胆している自分に気が付いた。
落胆したのだ。記憶を追う意味さえ判らないのに、追わなかった自分を責めている自分に気付いて、彼は憤った。
それもこれも、すべては、この事態を引き起こした彼らのせい。
魔王を操作しようと企んだ、愚かな魔族たちのせい。
彼らを前に現れた、ようやくの怒りは、翻り見れば、己への怒りであった。
アルファーレンは自分への怒りを理解した。
記憶を求めなかった自分。
記憶を追わなかった自分。
それを後悔しているのだと・・・始めて思い知ったのだった。

「消えたものは仕方が無い。・・・仕方が無いが、腹立たしい・・・」
こんな事態を二度招く気はさらさらなかった。
だから。
彼は、彼らは、非道になる。
魔族の長に楯突いて、生き永らえることができるなどと、甘く見られてはいけないのだから。
せいぜい恐れおののいて自分の罪を見つめるが良い。
「・・・あの男の言葉じゃが、魔王は至高の存在じゃ。その魔王を謀ろうなどと、おこがましい思いを抱いた罪は重いぞ」
「・・・到底、貴様らの命ひとつじゃ、購えないな・・・」

「・・・今後のために、貴様達には生贄になってもらおうか？」
そう言って微笑んだ彼らは、禍々しいまでに美しかった。

魔族たちの拷問はそれぞれが、這い蹲り、殺してくれと懇願するまで（懇願されても続けたが）続けられた。
ある者は生きたまま、魔獣のえさとなった。息絶えるまで己が目でそれを見続けた。すぐに死ねないよう、処置を施されていたのだ。だが、彼はまだ序の口だった。
ある者は、自分の四肢が少しずつ切られていく感覚を、死してなお味わえるように不死者にされた。息絶えても、また次の瞬間には再生する手足を細切れにされ、男は泣き叫んだ。
ある者は魔族の中でも最も忌むべき輩に連日犯される為に、堕とされた。
またある者は、骨という骨を砕かれ、砕いた骨の変わりに木の棒を差し込まれた。
またある者は、関節を全て逆方向にねじられ、身動きできなくなった後、魔獣の群れに放り込まれた。犯され、噛み付かれ、助けを乞おうにも伸ばす腕は在らぬ方に伸ばされる。
身体をねじられ続け、体液すべてを搾り取られるまで続けられた輩もいる。
およそ、魔族といえども、目を背けたくなる光景を、彼ら三人は目を逸らすことなく見続けた。
それでも、癒えないこの虚無感。
じりじりと身を焼く怒りに我を忘れてしまいそうになる。
「・・・生温い」
魔王の呟きが魔族どもの耳に届いた。
拷問され、いつ死んでもおかしくない彼らの泣き声よりも、よほど小さい呟きが、どこまでも重く、どこまでも耳に響いた。
いっそ狂えたなら、楽なのだろう。涙を流しながら死を待つ彼らの思いは、魔王には届かない。

＊＊＊

ここに皇子の意中の姫がいると思い込んでしまった。
ある意味、ディレスは意中の魔法使い氏の下での修行に明け暮れていたのであながち間違いではない。
今日もレイの元で魔法を駆使して吹き飛ばされるディレスと、エイミールを見守るフォルトランの姿があった。
フォルトランの手土産は、花束。
エイミールの部屋に飾られ、居間に飾られ、玄関に飾られ、廊下に飾られ。
だが、しかし。
・・・気付けよ皇子ぃっ！と、レミレアは目で訴えた。
溢れてる。溢れてるよ！もういらねーよ！花の香りで溢れかえってるだろー！と、レミレアは目で更に訴えた。しかし、聞いているのか、判らない。
なぜなら。
フォルトランの眼差しは、エイミールに釘付け。そこからぶれない。
そして、今日も、レミレアは途方にくれる。溢れんばかりの花束を前に。
・・・どーすんのさ！これ！！！

「まったく毎日毎日。先生になるとは言いましたが、少しくらい気を利かせなさい。せっかく、嬢様とふたりきりなのに・・・」
とは、レイの言葉。ちなみにレミレアは数に入ってないらしい（不憫）。
「・・・待って！いても貴方は王宮に、来ないから！こちらから！来る以外、は・・・うわっ！」
間一髪逃れたディレスの真ん前で、不敵に笑う美貌の不死者。
風と光を交差し展開する速さに付いて行けず、ディレスはまたもや風を食らっていた。

吹き飛んだディレスの足元に歩み寄った不死者が、見下ろしてくる。
その黒い瞳。
「貴方の相手をしている間、あの銀の皇子が嬢様を独り占め（レミレア・・・）にするのですよ？これは、最早、私に対する嫌がらせですよね？仮にも師と仰いでおきながら・・・」
レイを取り巻く風の色合いが煌く光から、黒く冷たくなって行く。
それを見て、ディレスは背を粟立たせた。
「ちょっ・・・！まっ！待って、レイ殿！」
黒い風の塊がディレス目掛けて繰り出された。

・・・それって、八つ当たりって言うんじゃないですか！レイ殿おっ！！！

派手に吹き飛ばされる、皇子殿下を尻目に、レイの眼差しは館の一室を捕えていた。
一番良い場所にエイミールの部屋を定めた。風の通りも良いように精霊達にお願いもした。
包帯を外したレイの存在に気付きもせず、レミレアの問いかけにも応えない。
エイミールは日々、ただ窓から覗く景色を見ていた。
・・・いや、目に映しているだけで、見てはいない。
あの翠は何も見ない。
人形のようになってしまったエイミールの姿に、レイとレミレアは心痛める。

・・・エイミールは悲しみの渦から抜け出せずにいた。

目を閉じると、冷たい瞳が、心引き裂く。

ふとした拍子に、射る眼差しに貫かれる。
お前など要らないと、物言う瞳に息が止まる。
・・・でも、レイやレミレアに心配はかけたくない。
だから、笑おうと思うのだけれど、笑えない。声を出そうと思っても、できなかった。
そもそも、どうやって笑っていたのか、声を出していたのか、思い出せない。
・・・堂々巡りで、うまく息ができない。
傷が治るのと同じ速さで、心が癒えるはずも無く。傷が癒えたのに、癒えない心を抱えて、ぼんやりと空を見ていた。
空は青い。
どこまでも、青かった。
風が心配そうに彼女の周りでくるりと回る。つむじ風が起きた。
風が髪を靡かせて、気を引こうと躍起になっても、今のエイミールに、彼らと戯れる気はなかった。
ただ、そこに在る。・・・それだけだった。
・・・だから、それが現れた時も、精霊だと思ったのだ。風の精霊が気を引こうと集まったのだと思ったのだ。
・・・真っ白い子犬だった。
よろよろと現れたそれは、エイミールの側までやってくると、ぱたり、と倒れこんだ。
身動きしないまま、徐々に息が浅くなっていく。
それをぼんやりと見ていたエイミールの胸が遠くで警鐘を鳴らし

た。
息が浅い。身動きすらしない。
どんどん、衰えていく呼吸に。
自分が、重なった。
よく見ると、怪我をしている。白い毛皮が所々赤い。
上下する胸の動きに目を凝らし、エイミールは震える手を伸ばした。
そっと、触れる。
・・・あたたかい。
でも、このままだと、死んでしまう。
誰にも、気に止められないまま、死んでしまう。
息ができなくなって、手足が凍るように冷たくなって、死んでしまう・・・。
エイミールの頭の中には、それは嫌だという言葉しか浮かばなかった。
あわてて抱え上げて、血で汚れるのもかまわずに抱き込んで、声を。
・・・上げた。
「たすけて。・・・だれか、たすけて」
か細い声に、何があったと駆け込んだ彼らを待っていたのは、ぐったりした子犬を抱えたエイミールだった。
しっかりと周りを認識している翠から、零れ落ちる涙に一瞬焦った不死者は、気を取り直して、子犬を受け取った。

共に駆け込んできたフォルトランが、すかさず、治癒の術を始めてくれたおかげで、子犬は傷を癒していった。
その犬を黒い眼差しで射抜きながら、孤高の不死者は考える。

結界は完璧だった。
レイの許しが無ければ結界に近寄る事もできないはずだ。
ループする空間に繋がり、ここを訪れることなく別の空間に移動するはずなのに。

子犬は、傷付きながらも、エイミールの部屋にやって来た。

・・・この犬、一体、何なのか。
レイは、考える。

第二十六話：虚無と呼び声　2

エイミールは、傷の癒えた子犬をそっと抱き上げると、頬を寄せた。
それから、翠の瞳を閉じて、じっと子犬の心音に耳傾ける。
そうしてほうっと吐息をついて、目を開き「生きてる・・・」と呟いた。
久しぶりに耳にした嬢様の声だった。
か細くあがる悲鳴ではない。うなされ叫ぶ、声ではない。
まだか弱いが、しっかりした声だった。
揺れていた翠も、しっかりと前を向いていた。
そのことに柄でも無くほっとして、傍らのレミレアと時を合わせて止めていた息を吐き出した。
レミレアの黒の瞳と目を合わせ、目視で頷きあった。
・・・嬢様は、もう大丈夫だ。
そんな嬉しそうなふたりを、不思議そうに見上げて、エイミールはおずおずとレミレアの服の裾を引っ張った。
「？　なに？ねえさん」
「・・・あの、レミレア、この方、どなた？・・・この子を癒してくださってありがとうございます。その、お名前を・・・」
レイを見上げて、そう言ったエイミールにレミレアがしばし固まった。
「・・・嬢様、この顔ではまだお会いした事がありませなんだ。レイ・テッドにございます」
にっこりと微笑んだレイの艶姿に固まったエイミールであった。
にこにこと見詰めてくるレイの眼差しに恥ずかしいのか顔を真っ赤に染め上げるエイミール。
「えっ？ええっ？だって、レイって・・・はじめてあったときのお顔は（思い出して気が遠くなる）・・・！！！」

そんな彼女を前に。孤高のゾンビは。
・・・っ！かっ・・・可愛いです！エイミール嬢様！そのはにかんだお顔！垂涎モノですな！その一瞬の恥じらいを瞼に焼き付けて措けるなんて・・・！　あぁ、生きてて良かった・・・！！！
・・・悶えていた・・・。（もどってこーい！）

「さて。質問がありますでしょう？わかる範囲でお答えいたしますぞ」
ひとしきり、素顔に驚いた後でレイが改まってエイミールの前でそう言った。
エイミールは、ベッドの中で子犬を抱きしめ、レイとレミレアの顔を見上げた。
眉が寄せられ、瞳が苦痛に揺れる。けれども、エイミールは声を絞り出した。
「・・・にい、さまとねえさまは・・・私がいらなくなったの？」
「いいえ」
「ちがうっ！」
レイとレミレアが即答した。その声に押されるように、エイミールが更に続けた。
「・・・じゃ、なんで？いらない者を見る目だった。取るに足りないものを見る目だった・・・」
「魔王閣下と側近幹部の皆様は、記憶を喰われてしまったのです」
レイが淡々と話し始めた。エイミールの瞳が驚愕に見開かれた。
レミレアが後に続ける。
「夜の眷属の一員に、キリエと言う夢魔がいたんだ。そいつの術は、記憶を喰う」
「なぜ、キリエが魔王閣下を襲ったのか、わかりません。ですが、キリエは嬢様にまつわる記憶を全て食い尽くしたのです。・・・幸い、私はその時その場にいなかったので、記憶を喰われずに済んだ

のですが・・・あの時あの場にいたすべての者の記憶から嬢様の情報だけが抜け落ちているのでしょう」
「ねえさんが嫌いになったんじゃないんだよ。ねえさんと、会う前の彼らなんだ。不信がられて攻撃されても仕方が無かったんだ。だって・・・」

「「会った事もない者が、魔王執務室に入り込んだんだから」」

声が染み入るまで少し時間がかかった。
ぽつり、ぽつりとパズルが合わさって行く。
エイミールは握りしめた自分の手を見詰めていた。抱きしめた子犬は身動ぎひとつしないで大人しい。
ああ、そうか。
「・・・記憶に、残ってないの？私のこと、忘れてしまったの・・・」
にいさまも。ねえさまも。マクギーさんや、ガーランドさん。やさしい、やさしい、みんな・・・。
ああ、そうか。だから。
イラナイモノじゃなくて、認識すらされていなかった、のか・・・。

去来する、虚無感に囚われそうになったとき。レイの声がした。
「また、会えばいいのです」
俯いて真っ黒な空間を見ていたエイミールの心に、レイの声が突き刺さった。
顔を上げると、レイの黒い瞳が目の前にあった。吸い込まれてしまうくらい黒い、力強い瞳。
「・・・嬢様。忘れているのなら、覚えてもらえばいいのです。正々堂々彼らの前へ進み出て、自己紹介をしましょう。幸い、嬢様は前魔王の娘児。無視は出来ますまい？・・・魔法力を身につけて

精霊達を味方にして、彼らが無視できない実力をつけて、魔界に名を轟かせれば良いのです。強ければ強いほど、向こうから、打診してまいりますよ」
レイはそう言って、目を細めた。まるでそうなるのが当たり前だと言いたげな顔で。
エイミールの目を見据えたまま。言い切ったのだ・・・。

無視できないほどの実力をつけて、魔界に還る。

レイは簡単そうに言うけれど、それがどれほど大変か。魔王の側にいた少女には判る。彼らの力は途轍もなく大きく、偉大だった。
・・・でも。
それでも、なお。
逢いたいと、思うのだ。
だから。
エイミールは真っ直ぐにレイを見詰めた。揺るがない眼差し。
翠の瞳が己を捕らえた事に、歓喜するゾンビも、目の前の翠から黒い瞳を逸らさなかった。
「・・・また、会えるかな・・・？」
「ええ。必ず」

レイのその言葉に、エイミールは頷いたのだった。

・・・また、逢うのだ。
懐かしい彼らに。愛して止まない彼らに。
そのために、できる事をしようと、エイミールは誓った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・・・この虚無に身を任せてしまえば、或いは楽なのかもしれない。
喪ったものに取りすがり、ホシイと嘆く自分を許せなかった。
喪ったものの存在さえあやふやなのに。
それが、何なのかすら分からないのに。

・・・あの夜を境に、アルファーレンは自室へ行かなくなっていた。

執務室に簡易寝台を運ばせ、そこで休んでいる。
自室には結界を張り巡らせ、魔王でなければ入れないようにした。
空気すら入れ替わらぬように、注意深く結界で閉じ込める。
なぜそこまでする必要が在るのかと自問しても、判らないままだった。ただ、そうしたいからする。　誰かの面影を閉じ込めているのだという事に、彼は気付いてさえいない。
そうして、淡々と日々を過ごした。
いつものように執務をこなす。
空虚な抜け殻である事に気付く者はいない。
居並ぶ幹部達も、言葉に出来ない寂寥感に苛まされていたから。
慌しいのは彼らの周りだ。
・・・魔王の世話係の女達が、日替わりで魔王の寝台に侍る。
気が向けば抱き、気が向かねば殺す。
一夜を共にしても次の日の朝に冷たくなっている女達。
だが、魔族の中でも地位のある女達は、命かけて魔王の気を引こうとしていた。
妖艶な肢体の女が今宵も寝台に侍る。自分を後押しする一族の思惑を背負い。
・・・そして、今宵も恍惚のまま魔王に引き裂かれて女が息絶え

る。
その血潮を浴びて、なお、秀麗な魔王は顔をしかめた。
こんな香りではない。
こんな濁った色でもない。
もっと甘く、とろりとした色だった。
甘く脳髄を蕩かす香りだった。
・・・そうだ。あの時あの小娘が流した血のような。
魔王はかつて傷つけた娘の姿を思い返した。あの時、あの小娘が流した血。
甘く香る、鮮やかな色合いの、麗しの雫だった。
あの色、あの香りでなければ。
・・・私の渇きは癒せない。
＊＊＊

目の前で霧散はしたが本当に死んだか判らない事に苛立ちを募らせる。
追いかけて、追い詰めたと思ったのに！
苛立ちのまま情報を欲し、精査しては、また探す。
有益な情報をもたらす者は厚遇し、そうでなければ爪で引き裂いた。
気まぐれに女を抱き、思うさま足の間を抉りながらその喉元に牙を立て食いちぎる。
長く鋭い爪は容易く女をミンチに変える。
その血潮を浴びながら、これじゃない、と思うのだ。
浴びたいのはこんな、濁った不味い血潮ではない。
えもいわれぬ香りを思い出す。甘く香る、血の匂い。
あの時、あの娘が流した血の色は、他のどんな女の色より美しかった。
あの時、どうして俺は追わなかったのだろう？
追って、捕えて、味わえばよかったものを！
あの時心を襲った動揺は、きっと間違いだったのだ。
追いかけ捕えて、貪れと・・・頭のどこかで言っていたのに。
何を勘違いしたのだろう、と憤る。
・・・その思いのままに、彼は今宵も女を引き裂く。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・・・あの日からリアナージャは魔界人界を彷徨った。

キリエを捜し、行方をたどる。
人界の隅々まで魔力を走らせ、意識を読んだ。
人間の目玉をくりぬき、それが見てきた記憶をさかのぼる。
だが、キリエの行方はつかめなかった。
・・・まさか、本当に霧散したのか？
忌々しくも夢魔如きに遅れを取った、その事実。
腹立たしくてまたイキモノを引き裂いた。
気まぐれに男を誘い、よがり狂わせて絞め殺す。
気まぐれに女を拾い、目玉抉って舌先で味わう。
身をあわせ、震える女を官能に引き落とすのは楽しかった。

だが、媚びるような眼差しが気に入らなくて何人の目玉をくりぬいたか、何人食い殺したか。
もう、数さえ覚えていない。
その血潮を浴びて、リアナージャは自問する。

もっともっと、綺麗な色だった。もっともっと、良い香りだった。

甘くとろりと滴った、彼の娘の流した血潮は・・・。

こんな濁った色ではない。

こんな生臭い香りじゃない。

あの娘のような、色と香りの血を味わえたなら。
この胸のむかつきも、いやされるのだろうか・・・？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

エイミールが現実を認め、一歩踏み出してくれた事に安堵したレイとレミレアだったが。
・・・心配事がひとつだけあった。
エイミールの手から、食事の時間だと称して攫ってきた子犬。
前を向くきっかけをくれたのは、この子犬のおかげだという事は重々承知している。
目の前の高さに抱え上げて目を合わせる。お世辞にも尻尾を振る気配すらない。エイミールに見せる愛想のよさと、われらに向けるこの眼差しの違いはなんだ。
どこから見てもただの子犬だ。だが、ふたりは、子犬の存在に厳しい目をむけずに入られなかった。
自負がある。
自身がかけた結界術を抜けてきたのだ。目を眇めずにはいられない。

偶然などありえない。このレイ・テッドの術にまさかは無い。

自負がある。
自分の敷いた探索網に引っかかりもしなかったこの子犬。
屋敷に張り巡らせた、網の目を潜り抜けてくるなんて。

偶然であるはずが無い。このレミレア・パルナスの夜の目に、映らぬ影があるなんて。

「「貴様、いったい何者だ？」」

そんな厳しい眼差しを一身に受ける子犬は、ふん、と鼻を鳴らしてふたりを睨みつけた。

第二十六話：虚無と呼び声　2（後書き）

さ、治那さま。ご一緒にどうぞ。
「おばかさあああん！！！」
はい。別の女に手を・・・のところで、マジ焦りました。予知能力者？
ええ、閣下の言い訳としましては。
虚無を埋めるために女に男を埋め（げーふげーふ）ていたわけですが、情もへったくれもありません。顔も名前も覚えてません！って言うか、一言も交わさずコトに及んで、しかも引き裂いてます。生き残ってる女はいません！・・・なので、置いていかないでー！

読者の皆様へ。

いつも読んでくださっている読者様へお知らせがあります。

このたび「小説家になろう」さまで、描写におけるガイドラインが発表されました。

（何のこっちゃ、という方は、なろうトップページの重要なお知らせをお読みくださいませ）

今までなら、これくらいならいいかな～で、すんでいたところが、明確に線引きされます。

それに伴ない、作品の手直しもしました。

もう一作の「正しい国の作り方」は手直しし、そのまま掲載してあります。番外についてもこのまま掲載していこうと考えております。

しかしです。

魔法と変態の方は、Ｒ１８に変更し、裏へ持っていくことに決めました。

やはり、物語の性質上、シスコンで、ロリコンで、近親相姦望んじゃいかんでしょう、と。人として！

・・・いや、魔王様だけどさ。それ以前に、「エミー以外に反応するかあっ！！！」って叫んでますけどさ・・・。

やはり、このままオモテで続けるのは難しいという判断をしました。

余すとこなく書いていきたいと思っておりますので、年齢制限に

引っかかる方には申し訳ないのですが・・・。あと三年たったら、探しに来てね！
イタサも、甘さもあってこその、魔王様とエミーですので。

そして、拙い私の小説を読みに来てくださった方たちに感謝いたします。
作品も、作者も感謝で一杯です。

・・・うわー・・・アルファーレン閣下が、手招いています。なんでしょか・・・。

「記憶を失ったこの中途半端な状態で、オモテから姿を消すのは心苦しい」・・・と。はあ。
「私とエミーのラブラブは、作者が保証したので、安心して欲しい」・・・と。いえ、保証は・・・します！めっさ、します！！！
ガクガクブルブル。（青銀の眼差しに射抜かれました！）
「他のふたりはどうでもいいが、ゾンビの扱いには不満がある」・・・ご、ごもっとも・・・。
「・・・人界の二人組（あれ）はなんだ・・・」く、雲行きが怪しいので、逃げていいですか・・・？

さて。

今後の更新は、裏・・・ムーンライトで行います。

小説家になろうさまのトップページから「サイト案内」「なろうグループ一覧」を探して下さいますとお分かりいただけるかと思います。ぁ、勿論年齢に達していない方はダメですよ！

今までありがとうございました。
これからも付いて来てくださる方は、今後とも、どうぞよろしくお願いいたします・・・。
それでは、またどこかでお会いいたしましょう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2571j/

魔法と変態

2011年2月20日14時34分発行